

サポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第3冊

高松城跡（西の丸町地区）Ⅰ

2001. 8

香 川 県 教 育 委 員 会
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第3冊

『高松城跡(西の丸町地区) I』正誤表

この用紙をなくす前に書き換えもしくは貼り付けをお願いします。

箇所	誤	正
序文 5行目	サンポート高松整備事業	サンポート高松総合整備事業
序文 8行目	城下	城内
序文 14行目	高松整備局	高松推進局
例言 2行目	サンポート高松整備事業	サンポート高松総合整備事業
例言 4～5行目	江戸時代には城下に含まれ、城の縄張りとしては外曲輪の西北部分に相当する。本来の西ノ丸は本丸の西にあり城内である。	同じ城内であるが、城の縄張りとしては外曲輪の西北部分に相当し、本丸の西に接する本来の西ノ丸とは地点が異なる。
1頁左列28行目	頼茂	頼重
6頁左列6行目	西の丸	西の丸町
25頁右列25行目	前節	第1節
30頁左列最下行	城下	城内

注意！ 文字のある行を1行とし、広い行間も行として数えないで下さい。

序 文

香川県教育委員会では、四国横断自動車道や高松東道路の建設、高松空港跡地の整備など、大規模開発に伴う埋蔵文化財の発掘調査と出土文化財の整理研究・報告書刊行の業務を、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターに委託して実施しております。

このたび、「サンポート高松整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第3冊」として刊行いたしますのは、平成11・12年度に調査を実施しました高松市西の丸町に所在する高松城跡(西の丸町地区)A地区についてであります。

本地区では、江戸時代の掘立柱建物跡・柵列・溝・石垣などを検出しました。いずれも高松城下の変遷を復元する貴重な遺構で、建物等の方位や位置からある時期を境に土地割りと土地利用が大きく変化したことがわかってまいりました。

本報告書が本県の歴史研究の資料として広く活用されますとともに、埋蔵文化財に対する理解と関心が一層深められる一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から出土文化財の整理・報告にいたるまでの間、県土木部サンポート高松整備局並びに地元関係各位には多大のご協力とご指導をいただきました。ここに深く感謝の意を表しますとともに、今後ともよろしくご支援賜りますようお願い申し上げます。

平成13年8月

香川県教育委員会

教育長 折原 守

例 言

1. 本報告書は、サンポート高松整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告の第3冊である。本書には、香川県高松市西の丸町に所在する高松城跡（西の丸町地区）A地区の報告を収録した。なお、現在西の丸町となっている行政地区は江戸時代には城下に含まれ、城の縄張りとしては外曲輪の西北部分に相当する。本来の西ノ丸は本丸の西にあり城内である。このため、平成7～12年度に行われたサンポート高松総合整備事業に伴う調査は西の丸町地区或いは西外曲輪と呼び、本来の西ノ丸とは区別している。また現行政地名を指す場合には「の」はひらがなで、江戸時代の縄張りを指す場合にはかたかなで表記している。
2. 発掘調査は、香川県教育委員会が県土木部サンポート高松推進局から委託され、香川県教育委員会が調査主体、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが調査担当者として実施した。
3. 発掘調査の期間及び担当は以下の通りである。

平成11年度（調査時11G区及び11H区）
平成11年4月1日～6月23日
古野徳久、豊島修、森澤千尋

平成12年度（調査時12F区）
平成12年11月27日～12月22日
古野徳久、黒川和仁、小林明弘
4. 調査にあたっては、次の機関の協力を得た。記して謝意を表したい。

県土木部サンポート高松推進局
5. 報告書の作成は、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが行い、編集は古野が担当した。
6. 本報告書で用いる方位の北は、国土座標系第IV系の北であり、標高はT.P.を基準としている。
7. 本書に用いている遺構記号は次の基準に拠っている。

SB：建物跡（礎石・掘立柱等すべてを含む） SA：柵列 SP：柱穴（厳密には柱穴以外のものも含む）
SK：土坑 SD：溝 SZ：その他の遺構 SX：遺構であるか判断不能なもの

なお、遺構記号の次に記す「a」は、分冊となる遺跡報告書単位で採用する地区名を表しており、第1分冊にあたる本書収録地区はA地区としたため「a」となる。なお、既刊行の概報は年度単位の調査区名を採用しており同一の遺構でも、本報告書とは遺構番号が異なる（遺構番号対照表参照）。
8. 挿図及び遺物観察表で表現した色調記号は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖1992年版』を用いて表す。また、残存率は口縁部の全周に占める割合であり、口縁部が欠ける場合は底部を用い、それ以外は表示を省いた。

目次

序文

例言

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査の経過	4
第3節 整理作業	4
第4節 発掘調査及び整理作業の体制	4

第2章 調査の成果

第1節 基本層序	6
第2節 第1面の遺構	11
第3節 第2面の遺構	14
第4節 第3面の遺構	23
第5節 整地層出土の遺物	26
第6節 包含層出土の遺物	27
第7節 攪乱出土の遺物	29

第3章 まとめ

遺構番号対照表

遺構別出土遺物一覧

遺物観察表

写真図版

報告書抄録

挿図目次

第1図	遺跡位置図(1)……………2	第20図	S D a01 出土遺物実測図 (S=1/3)……………21
第2図	遺跡位置図(2) (S=1/1200)……………3	第21図	S Z a01 平・立面図 (S=1/30)……………22
第3図	遺跡土層図作成位置図 (S=1/150)……………7	第22図	S B a02 平・断面図 (S=1/50)……………22
第4図	遺跡土層図(1) (S=1/40)……………8	第23図	S B a03 平・断面図 (S=1/50)……………23
第5図	遺跡土層図(2) (S=1/40)……………9	第24図	S B a04 平・断面図 (S=1/50)……………23
第6図	遺跡土層図(3) (S=1/40)……………10	第25図	S B a05 平・断面図 (S=1/50)、 出土遺物実測図 (S=1/3)……………24
第7図	遺跡土層図(4) (S=1/40)……………10	第26図	S A a02 平・断面図 (S=1/50)、 出土遺物実測図 (S=1/3)……………24
第8図	主要遺構見取り図 (S=1/300)……………11	第27図	S P a183 平・断面図 (S=1/30)……………25
第9図	12F区遺構配置図 (S=1/100)……………12	第28図	ピット出土遺物実測図 (S=1/3)……………25
第10図	11H区遺構配置図 (S=1/100)……………13	第29図	S K a01 断面図 (S=1/30)、 出土遺物実測図 (S=1/3)……………25
第11図	S A a01 平・断面図 (S=1/50)……………14	第30図	S K a02 出土遺物実測図 (S=1/3)……………26
第12図	S A a01 出土遺物実測図 (S=1/3)……………15	第31図	S K a06 出土遺物実測図 (S=1/3)……………26
第13図	S B a01 平・断面図 (S=1/50)、 出土遺物実測図 (S=1/3)……………15	第32図	S D a02 断面図 (S=1/30)、 出土遺物実測図 (S=1/3)……………26
第14図	ピット・土坑平・断面図 (S=1/30)……………16	第33図	整地層出土遺物実測図(1) (S=1/3)……………27
第15図	S P a204 平・断面図 (S=1/30)……………16	第34図	整地層出土遺物実測図(2) (S=1/3)……………28
第16図	S K a04 断面図 (S=1/30)、 出土遺物実測図 (S=1/3)……………17	第35図	包含層出土遺物実測図 (S=1/3)……………29
第17図	S K a07 出土遺物実測図 (S=1/3)……………18	第36図	攪乱層出土遺物実測図 (S=1/3)……………29
第18図	S K a08・S D a01・S Z a01 断面図 (S=1/30)……………19		
第19図	S K a08 出土遺物実測図 (S=1/3)……………20		

表目次

第1表	遺構番号対照表(1)……………32	第6表	出土遺物観察表(3)……………37
第2表	遺構番号対照表(2)……………33	第7表	出土遺物観察表(4)……………38
第3表	遺構別出土遺物一覧……………34	第8表	出土遺物観察表(5)……………39
第4表	出土遺物観察表(1)……………35	第9表	出土遺物観察表(6)……………40
第5表	出土遺物観察表(2)……………36		

図版目次

図版1	12F区調査終了(北より) 12F区調査終了(北より)	図版10	12F区 S D a01 土層断面②(北より) 12F区 S D a01 土層断面③(北より)
図版2	12F区遺構完掘 (東より、SDa01より東部分) 12F区 S A a01 及び標高0.7mでの 遺構検出状況(東より)	図版11	11H区 S Z a01 調査風景(南より) 11H区 S Z a01 と S K a08 との共存関係 (南より) 11H区 S Z a01 と S K a08 との共存関係 (南より)
図版3	11H区第2面調査終了(西より、中央部分) 11H区第2面調査終了(西より、中央部分)	図版12	11H区 S Z a01 前面石崩落状況(南より) 11H区 S Z a01 石積み状況(東より)
図版4	11H区第2～3面遺構完掘(西より) 11H区第3面遺構完掘(東から)	図版13	11H区 S Z a01 北端部(南西より) 11H区 S Z a01 裏込め石状況(北より)
図版5	11H区第3面下位完掘状況(西より) 11H区東壁土層(南端部分)	図版14	11H区 S Z a01 (北より) 11H区 S Z a01 第2面整地後状況(北より)
図版6	12F区 S A a01 土層断面 (南東より、後方杭残存検出) 11H区 S P a190・106 礎石等状況(西より)	図版15	12F区 S Z a01 石抜き取り後埋土(南より) 11H区 S P a183 柱痕検出(西より)
図版7	12F区 S P a204 土層断面(南より) 12F区 S P a204 根石検出(北より)	図版16	11H区 S P a068 詰め石検出(南西より) 11H区 S P a068 詰め石・根石状況(西より)
図版8	11H区 S P a103 土層断面(南より) 11H区 S K a03 土層断面(西より)	図版17	11H区 S D a04 立面(西より) 11H区 S D a04 立面(西より)
図版9	12F区 S D a01 土層断面①(北より)	図版18～22	出土遺物(1)～(10)

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経過

高松市西の丸町における高松城跡の発掘調査は、平成7年度から開始したサンポート高松関係の区画整理事業に始まる。平成11・12年度には、区画整理部の東側に接する都市計画街路高松駅前線の拡幅整備に伴い、西の丸町11-1番地から高松城中堀の南側を東西に走る浜街道に面する14-1番地までの間の発掘調査を実施した。調査は対象地の建物撤去後となるため、サンポート高松の区画整理の調査と时期的な調整を行いながら時期を分けて実施した。発掘調査は建物の移転が終了した箇所から遺構の残存状況を確認した後、遺構が残存する箇所を対象とし、平成11年度が南部の浜街道との交差点部で390㎡を、翌平成12年度は北部の280㎡で実施した。また報告書作成に伴う整理作業は、平成12年度当初は予定していなかったが、サンポート高松整備事業の区画整理区域にあたる浜ノ町遺跡の調査着手時期の一部延期に伴い、高松城跡の都市計画街路部の整理作業を平成12年度12月から3月にかけて行った。

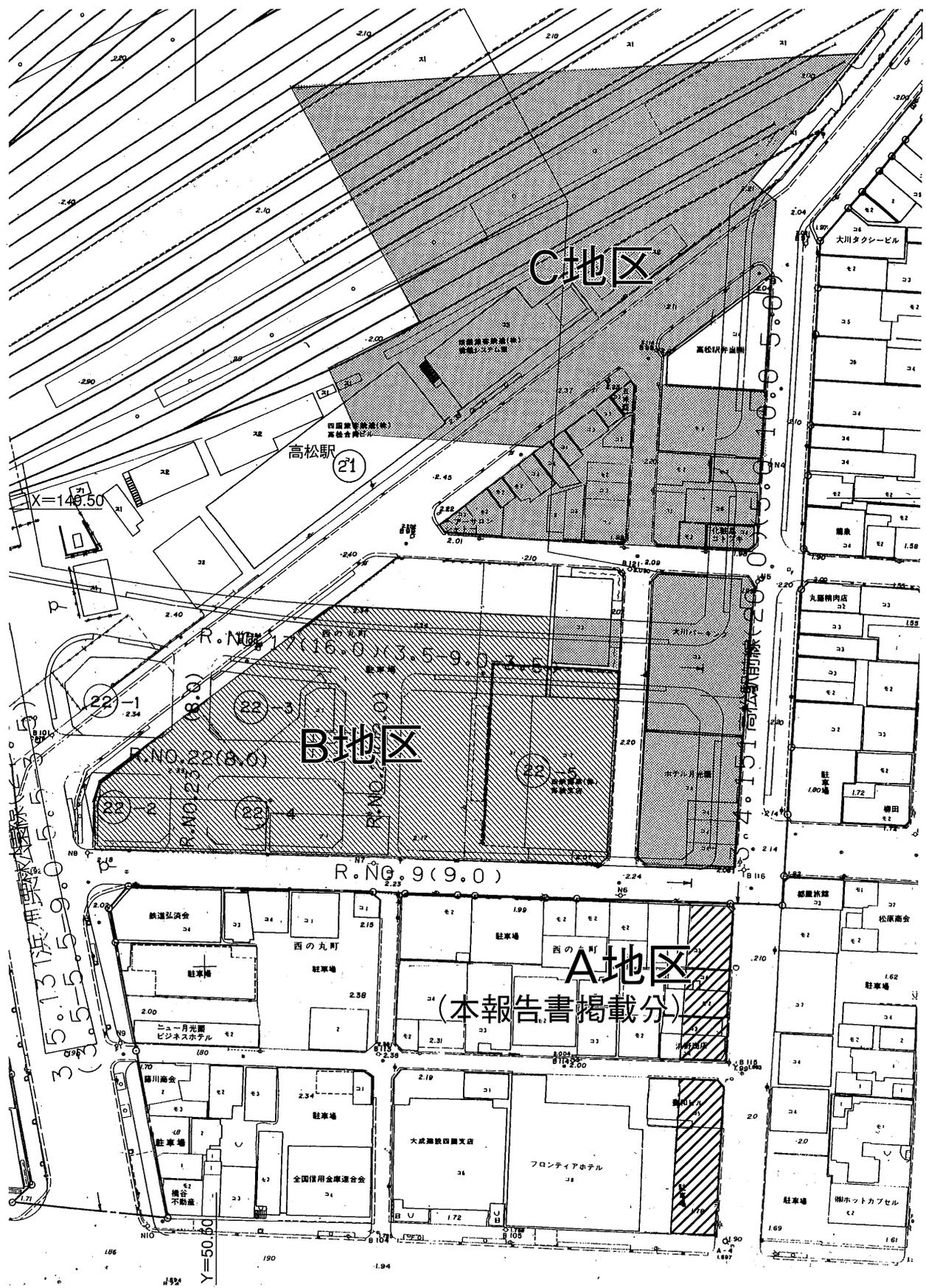
サンポート高松関係を含め西の丸町での発掘調査は、高松城の当時の縄張りからすると中堀と外堀から延びる西浜舟入との間に位置する外郭部に相当する。中郭部と外郭部の出入りは、生駒期の高松城を描いた古城及古戦場図（国会図書館蔵）では帯曲輪の桜馬場中央にある大手門と後の月見櫓及び渡櫓の南側に搦手口が描かれているだけでその他の連絡通路はない。松平期になり初代頼茂の頃まだ東ノ丸が造営される前の状況を示す県指定文化財の高松城下図屏風には生駒期の古城及古戦場図に局方が描かれている箇所が改修され、堀が部分撤去され桜馬場から西へ直進できるようになり、帯曲輪が西にと取移した箇所の北の隅が切られ中堀に橋が架かっている様子が描かれている。屏風絵では帯曲輪の南西の隅はまだ隅櫓（烏櫓）が築かれていず、設けられた橋の部分もまだ櫓や番所が整っていないように描かれており、改修の過渡的様子がうかがえる。その後東ノ丸が造営され、桜馬場に櫓が築かれ、大手門の閉鎖により、桜馬場の役割が大きく変化し、東西に外郭への出入り口が築かれる。東の太鼓櫓口が大手として使用され、その外の外郭に大下馬が、西の出入り口の外には西下馬が設けられたものと考えられる。今回の調査対象地では、生駒期においては中堀に面した通路が設けられ、その内側には家臣の屋敷地が、その後松平期になり橋の設置と共に出入り口が

整備されるとともに屋敷地は大老の大久保家だけが外曲輪の西に設けられ、御門側には出入りに即した施設（西下馬等）の整備がなされる。こうした状況が想定されるが、対象地が高松市の駅前を中心部であることから明治以降の開発がなされており、遺構確認は、かなり難航することが見込まれた。

今回報告する街路区の調査では、南北の方向を持つ石組みの基壇や溝が検出され、生駒期から松平期にかけての様子が明らかになってきたと考えられるが、調査区内では中堀の西側の護岸石垣等は検出できなかった。サンポートの区画整理部の調査で波止状の石積み構造物を検出したがその位置からすると現在の高松駅前線の道路内に、中堀の西岸は位置するものと考えられる。



第1図 遺跡位置図(1)



第2図 遺跡位置図(2) (S=1/1200)

第2節 調査の経過

今回報告するA区は新高松駅前広場への南からの正面進入路となる県道高松駅前線のために、現道を拡幅することとなり調査が行われた。拡幅は西に10m幅で行われるため、調査もまた東西幅10mとなった。これを交差する道路や現構造物の撤去時期により、3つの小調査区に分けて調査を行っていった。平成11年度にはそのうち、南側の長さ33mの11H区と、それと道路を挟んだ北側6mの11G区を調査した。この年は新高松駅と駅前広場を中心とした地点が主要調査部分であったが、調査準備の整った11H区は4月27日から調査を開始した。調査は直管方式で、面積が狭いため排土は場外搬出となったものの、排土仮置き場は隣接して確保せねばならず、一度の調査面積は200㎡程度と小さなものになった。調査は順調に進み、作業進捗を

効率的に進めるために主要調査部分にある11C区も5月25日から同時並行で調査を進めた。6月9日には現構造物の撤去の終わった11G区の予備調査を行い、現構造物の基礎による遺跡の消滅を確認したため、これで調査終了とした。6月15日からは仮排土置き場となっていた11H区残り約100㎡の調査に入った。ここも8割以上が現構造物の基礎により遺跡が消滅していたため、23日には調査が終了した。

残る12F区は平成12年11月に現構造物の撤去が完了したため、11月27日に調査を開始した。11H区同様の調査方式で行い、こちらも現構造物の基礎により北半分で遺跡が消滅していた。12月22日に調査が終了した。

第3節 整理作業

12F区の調査の終了した平成13年1月から3月の間に行った。本来であれば、年度当初に整理作業計画を組んでいないため、整理を行わない予定であったが、12年度の当該事業の主要調査対象であった浜ノ町遺跡の調査中大規模な戦後の攪乱を確認したことにより調

査期間が短縮され、残る3月までは平成11・12年度の出土遺構・遺物を対象とした基礎整理及び平成13年度上半期刊行を急ぎたい街路部分の整理作業を前倒しで行っていくこととなった。

第4節 発掘調査及び整理作業の体制

平成11年度

香川県教育委員会事務局文化行政課

総括 課長 小原克己
課長補佐 小国史郎
副主幹 廣瀬常雄

総務 係長 中村禎伸
主査 三宅陽子
主査 松村崇史
埋蔵文化財 係長 西村尋文
文化財専門員 森 格也
主任技師 塩崎誠司

財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

総括 所長 菅原良弘

次長 川原裕章
総務 副主幹兼係長 六車正憲
副主幹兼係長 田中秀文
主任主事 細川信哉
調査 参事 長尾重盛
主任文化財専門員 藤好史郎
文化財専門員 古野徳久
主任技師 豊島 修
調査技術員 森澤千尋

平成12年度

香川県教育委員会事務局文化行政課

総括 課長 小原克己
課長補佐 小国史郎
副主幹 廣瀬常雄

総務	係	長	中村禎伸
	主	査	三宅陽子
	主	事	亀田幸一
埋蔵文化財	係	長	西岡達哉
		文化財専門員	森 格也
		文化財専門員	宮崎哲也

財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

総括	所	長	菅原良弘 (～10.31)
			小原克己 (11.1～、兼務)
	次	長	川原裕章
総務	副	主幹	大西誠治
	副主幹兼	係長	六車正憲
	主任	主事	高木康晴
調査	参	事	長尾重盛
	主任	文化財専門員	藤好史郎
		文化財専門員	黒川和仁
		文化財専門員	古野徳久
	主任	技師	小林明弘

調査・整理に携わった方々は以下のとおりである。

作業員

多田敏夫、川田悦子、久利文子、富田英三、三谷恵子、土居智江子、清水節子、藤井サヨ子、杉山周二、山本秀雄、百歩静子、松本悦子、井下美佐子、中原トヨ子、井下ミチ子、塚原進、高橋美佐子、岡田カネ子、百生享子、中村芳子、長山キミエ、渡辺喜彦、元山富子、糸目八重子、串田光子、高木輝男、高木ミチ子、影山弘、大塚純司、塚本隆、柏原法雄、松本康弘、北迫高男、林俊雄、満丸文二、上原光世、辻上トミ子、西村和代、満丸香代子、宮地恵美子、西崎文子、林テル子、堀上幸子、網谷チズ子、松本和子、日下千鶴子、宮武和子、今井由記子

現場整理作業員

高澤由起子、小笠原千恵子

整理作業員

東條俊子、久保真由美

第2章 調査の成果

第1節 基本層序(第3～7図)

高松城跡(西の丸町地区)の調査は平成7年度から開始された。これ以前には高松城関係の大規模な調査は本丸の東にある東ノ丸が中心であったため、距離の離れた東ノ丸での層位関係を援用して西の丸地区の調査を行うことは不可能であった。このため当初は礎石の存在による遺構面の把握から始め、以下遺構の掘り込み面や層位を把握していきながら、遺構面の存在をおさえていった。平成8年度の調査によりその把握はおおよそ完成し、それらは年度の概報に記されている。

今回報告する箇所は、平成11・12年度に調査が行われたため、平成8年度の成果を用いて調査を進めた。しかし、平成8年度の層位と完全には整合せず、土層の境による遺構面の想定を行いながら実際には標高で記録を残していった。これはまた整理作業時に調査時の遺構面の同定がまちがっていることが判明した場合を考慮してのことでもあった。

整理段階に至り、改めて平成7・8年度調査地と層位の比較検討を行ったが、整地による土の堆積に起因して隣接した場所でありながら用いた土が著しく異なっていることが明らかになり、結局完全な一致をみなかった。そこでやはり将来的な再検討を考慮し、今回報告する箇所のみ遺構面の認定をまず行い、それに従って遺構や遺構の変遷の報告をすることにし、最後にその結果による遺構面の時期と基準層の把握とから平成8年度概報の遺構面との整合を検討してみることにする。

以下、各地点毎に層序の記述を行っていく。

①・②12F区・11H区東壁 (第3～5図、土層位置①・②)

1層とした調査前に存在した建物による攪乱は深いところで標高0.9mの範囲まで及ぶが、面的には1.5mを境とする。この下には2・3層とした礫と粘質土を交互に敷き並べた厚さ20cmの整地単位がある。これは11H区中央畦東端でも認められることから一定の範囲に広がることとわかる一方で、11H区南壁や掲載していないが12F区西壁には認められないことから、12F区・11H区の東側にのみ存在したことがわかる。遺物はほとんど出土していないが、恐らく12F区・11H区東の現道路に関わるような近代以降の整地単位と考える。

4層以下を幕末までの層と考えたが、これは3層と

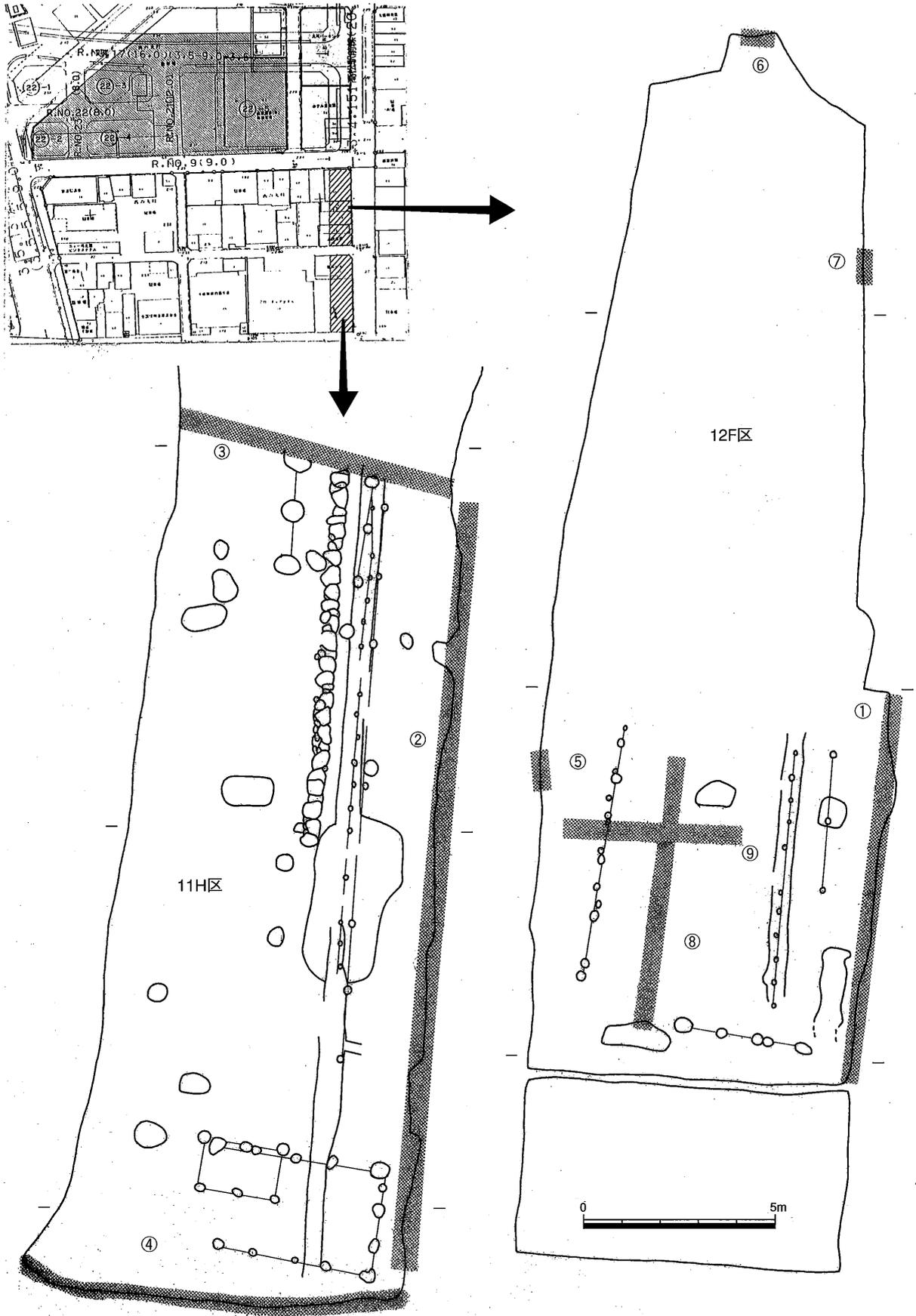
の間に堆積層全体の中で最も大きな差異が存在することと、わずかな層出土遺物の中にあっても近代以降のものが含まれていないことによる。11H区南壁では類似する層が1.45mの高さまで残る。今調査区ではこれが近代の層が最も高くまで残っている部分である。従って、この高さ以上に幕末の遺構面が存在したことになる。これを第1面とする。

4～7層は柔らかい砂質土で構成され、その間に薄く5や6層が挟まれる。全体としては分ちがたく堆積するため、これを一つの整地単位と考える。11H区部分でこれに対応するのは22～26・33層である。23層には炭・焼土が混じる。33層下部にも炭の層が線状に走る。42層は22層上面から掘り込まれた大型の土坑状を呈するが、平面的には遺構として検出していない。21層はこの面から掘り込まれている土坑の埋土で礫を多量に含んでいた。

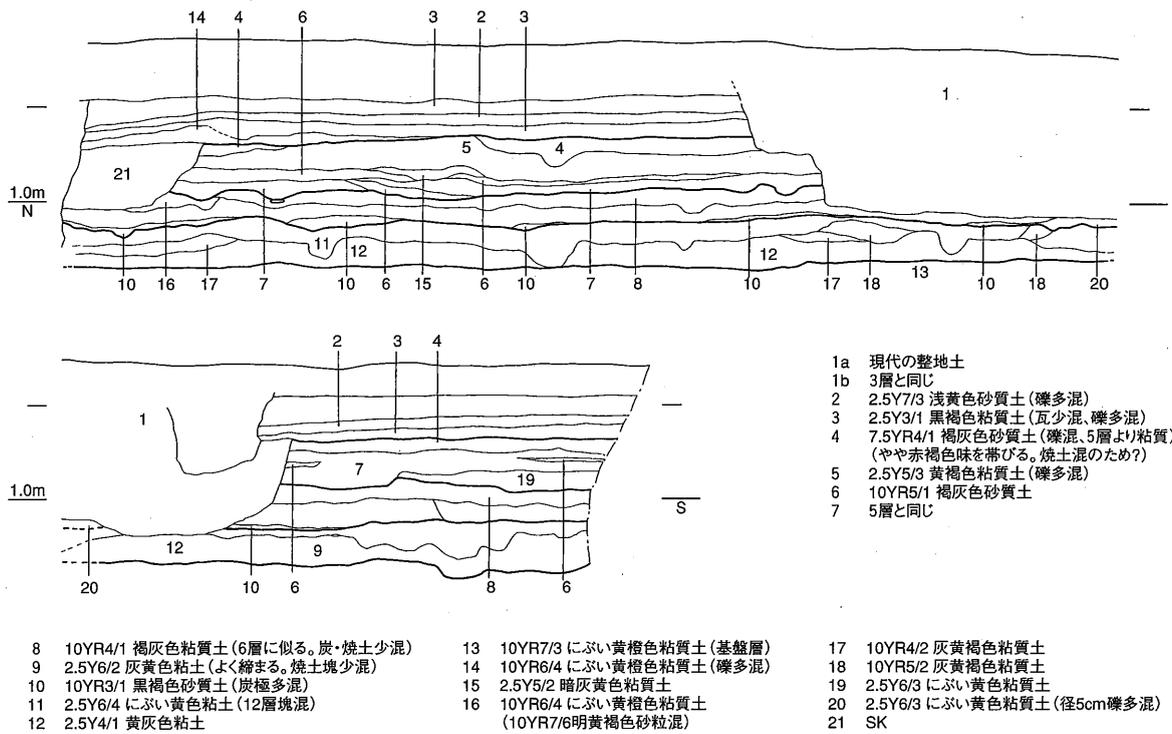
この下の標高1～1.1mが次の遺構面となる。これを第2面とする。構成層の8層には炭や焼土が含まれる。この下の9層は白みを帯びよく締まっており、やはり焼土が含まれる。同じ土質であり焼土を共通に含むことから、ここまでを整地単位と考える。11H区部分でこれに対応するのは27・28層である。

12F区で特徴的なのは10層である。ほぼ純粋な炭層で、ここで木が燃えた痕跡であるとすればその面的な広がりから、火災を示している可能性が高い。よってこの下、11層上面が遺構面となり、これを第3面とする。8・9層に含まれる焼土がこの火災により焼失した家屋の壁等の土であるとすれば、両層は火災をきっかけに整地を行った土であり、その結果9層上面が新しい地面となったという解釈が可能となる。

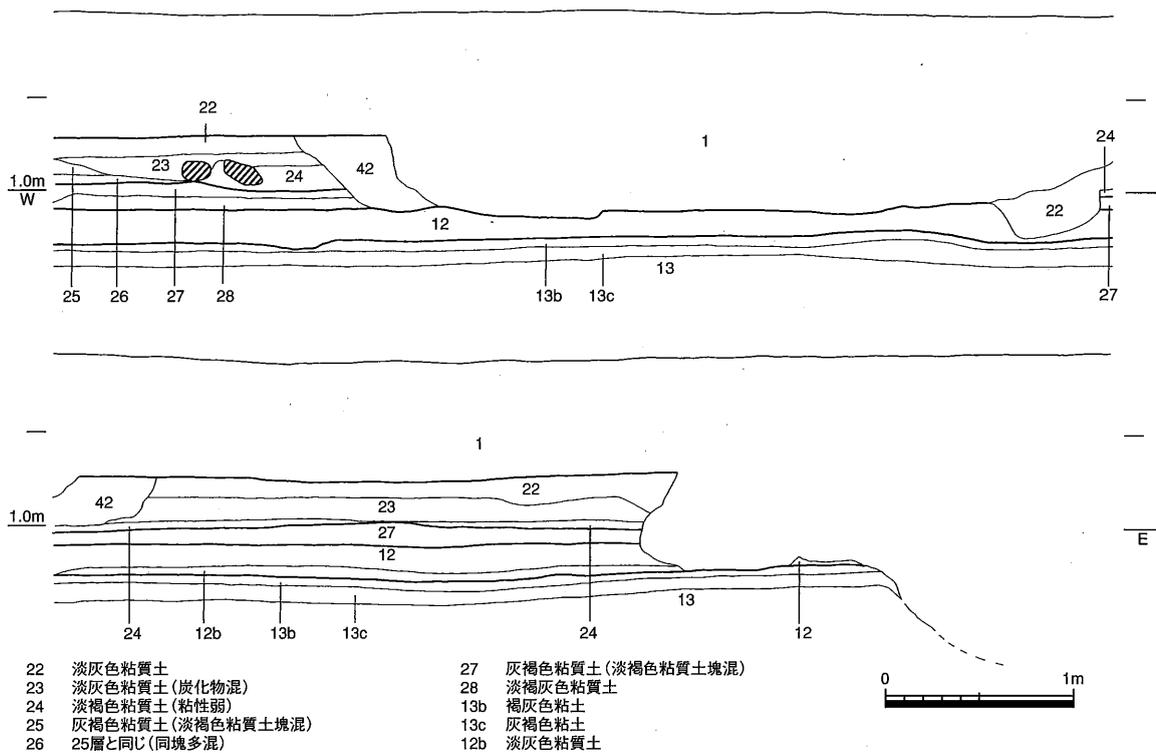
11層は下位の12層の土をブロックで多く含んだ整地層である。一方、12層は粘性の高い自然堆積による包含層であり、この上面が整地が始まる直前の遺構面となる。しかしこの面は凹凸が著しく、単純に遺構掘削面とはみなしがたい。12F区では12層内にS X a02やS X a03とした南北方向の溝状の自然の窪みの単位が存在したりと、この包含層の時期には12F区は微妙な低地であり遺構は見あたらなかったのではないだろうか。12層は土器細片を割と含むことから、恐らく居住域縁辺にあたるのであろう。そして11層にはこの凹凸のある低地をならず際に削られた12層の土が含まれており、第3面で人間の直接の居住が最初に行われたと



第3図 遺跡土層図作成位置図 (S=1/150)

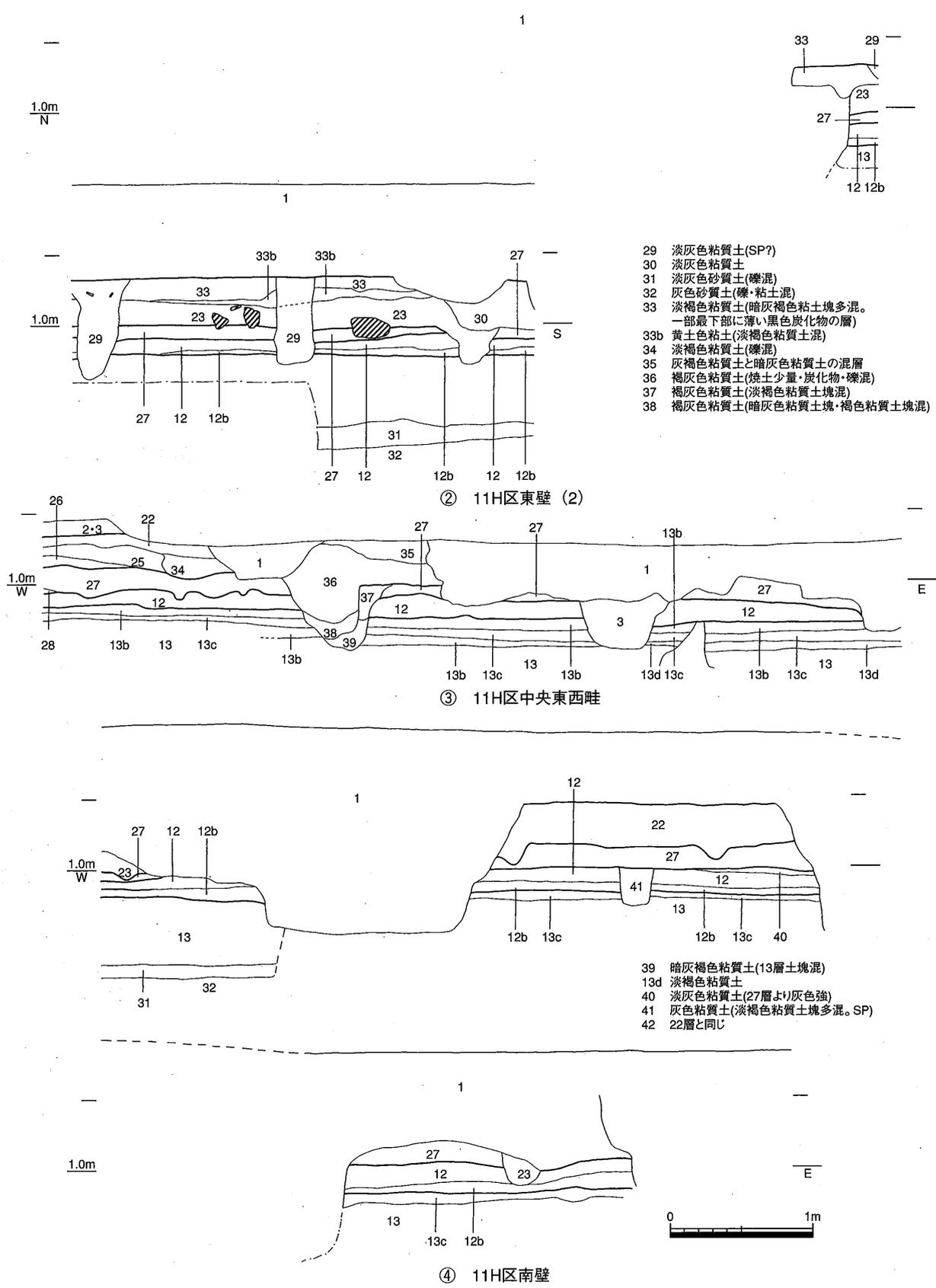


① 12F区 東壁

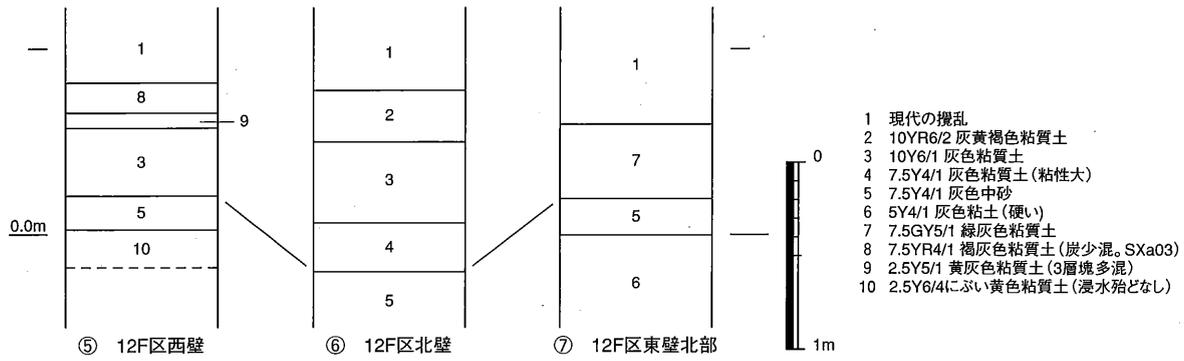


② 11H区 東壁(1)

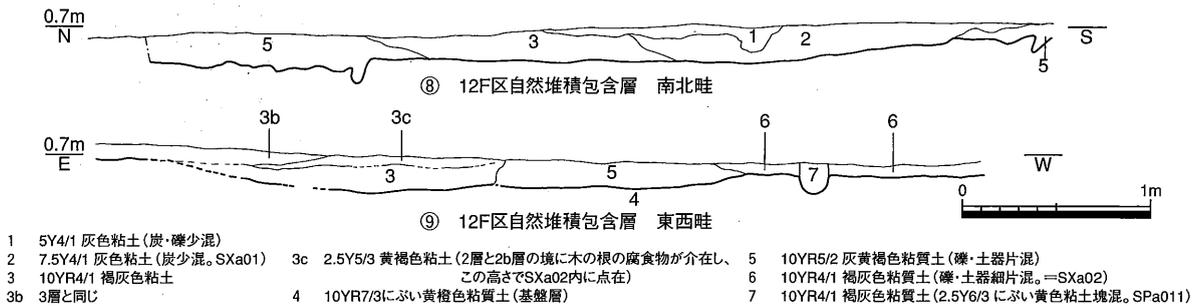
第4図 遺跡土層図(1) (S=1/40)



第5図 遺跡土層図(2) (S=1/40)



第6図 遺跡土層図(3) (S=1/40)



第7図 遺跡土層図(4) (S=1/40)

いう解釈をしておきたい。但し、11H区では11層がなく12層上面が平坦である。13層上面の標高が11H区では0.7mで12F区より20cmも高いことから、ここが低地でなく居住可能な遺構面であり、整地が行われず直接第3面となったのであろう。

13層の堆積により沖積作用が終了し、調査地周辺が陸地化した。13層内にも古代以前の土器細片が含まれる。

③11H区中央東西畦(第3・5図、土層位置③)

11H区は調査前に存在した建物による攪乱のため北側半分は遺構面が残っていなかった。そのためこの部分で東西方向の土層図を作成した。

整地土・包含層の堆積状況とも、11H区東壁と同じである。S Z a01は抜き取られている。27層の存在はS Z a01の東西で変わらないが、それより上は比較できない。S D a01は36層の状況から第1面へと整地する際に埋め立てられたことになる。36層は礫や焼土・炭の混じり方も第1-2面間の整地土と共通している。

④11H区南壁(第3・5図、土層位置④)

整地土・包含層の堆積状況はほぼ11H区東壁と同じである。しかし、東端より2m付近の攪乱を境に第2及び3面の標高が異なる。東側は11H区東壁と変わら

ないが、西側は第3面が10cm、第2面が20cm遺構面が高い。第3面は自然堆積包含層の上であり、基本的には整地を行っていない。第3面でも自然の地形の影響による高低が均されずにそのまま存在したのかもしれない。第2面は東西の標高差が更に大きくなる。この原因も明らかでない。これらについては面的にその広がりや高低の段の境を検出し得ていないため、これ以上は明らかにできない。この高低を利用して東と西とで土地利用に差があったことも想定したが、掘立柱建物跡の存在はそれを否定する。また第2面は攪乱部分にS D a01やS Z a01が伸びてくることが何らかの関わりとなって土地利用の差が明確になった可能性を検討したが、それぞれの遺構説明で記したようにS D a01は整地時には存在してなく、S Z a01は南壁までは伸びないと考えている。

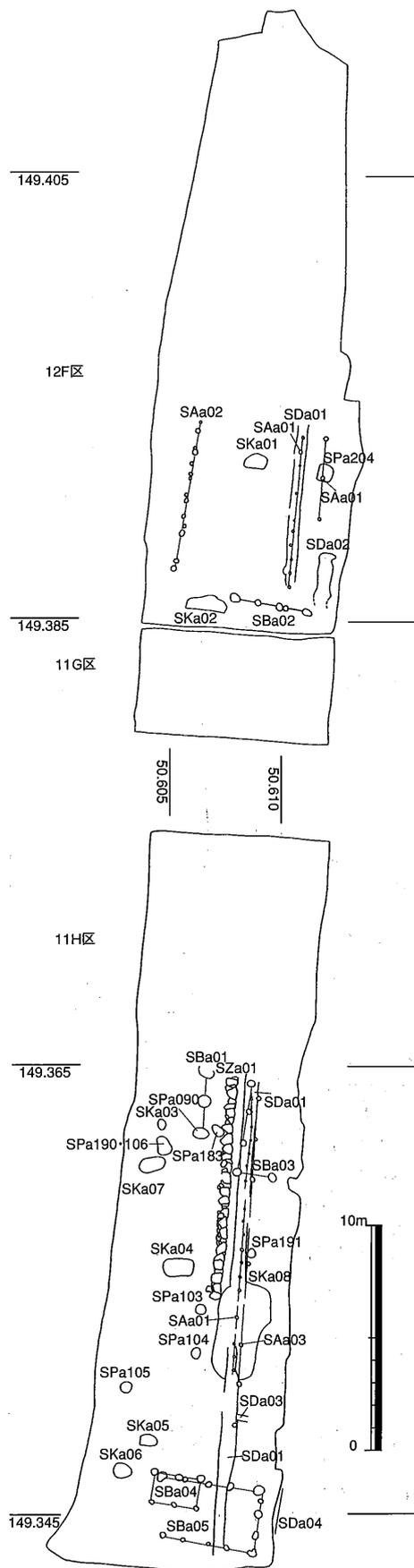
41層は第3面より掘り込まれたピットの埋土である。

13層の下位では標高0.3mで礫を多く含んだ砂質土が現れる。

⑤~⑦12F区土層柱状図

(第3・6図、土層位置⑤~⑦)

12F区も調査対象地の北半分は建物基礎による破壊が深くまで及び遺構面が残されていなかった。それより下の自然堆積層の状況だけでも把握しようと、3本



第8図 主要遺構見取り図 (S=1/300)

のトレンチを設定した。

3層は第4図13層と同じ自然堆積層である。2・7層も自然堆積層であり、7層は1層の影響でそれが青く変色している。8・9層は第4図12層と同じ自然堆積包含層である。以上から、12F区西側では沖積作用終了後の地面の標高が0.57mであり、破壊されていない部分と同じであるが、南端では0.77mとその標高が高くなるようである。一方、3層下には礫層(5層)が存在し、標高0mあたりが湧水面になる。

⑧・⑨12F区自然堆積包含層畦

(第3・7図、土層位置⑧・⑨)

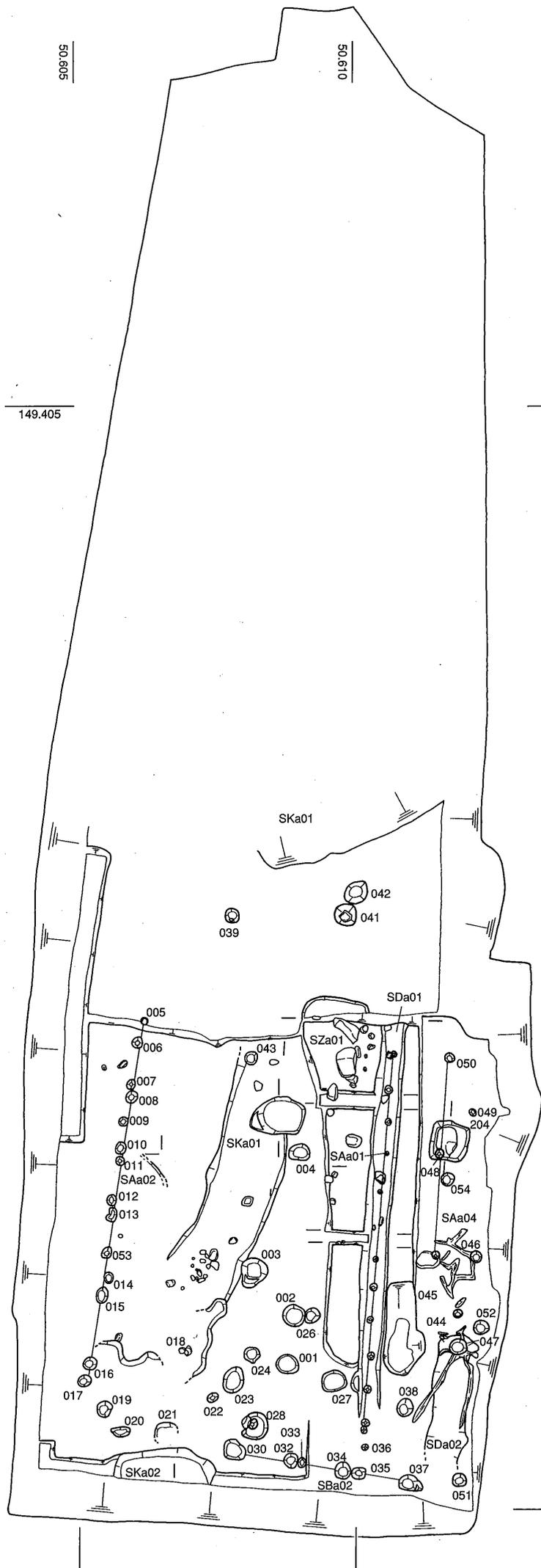
先述したように12F区内では第4図12層内にS X a02やS X a03とした南北方向の溝状の自然の窪みの単位が存在したりと、この包含層の時期には12F区は微妙な低地であったと想定した。この図で示した1～3・5・6層はいずれも12層の範疇で捉えられる層である。微妙な色や質の違いにより区分され、堆積が一樣ではなかったことを示している。2層と2b層の間には木の根の腐植物が水平に延び、12F区東半分に点在する。12F区南東隅ではこれが顕著に残っていた。ある時期この一帯に木が生えていた状況があったのだろうか。

第2節 第1面の遺構

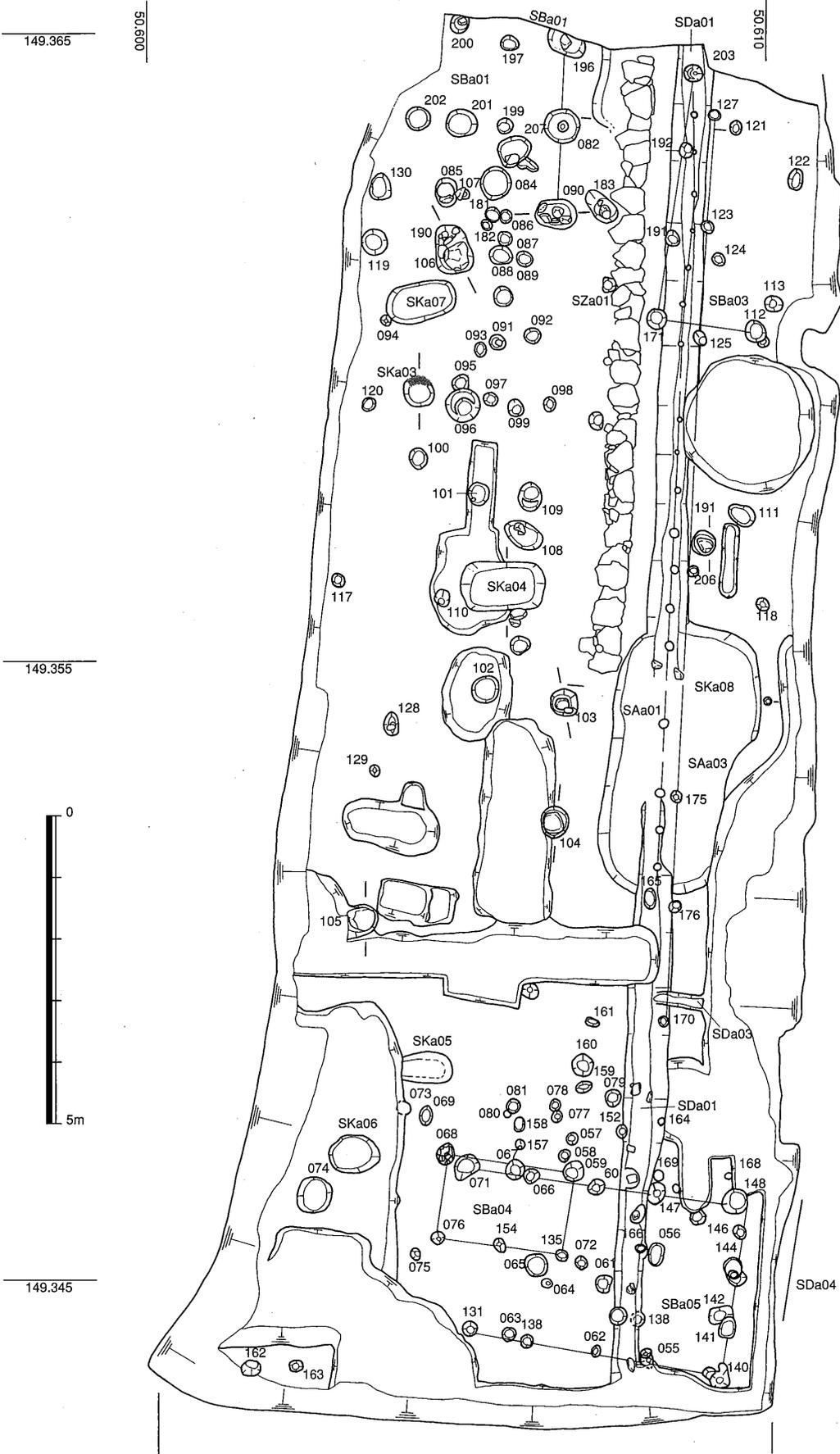
S A a01 (第8～12図、図版2・6・10)

12F区・11H区両地点で検出した柵列である。N 04° Eの方位を向く。S D a01の中央位置に沿って、約60cmの等間隔で打たれている。溝埋立後のどの時期に打たれたのかわからない。第5図③によればS D a01が埋め立てられると同時に整地による嵩上げが行われている。従って一見杭は溝とは関わりなく打たれたことになる。しかし土層の境としては見えなくとも溝だけ埋立て整地前に一休止したとすれば、その時点で溝に沿って打つことはできる。また一気に埋め立てられたとしても、S D a01以外にこの位置を境界として示す何らかの標識を備えていれば、溝の位置がわからずとも打つことはできる。整地と柵列設置の間の時間を大きくとるほど、杭と溝の重なりは偶然性が高くなるものの、しかしそれでもかつてそこに境界があったという意識の故に両者が結ばれているといえる。逆に全くの偶然というのは非常に考えづらい。ここでは溝と杭の重なりが偶然ではない可能性を重視したい。

杭は差し込む穴を掘ることなく、直接打ち込んでい



第9図 12F区遺構配置図
(S=1/100)



第10図 11H区遺構配置図 (S=1/100)

る。これは断面で掘り形が存在しなかったこと、残っていた杭1も径5cm以下でピット径に一致し杭先も打ち込み用に尖らせていること、この程度の杭であれば打ち込むのも簡単であることから判断した。またこのことから打ち込んでたりの簡易な柵であり、実際一直線上から多少ずれているところもある。

整地と柵列設置の間の時間幅に関わらず柵列を設置しえたということは、ここにSDa01によった境界がこの時点でもあることを示している。つまりこの溝を埋め大きく土地の嵩上げをする第1面への区画整理はSDa01による境界を踏まえて行われたと考える。

この他布掘りの可能性も検討したが、簡易な柵列には不釣り合いであり、第5図③による限り埋立後は高くなり、通常の布掘りの掘り形とは見なしがたい。

1は12F区の北から9つ目のピットで検出した。枝は小さなものまで全て刃物で刈り取り払われている。また根元は斜めに尖らせている。枝の払われた位置は直線上にあり、本来は枝の付け根まで払っていたものが地中にある内に表面から腐り現状の形にやせたものとする。このため表皮もない。刈り払いの位置から5cm前後の径の杭に復元できる。掘り形がないため、当然他には遺物の出土はない。

SAa01は第1面整地過程もしくは第1面に属する。

SAa04 (第8・9図)

12F区南東部で検出した。N04°Eの方位を向く。第1面である4層上面で検出した。ピットを3つつないのみであるが、1.8mの等間隔で同じ20cmの穴が開きかつ第1面の方位に合致するため、柵であると判断した。SAa01との関係は不明である。

第3節 第2面の遺構

SBa01 (第8・10・13・14図、図版3・4)

11H区北西部で検出した。2間の柱1列のみであり東西どちらにも展開しないが、柵列とするには穴が大きいため掘立柱建物跡とした。北側に更に延びる可能性は高い。N04°Eの方位を向く。柱間は1.4m。北

のピットには根石を据え、南のピットでは立てた柱を囲むように石を詰めている状態がピットの西北部で認められる。2はSPa082出土遺物である。白磁の碗で体部と口縁の境に稜を持ち、口縁端へと直立する。内面下端は見込みと体部の境の段が残る。内外面とも施釉される。あまり類例のない形態で時期判断が難しいが、中世以前であろう。図示した他に平瓦や備前焼等の細片が出土している。2は混入であり、他の遺物も遺構の時期を決定することはできない。標高1.1m前後で検出しており、掘り込み面は第2面とする。

SAa03 (第8・10図、図版4・14)

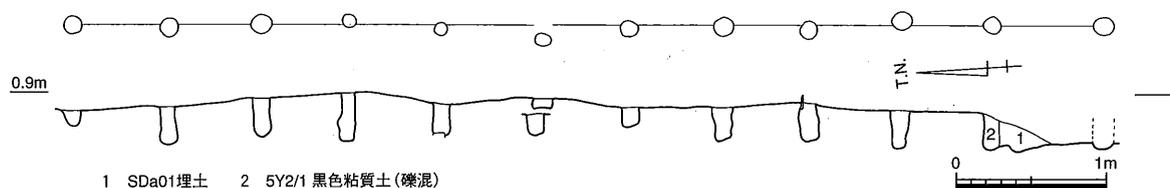
11H区東部で検出した。N04°Eの方位を向く。SDa01の東肩口の位置に同じ方向に向かって1.8m間隔で打たれる。ピットからは須恵器細片が1点出土したのみである。ピットはSDa01に切られておりそれより古く、SKa08より新しい。また北より4つ目のピットを標高1.1mで確認できており、この結果第2面に属する。つまり第2面整地直後にはSDa01はなく、まずSKa08があり、その後SAa03が打たれたということになる。SAa03はピット径も20cmあり、穴に柱を立てたものとしてSAa01のような簡易な柵列ではないとみる。第2面整地直後にはSZa01も据えられているので、両者は共存する時期が確実に存在するものの、SAa03は12F区まで延びないため部分的な設置と見ている。

SPa190 (第8・10・14図、図版3・4・6)

11H区北部で検出した。SPa106を調査中に検出し、当初は礎石を据える掘り形の一部かと考えたが、SPa068同様柱用の空間とその周囲に詰め石を検出したため、単独の柱穴として認識した。中からは遺物は出土していない。標高1.1mで検出したため、第2面に属する。

SPa106 (第8・10・14図、図版3・4・6)

SPa190の南に接して検出した。穴に巨石を据えている。石上面は標高1.2m弱のため、第2面に伴う礎石であると判断した。しかしSPa103等のような安定



第11図 SAa01平・断面図 (S=1/50)

した平石でなく、上の平坦面は狭い。礎石は12F・11H区ではこれのみであり、用途等は明らかでない。柱穴内から遺物は出土していない。

S P a090 (第8・10・14図、図版3・4)

11H区北部で検出した。S B a01の南端を構成する柱穴として取り上げている。北西の空間部分に直柱を

建てその回りに礫を詰めていったのか、中央の平石の上に柱を建てたのか判断できない。前者だと詰め石を平たい面を上にしておくのは不自然である。後者では掘り形の割りに平石が小さい。深い柱穴も調査時に掘りすぎた可能性を否定できない。柱穴内から遺物は出土していない。S B a01の柱穴として第2面に属すると思われる。



第12図 S A a01出土遺物実測図 (S=1/3)

S P a191 (第8・10・14図、図版4・12・14)

11H区中部で検出した。S D a01のすぐ東に接する。S P a103等と同じ形態の掘り形・平石をもつが、同一遺構を構成する要素は他に見いだせなかった。柱穴内から瓦器と土師器の細片が少量出土している。標高1.1mで検出したため第2面に属すると判断した。

S P a103 (第8・10・14図、図版3・8)

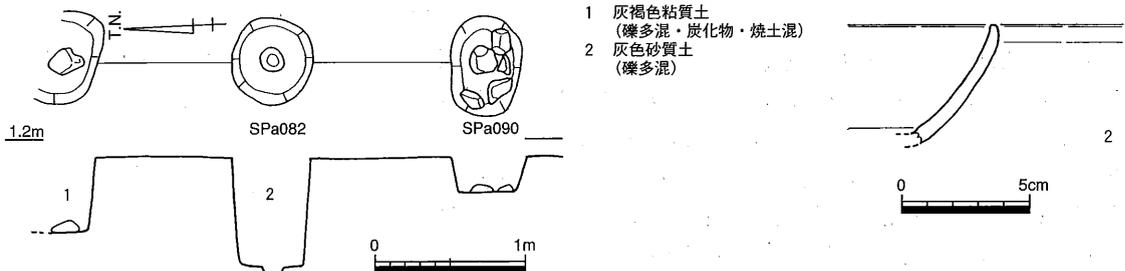
11H区中部で検出した。深さ70cmの穴の底に穴とほぼ同じ大きさの平石を落とし込んで据えている。上部にやや大きめの柱や重たいものを載せても沈まずに耐えられるようになっていると思われる。柱の掘り形の形状をみても、重要な柱穴であることは間違いない。2面に属することはS Z a01の項で明らかにした。土師器や備前焼・平瓦の細片が出土している。

S P a104 (第8・10・14図、図版3)

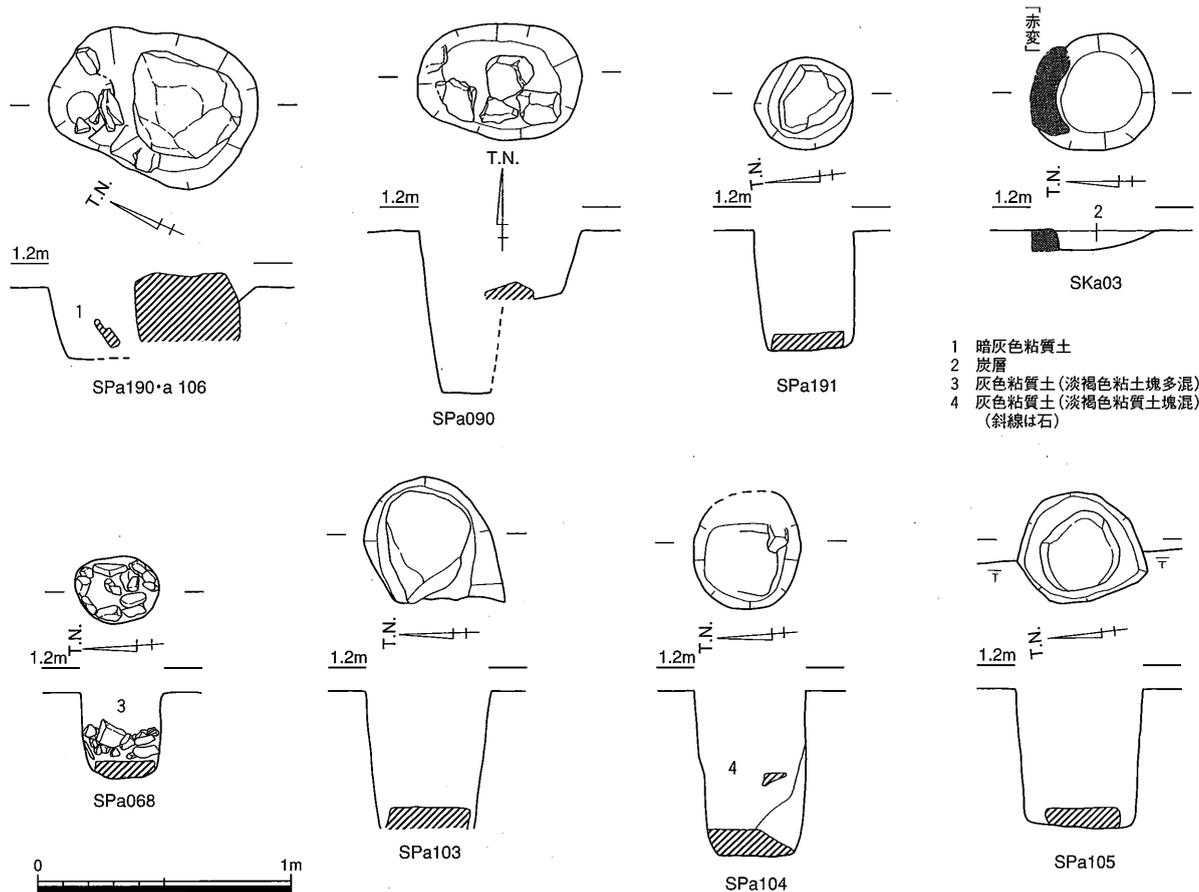
11H区S P a103の南で検出した。S K a08やS Z a01の項で取り上げてきたように、S P a103と対になる可能性が高い。深さは10cm異なるが、同じ形態の掘り形・平石からも、妥当な判断と考える。この場合柱穴間の距離は1.9mになる。土師器細片が少量出土した。

S P a105 (第8・10・14図、図版3)

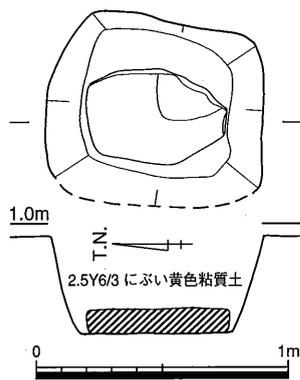
11H区南部で検出した。S P a103等と同じ形態の掘り形・平石をもつが、他に近接して同一遺構を構成するピットは検出できていない。柱穴内から土師器等の細片が少量出土している。標高1.1mで検出したため第2面に属すると判断した。



第13図 S B a01平・断面図 (S=1/50)、出土遺物実測図 (S=1/3)



第14図 ピット・土坑平・断面図 (S=1/30)



第15図 S P a204平・断面図 (S=1/30)

S P a204 (第8・9・15図、図版1・7)

12F区で検出した。隅丸方形の大きな穴の底に大きな平たい石を据えている。S P 103~105 (第14図)と共通する形態で、おそらく石を根石としてその上に大きな柱が立つものと思われるが、調査区内ではこれと関連するような遺構は他にみつけない。ピット内からは土師器や土師質土鍋などの土器片が出土している。この地点での9層上面とした標高0.96mで検出

しており、第2面と第3面の間にもう1面遺構面が存在する可能性を示唆するが、第1節の基本層序の検討結果と矛盾するため、ここでは第2面である8層から掘り込まれているものを検出できなかったことによると考えておきたい。

S K a03 (第8・10・14図、図版3・8)

11H区で検出した。径50cmの浅い穴で、中には炭が詰まっていた。穴の北側は幅40cm弱が熱により赤変・硬化していた。以上の結果、南側を焼き口として穴の北壁際で火を燃やし、燃え殻が炭として残っていたと考える。ただし、壁のみで穴の底が焼けていないのが気になる。周辺ではこれと関わるような遺構は他にみつけない。遺物は出土していない。検出した標高から、第2面以上の面に属する。

S K a04 (第8・10・16図、図版3・4・14)

11H区中部で検出した。0.8×1.6mの楕円形の土坑である。長軸は第2面以上の遺構の方位と直交しているように見える。土器片の出土が多く、土師器や備前焼・瀬戸美濃陶器?・平瓦・白磁などがある。3は土

師器小皿の底で底部を静止糸切りしている。4は陶器の徳利で胎土は灰色を呈する。外面底部直上まで濃い、内面上部まで薄い褐釉をかける。底部直上は釉剥ぎをしている。西日本に産地を持つと思われる、備前焼の糸目徳利を意識して作られている。17～18世紀前半に属する。これらは摩滅してなく、遺構の時期を示すと考える。検出した標高から、第2面以上の面に属する。

S K a07 (第8・10・17図、図版3)

11H区中部で検出した。0.6×1.1mの楕円形土坑である。深さは10cmもなく浅い。埋土は灰茶色粘質土で焼土を含んでいる。中からは図化したものの他に土師器細片が2点出土した。5は土師質の播鉢で5条1単位の卸し目が入られる。内面底及び割れ口とその内面側に煤が付着している。埋土の焼土と関係するものかもしれない。胎土は今報告の土師質土器と共通し、金雲母を多量に含むのが特徴的であり、在地産と考える。6は備前焼の壺である。自然釉が厚くかぶさる。5条1単位の波状文と4条1単位の直線文が縞で描かれる。S K a07は標高1.1mで検出しており、第2面以上の面に属する。土坑の長軸は第2面・第3面の方位とも関係しない。

S K a08 (第8・10・18・19図、図版3・11・12・14)

11H区中部で検出した2.4×4.4mの大型の土坑である。第18図断面⑥ではS D a01より古い。一方この北40cmの地点で撮影した図版11上下ではS Z a01からS K a08の西肩斜面に沿ってS Z a01の一部である石が並んでいる。これは両者が同時期に存在したことを示している。石を築いた遺構という性格上第2面が続く全期間S Z a01は存在し、S A a03の項で述べたようにS K a08→S A a03→S D a01という変遷が第2面の中で

たどれる。S K a08の埋土のうち17層には基盤層のブロックが含まれ、埋め戻したと思われる。その原因はS A a03の打設にある可能性がある。

S K a08は掘り込みの肩から急激に落ち込み整った平面形を持つことから泥溜まりではなく明らかに遺構である。ここではS Z a01の項で述べたように同じ面に属するS P a103・a104の中間とS K a08の中間をむすんだ線は地割り方位に一致することもあり、両ピットと密接な関係にあったように思える。

7～10は出土遺物である。7は胎土が精良で、外底もなでつけるなど丁寧な仕上がりである。8は在地産の胎土を持つ。9は傾きから播鉢としたが、土鍋の可能性も残る。いずれにしても径が小さい。残存部には卸し目は残っていなかった。在地産の胎土である。10は吊り手部が残っている。金雲母を含まず他の土師質土器とは若干胎土が異なる。外面と内面上部に煤が付着している。図示した他に平瓦、土師器などの土器片が少量出土している。詳述してきたように、第2面に属する。

S D a01 (第8～10・18・20図、図版1～4・6・9～14)

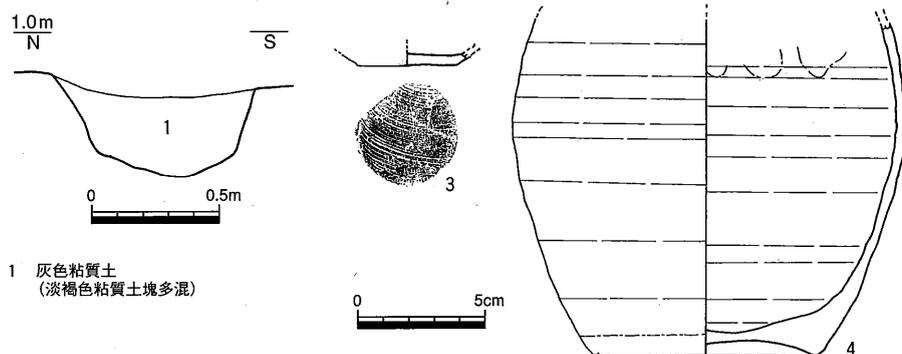
12F区・11H区両地点で検出した溝である。N04°Eの方位を向く。幅50～60cmの素掘りの溝であるが、平成12年度に調査した12F区北隣の12J区でも検出しており、基幹となる溝として認識できる。

溝は第2面から掘り込まれる。これはS A a02やS K a08の項で述べたように整地直後ではない。埋土は大きく2つの層に分かれる。下層は基盤層のブロックの混入が著しい。両層の間に自然堆積の形跡はないため、時期差でなく埋め戻しの段階を示すものと考えられる。

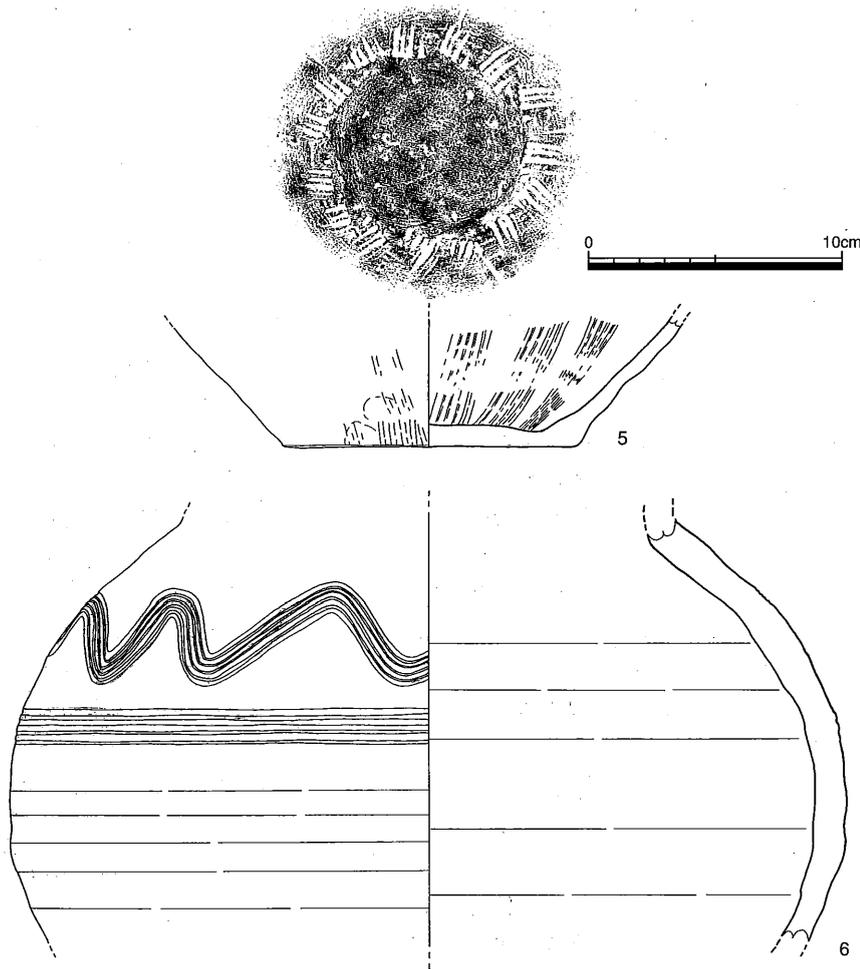
S D a01の底にはS Z a01の自然崩壊による小礫の転落が見られた。これはS Z a01が残っていた範囲で特に著しく、それ以外の地点では逆にS Z a01に関わる

石か判断できないほどまばらである。とりあえず小礫の流れ込みにより、両者が共存していたことは明らかである。またこれはS D a01が第2面に属することを示している。

11～35は出土遺物である。11は中国青磁である。片切り彫りによって蓮弁を表現している。釉は蓮弁の途中までしかかかっていない。内面下端は見込み部



第16図 S K a04断面図 (S=1/30)、出土遺物実測図 (S=1/3)



第17図 S K a07出土遺物実測図 (S=1/3)

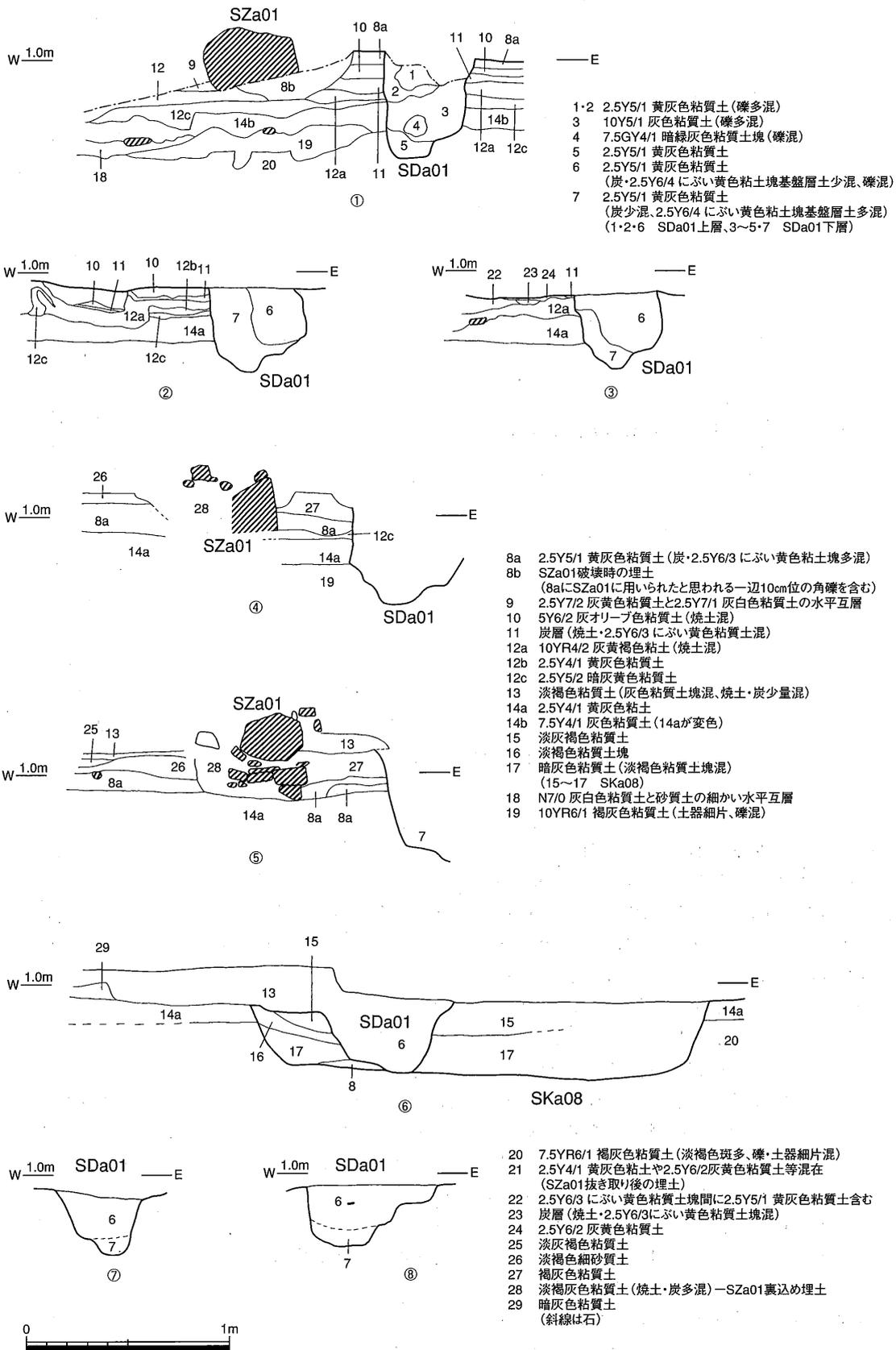
が残り釉剥ぎがなされている。15世紀のもので混入であろう。12～17は軟質でやや黄色みを帯びた胎土を持つ中国産の染め付けで、漳州産とされるものである。12～14・17は碗、15・16は皿の可能性もある。13は見込みにも文様が少し残っている。16世紀後半のものである。14は高台内面は露胎である。16は外面文様は直線で構成され雷文帯に似る。17は内面は蛇の目釉剥ぎがなされ、高台内面は露胎の上に釉が汚くたれている。17世紀後半～18世紀初頭の製品である。18は中国青磁である。19は肥前系磁器碗である。文様から17世紀末から18世紀前半の製品と考える。20は磁器皿である。いわゆる碁笥底で端部から外側に蛇の目釉剥ぎして段がついている。高台内面にも二重線が描かれる。21は瀬戸美濃陶器の天目碗で外面体部下半は露胎である。体部を削り高台を作ることをしていない。22も褐釉の天目碗で釉色は淡い。23は陶器皿で内外面とも釉に貫入がある。24は陶器の底で、白い釉を掛けその上に藍色で文様を描いている。25は陶器碗で全面釉をかけている。内面には金泥が放射状に塗られているように見え、楽焼の可能性もある。26は陶器の向

付で底部は糸切りしている。内面のみ施釉している。胎土や釉の色から肥前系と考える。27は陶器で板状の製品である。同じような部品とつなげた後に上面に厚く施釉しそれが接合部の隙間にたれている。側面には剥離した痕跡がある。上面には不規則な幅・深さで溝が入れられる。底には小砂粒が厚く付着している。焼成時か使用時か付着した時期はわからない。28は陶器の灯明具で化粧掛けをしている。胎土から備前焼かと思われる。29は土師器小皿で口縁部が極めて厚く、体部は途中で外に屈曲する。30は土師器小皿で回転糸切り後ヘラナデしている。31は土師器灯明皿で口縁内面の一部に煤が付着している。32は陶器で蓋がつく碗と思われる。内外面とも透明釉をかける。33は土師質火鉢の脚部である。34は土師質土器で土塙か。35は鉄製の小刀で関部には錆が厚く付着している。図示した他に平瓦、土師器などの

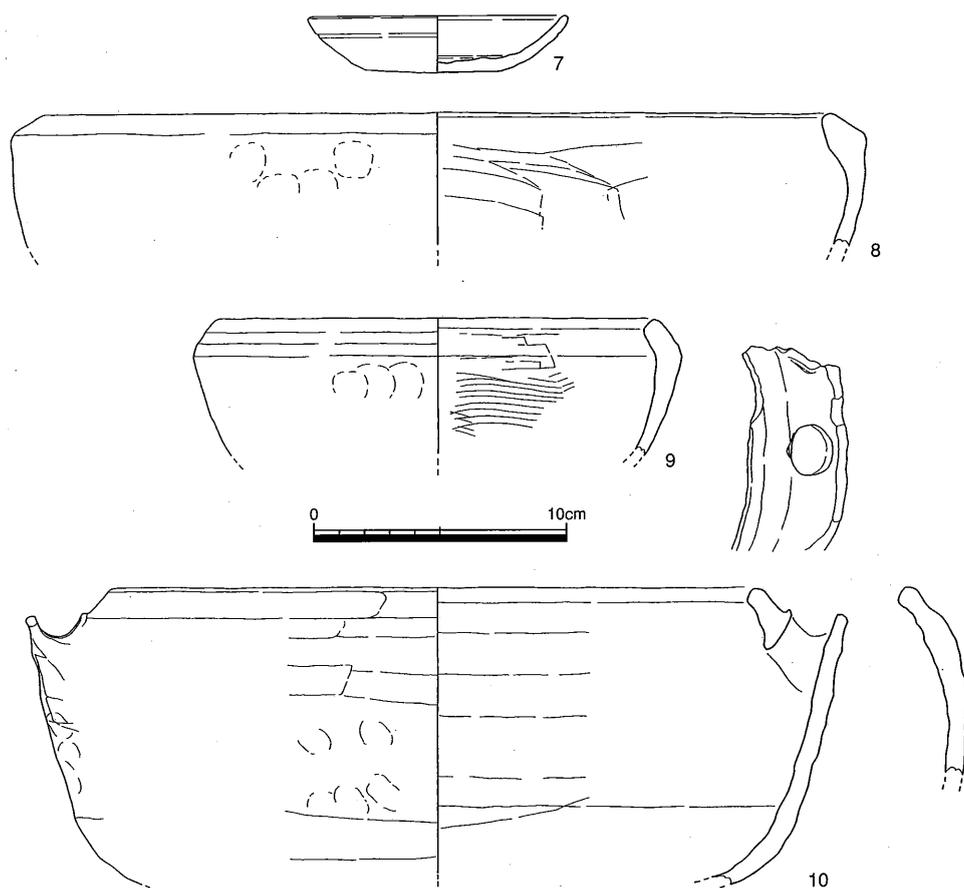
土器片が少量出土している。以上いずれも小破片であり、別の地点にあったゴミを持ってきて捨てたようにもとれる。これらの遺物が示すのはS D a01の埋立時期である。時期判断の難しいものが多いが、わかるもので行くと漳州産磁器や肥前系磁器が18世紀前半を下限とする。21も口縁の屈曲が弱く高台が削り出されていないなど新しい様相を持っている。一方明らかに19世紀代に下るものはなく、18世紀前半を埋立の目安としておく。

S Z a01 (第8・10・18・21図、図版1・3・4・9～15)

12F・11H両地点で検出した。東側が一直線になるよう表面を東に向けて石を組んでいる。裾から1段～2段が現存していた。現状から最低でも標高14mの高さまでは積まれている。これは第1面を14m以上とした考えと矛盾しない。50cm前後の安山岩を主として用い、隙間には小礫を詰める。石組みの前面にはこれらの小礫が多く崩落している。21図では平面図のみ崩落石を表現し、立面図ではわかりにくくもなるため省



第18図 SKa08・SDa01・SZa01断面図 (S=1/30)



第19図 S K a08出土遺物実測図 (S=1/3)

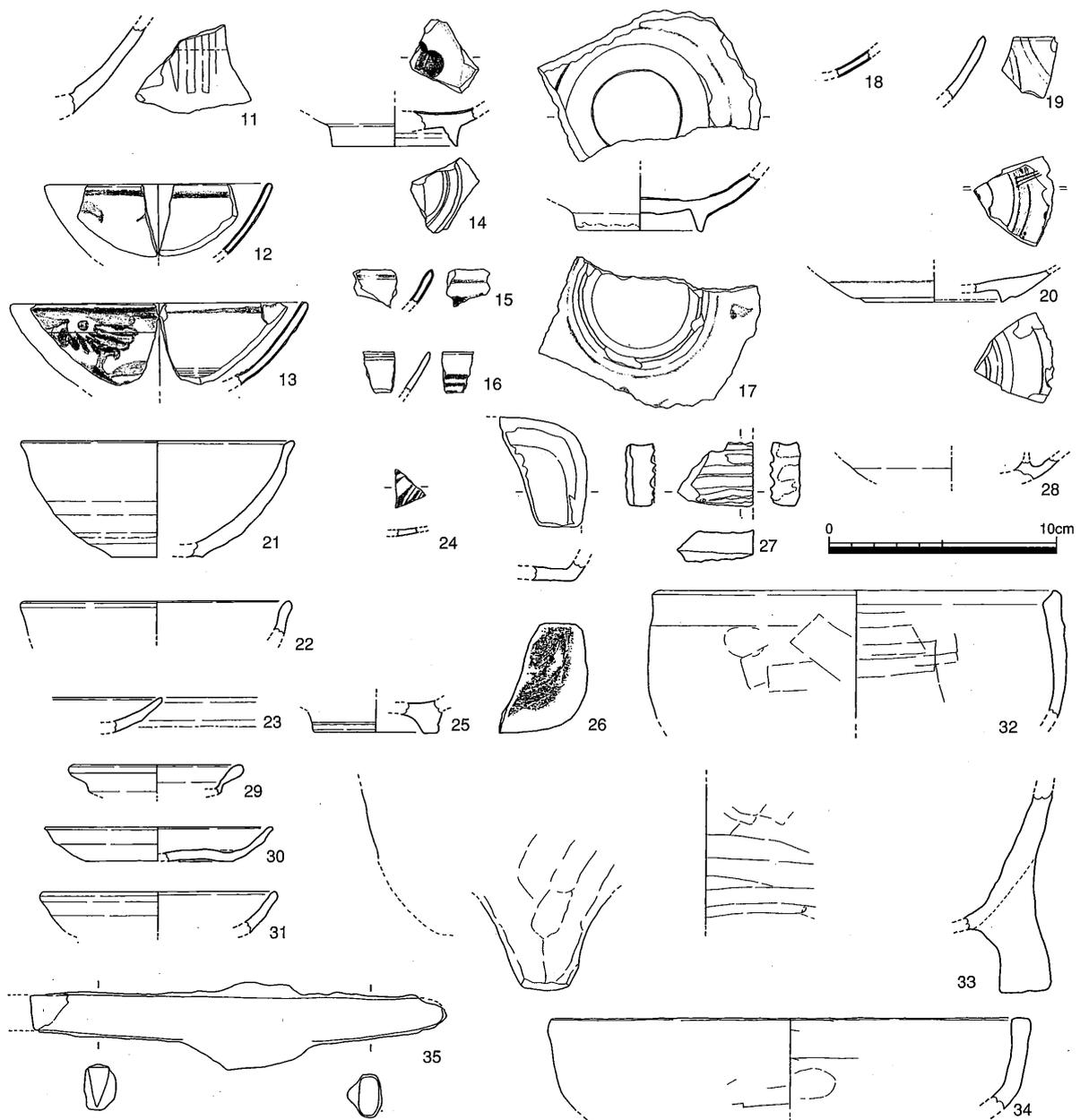
1.1 mまでの整地
 を行う。整地土は
 S Z a01下部を密
 着して覆う。これ
 は詰め石を見えな
 くして外観を整
 え、S Z a01の上
 からの圧力により
 裾が外へ膨らもう
 とする崩壊を防ぐ
 機能を併せ持つ。
 上に重たいものを
 載せるためにこの
 ような構造にして
 いるといえる。一
 方西は、当初S Z
 a01裏側まで整地
 し掘り返して裏込
 め石で基礎をしっ
 かり固め28層で埋
 めたとみるよりは、
 裏込め石を詰め
 る部分を開けた
 状態で整地したと
 見たい。ただしこ
 のような構築過程

いている。

断面図の検討から整地層とS Z a01の関係を考
 えてみたい。上の3つは12F区部分である。S D a01の上
 は標高1.0mまで攪乱が及んでおり、溝の掘り込み面は
 厳密には不明である。断面①の周辺ではS Z a01に用
 いられたと同じ石を検出し、ここにもS Z a01の続き
 もしくはそれと同じ石積み遺構が存在したことが判明
 した。8b・9・21層は石が動き抜かれた後に落ち込ん
 だ土である。石の真下には第4図10層である11層の炭
 層が接しており、石積み遺構が第3面での火災直後に
 築かれたことを確認した。8a・10層は第4図9層、12
 層は同11層、14・18・19層は同12層にあたる。20層
 は基盤層である。断面④・⑤は11H区部分である。
 14a層直上にS Z a01を積む。14層上には東西とも8a
 層で整地する。更にS Z a01の表側である東には第4
 図8層相当の27層があり、13層は第1面への整地土で
 ある。西の裏側では26層があり、これは東側とは対照
 的に細かい砂を多く含む土である。その上は13層土で
 第1面へと整地される。S Z a01の真裏は裏込めの石
 を詰めた28層があり、第2面の高さまで存在する。以
 上より第3面火災後まずS Z a01を組む。その後東は

が工法的にありうるのかは検討課題である。

さて図版11上下から見る限りS Z a01はまだ南に続
 くように見えるのに、すぐ南の断面⑥ではその存在を
 窺わせるものは全くない。13層には下の14a層の土が
 混入しており、石を抜き取る際に周囲の整地土も一緒
 に掘り起こしたためそれを巻き込んで埋め戻した土と
 思われる。13層が削られた14a層の窪みにつまった痕
 跡は、S Z a01の幅で南端の石から1.3mの範囲まで続
 いていた。つまりここまではS Z a01が続いていた可
 能性が高いことになる。また13層はS P a103掘り形を
 一部覆っており、このピットが第2面以下に属するこ
 とも明らかである。ただし、この痕跡がないことによ
 りS Z a01がここで終わっていたかという、簡単に
 判断できない。S P a103・a104を対と考えれば、その
 方位からこれが2面に属することになり、その中間地
 点でS Z a01が終わるとは考えにくいからである。こ
 の場合S P a104付近ではS K a08がS Z a01の裾に
 20cmもめぐり込むことになり、S Z a01の崩壊を防ぐ
 ためS K a08を埋め戻したとも考えることができる。
 第5図④11H区南壁では第2面整地土がS Z a01抜き
 取りによる影響を被らずにあることから、11H区南端



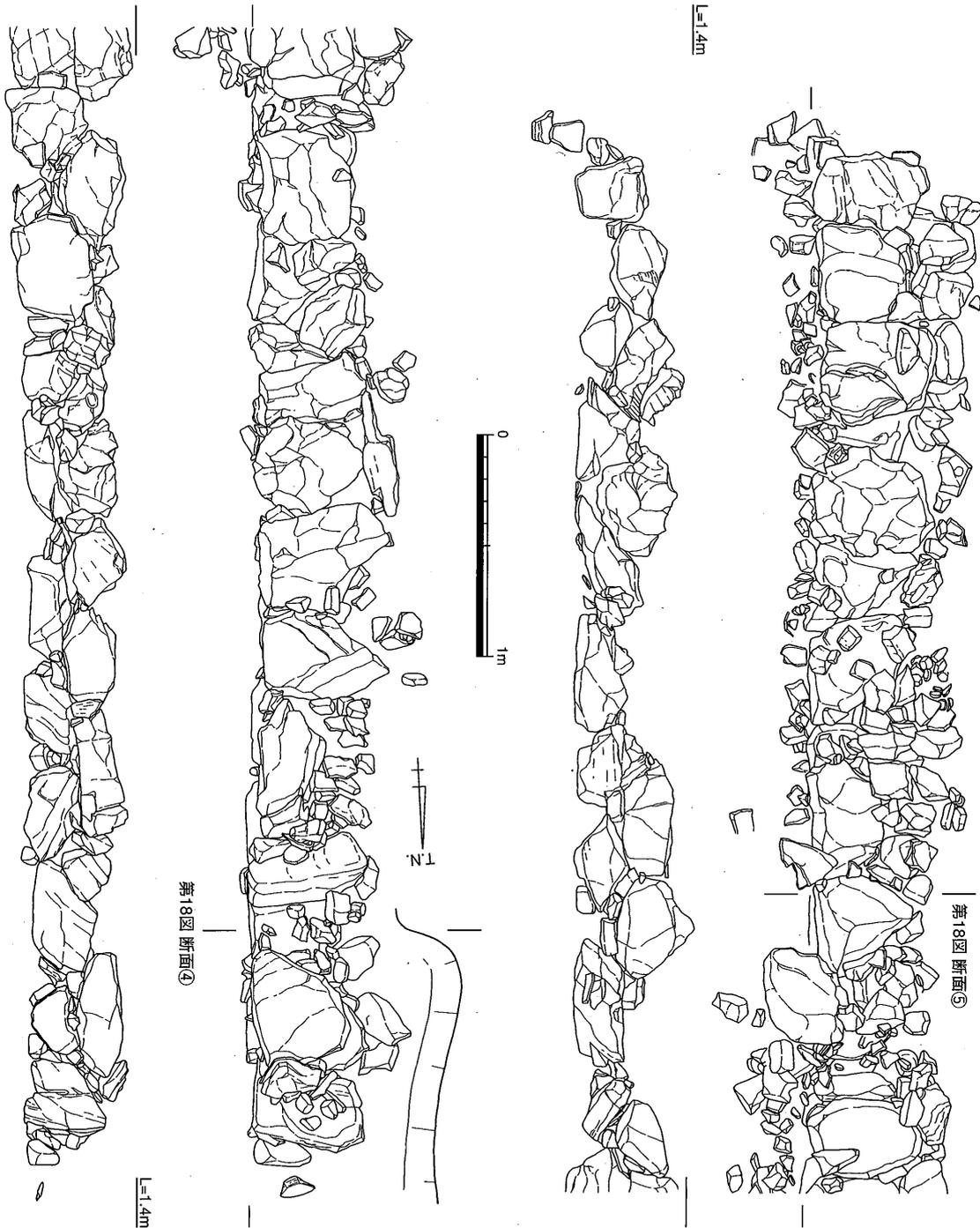
第20図 S D a01出土遺物実測図 (S=1/3)

までの間にS Z a01は終わる。

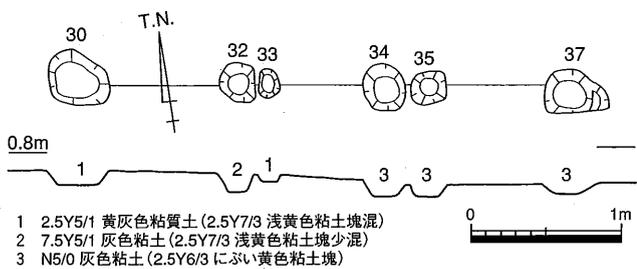
S Z a01は積み石の奥行きは70~80cm前後ある。これは断面④・⑤にあてはめると28層より西に位置する。つまり第21図右上の平面図部分に見られるように積み石と十分間隔が空いていない限り整地後に掘り返したと見なすことは難しい。これは裏込めと整地が平行して行われたとする見解と一致する。

さて改めてS Z a01より西の第2面の標高を検討したい。S Z a01を低い石垣と見ればこれを境に地面の高さを変えて整地することは十分考えられるからである。この章ではここまで東西とも一定であるという前

提で記述を進めてきた。S Z a01より西でもこの標高で遺構を検出しているからである。しかし第1面へと整地する際に土を削って入れ替えればこの前提は崩れる。ではこのような状況が行われたのかというと、否定しておく。掘り起こしによる土層上面の乱れはなく、何より入れ替える必然性がないからである。とするとS Z a01の奥行き分のみ地面より高い状況が生まれる。ここには何らかの構造物が想定される必要があり、まずは土塀が思い浮かぶ。もちろん奥行き分の厚い塀は考えにくい。塀よりはみ出た西の部分は隙間に土を詰め段を形成するようなことが考えられる。ただし石積



第21図 S Z a01平・立面図 (S=1/30)

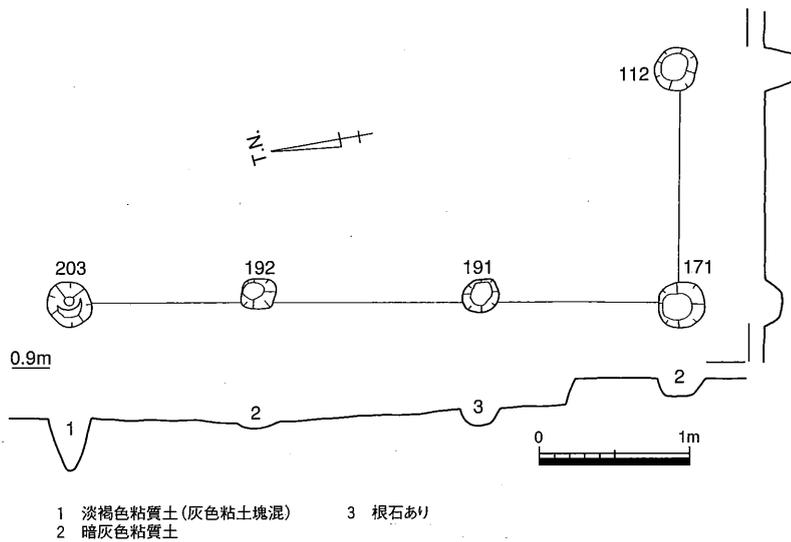


- 1 2.5Y5/1 黄灰色粘質土 (2.5Y7/3 浅黄色粘土塊混)
- 2 7.5Y5/1 灰色粘土 (2.5Y7/3 浅黄色粘土塊少混)
- 3 N5/0 灰色粘土 (2.5Y6/3 にぶい黄色粘土塊)

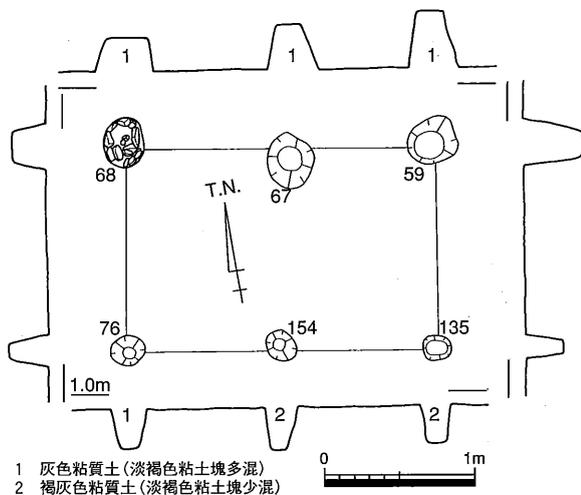
第22図 S B a02平・断面図 (S=1/50)

みの間には土塀の軸木となるべき柱を立てていた痕跡はなかった。単なる石塁を想定してもよいが、防御の石塁を築く必然性は全くない。S P a183他、石と石の間に位置するようなピットがあり、上部構造物の支えとして関連づけることも可能であるかもしれない。

以上高松城跡(西の丸町地区)では他にこのような石積み遺構は見つかっていないため、その分S Z a01が重要な遺構であることは間違いないが、



第23図 S B a03平・断面図 (S=1/50)



第24図 S B a04平・断面図 (S=1/50)

なぜこの地点に作られたのかを含め、今報告ではS Z a01の機能について明らかにすることはできなかった。

第4節 第3面の遺構

S B a02 (第8・9・22図、図版1・2)

12F区南東部で検出した。3間の柱1列のみであり、南側にこれを一辺として展開していくと思われる。N 99° Eの方位を向く。柱間は1.2m。中央2穴にはそれぞれ東に小ピットが付随し、両端2穴も調査時にはわからなかったがピットの平面形が東に小さく膨れている。これら4つの小ピットも等間隔に並んでおり、小ピットと大ピットの列は建て替えの関係にあると考える。どちらが建て替え後のものかはわからない。ピ

ットからの遺物の出土はなかった。掘り込み面は不明であるが、第2面に属する遺構群との方位のずれから第3面に属する。

S B a03 (第8・10・23図、図版4・14)

11H区北東隅で1×3間分を検出した。N09° Eの方位を向く。柱間は南北1.3m、東西1.6m。北から3つ分のピットはS D a01の埋土を取り除いた後に検出した。また、南西角のピットは第18図27層除去後に検出した。よって同12層より新しく、S D a01より古い。ピットからは中世以前の土器細片が少量出土したのみである。掘り込み面から、第3面に属する。

S B a04 (第8・10・14・24図、図版5)

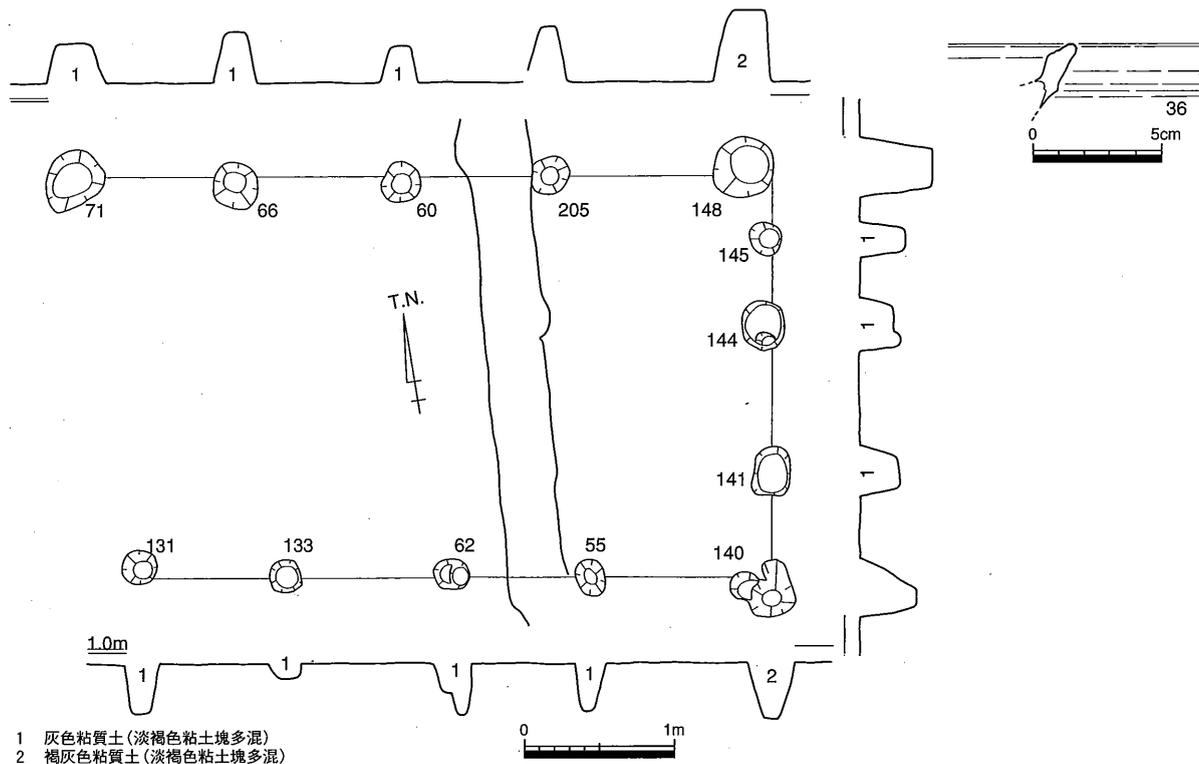
11H区南部で検出した1×2間の小型の掘立柱建物跡である。N09° Eの方位を向く。柱間は南北1.6m、東西1.0m。北西角のピット内では根石と立てた柱を囲むように石を詰めている状態が認められたり、検出時より若干大きくなっているとはいえ北側と南側のピット列の大きさに差があるなど、小型の簡素な掘立柱建物跡を構成するには若干不安材料が残る。ピットからは中世以前の土器細片が少量出土したのみである。掘り込み面は第3面かその上になるが、第2面に属する遺構群との方位のずれから、第3面に属する。

S B a05 (第8・10・25図、図版5)

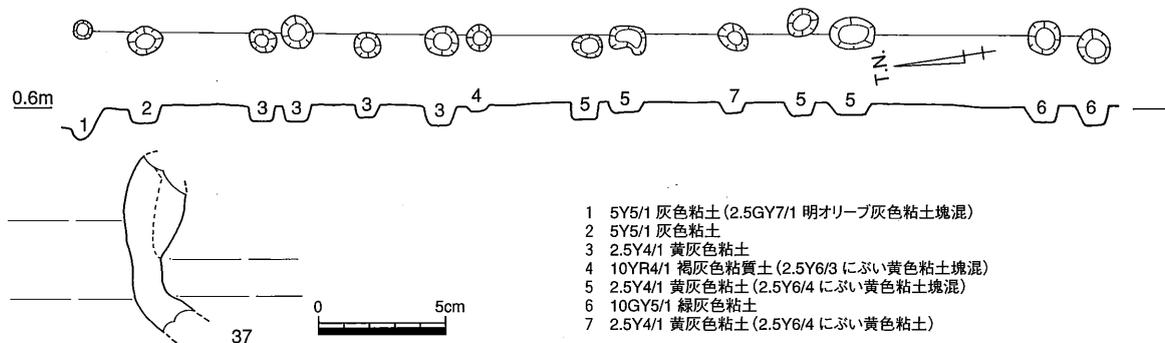
11H区南部で検出した4×4間の掘立柱建物跡である。N09° Eの方位を向く。柱間は南北0.5~1.0m、東西0.95~1.35mで必ずしも等間隔には並ばない。また北列と南列でも対称的な位置にピットが揃わない。そのため建物の西端がどこになるのか、攪乱を受けたより西に位置するのかもわからない。これも簡素な小屋だったのであろうか。北列東から2つ目のピットはS D a01より古い。ピットからは図化した36以外は中世以前の土器細片が少量出土したのみである。36は器種は不明で口縁部或いは底部である。遺構の掘り込み面は第3面かその上になるが、第2面に属する遺構群との方位のずれから、第3面に属する。

S A a02 (第8・9・26図、図版1・2)

12F区西部で検出した。N09° Eの方位を向く。S A a01同様一直線上から多少ずれ、更にピットの間隔



第25図 S B a05平・断面図 (S=1/50)、出土遺物実測図 (S=1/3)



第26図 S A a02平・断面図 (S=1/50)、出土遺物実測図 (S=1/3)

も等しくない。ピットは隣り合わせることもあり、打ち替えを考慮して間隔0.75mと1.0mで検討したが、いずれも結果は芳しくなかった。こちらは平面形がやや広いため、ピットを掘った後に杭を立て周囲を埋め立てたと考えている。ピットからは37以外は中世以前の土器細片が少量出土したのみである。37は備前焼の大甕で口縁端部を欠いている。遺構の掘り込み面は第3面かその上になるが、第2面に属する遺構群との方位のずれから第3面に属する。

S P a068 (第8・10・14図、図版16)

11H区南部で検出した。S B a04の北西角を構成する柱穴として取り上げている。底に穴とほぼ同じ大きさの石を敷き、北側にある直径15cmの空間部分に直

径15cmの柱を建て、その回りに礫を詰めていった状況を示している。柱穴内から遺物は出土していない。S B a04の柱穴として第3面に属すると考える。

S P a183 (第8・9・27図、図版15)

11H区北部で検出した。楕円形の掘り形を持ち、中には楕円形の方角である南東側に斜めに立てられた柱が残っていた。柱の北西には詰め石なのか小礫が1個存在した。柱穴内から土師器や平瓦の細片が少量出土している。標高0.9mで検出したことになっているため第3面に属すると判断したが、平面位置が東に接するS Z a01を構成する石と石の間にうまく収まっており、S Z a01と関連する可能性も残る。とはいえ、斜めに立てられた柱はこれ1本のみの検出で、機能は明らか

でない。

ピット出土遺物 (第9・28図)

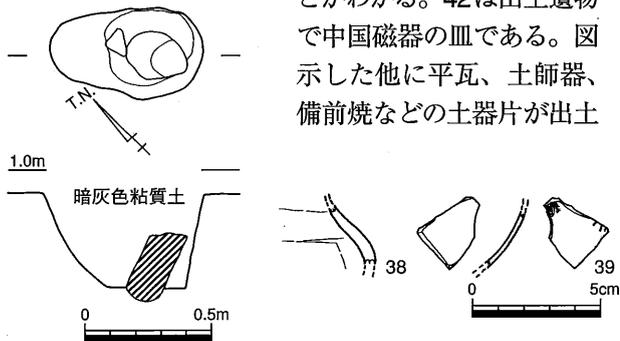
ピット出土遺物の中で比較的残り具合が良く、本来の時期を示すと思われるものを図化した。38は12F区にあるSPa003から出土した。39は12F区にあるSPa052から出土した。掘り込み面は明らかでない。38は陶器の小さな壺の肩部で、色から備前焼の可能性ある。39は肥前系の磁器碗の体部である。

SKa01 (第8・9・29図、図版1)

12F区で検出した平面形が不整楕円形の土坑である。40・41は出土遺物である。40は土師質の土釜で、在地産と考えた胎土を持つ。41は丸瓦で、内面にコビキ痕が明瞭に残る。図示した他に平瓦片と須恵器片が出土している。標高0.8mで検出しており、掘り込み面は第3面かその上である。

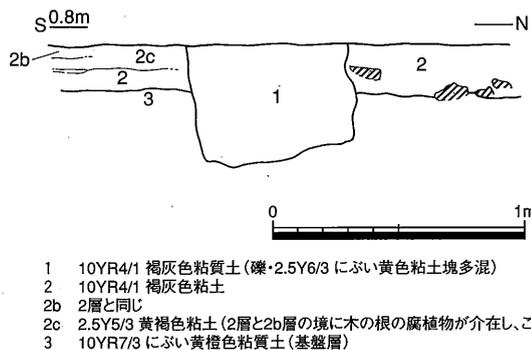
SKa02 (第8・9・30図、図版1・2)

12F区南西隅で検出した。直径2mの長楕円形の土坑で、南半分が調査区外に広がる。土層断面図を作成するのを忘れたが、中央が窪む層状の堆積中では砂質土も含まれることから、自然埋没した遺構であることがわかる。42は出土遺物で中国磁器の皿である。図示した他に平瓦、土師器、備前焼などの土器片が出土



第27図 SPa183平・断面図 (S=1/30)

第28図 ピット出土遺物 実測図 (S=1/3)



- 1 10YR4/1 褐灰色粘質土 (礫・2.5Y6/3 にぶい黄色粘土塊多混)
- 2 10YR4/1 褐灰色粘土
- 2b 2層と同じ
- 2c 2.5Y5/3 黄褐色粘土 (2層と2b層の境に木の根の腐植物が介在し、この高さでSXa02に点在)
- 3 10YR7/3 にぶい黄褐色粘質土 (基盤層)

第29図 SKa01断面図 (S=1/30)、出土遺物実測図 (S=1/3)

している。SKa02は標高0.7mで検出しており、掘り込み面は第3面かその上である。

SKa05 (第8・10図、図版5)

11H区南部で検出した。0.5×現存長0.8mの楕円形土坑で、西側は攪乱により破壊される。深さは20cm弱である。埋土は灰色粘質土の単層で基盤層のブロックを含み、埋め戻されていることがわかる。中からは土師器と須恵器の細片が少量出土している。攪乱を取り除いた標高0.9mで検出しており、これ以上の面に属する。

SKa06 (第8・10・31図、図版5)

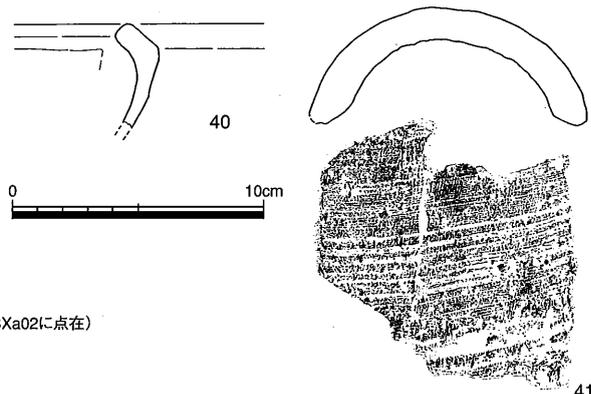
11H区南西部で検出した。径0.6mの円形の土坑である。深さは30cmである。埋土はSKa05と同じで、同様に埋め戻されていると判断できる。攪乱土を除去した標高0.5mで検出しており、どの面に属するか不明であるが、状況からSKa05と同じ時期ではないかと考える。43は出土遺物で土師器坏である。図示した他に土師器や須恵器片が少量出土している。

SDa02 (第8・9・32図、図版1・2)

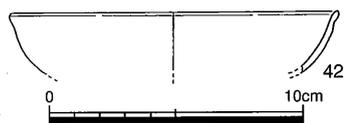
12F区で検出した。N08°Eの方位を向く。約5mの長さで北は落ち込みの明瞭な上がり認められるが、南は自然消滅する。第3面の地割り方位に近いが、形状より12F区のSXa02等と同様自然の落ち込みで溝でないとする。2層の窪んだ部分に1層土で埋め立てている。2層内は前節の⑧・⑨項で述べたように木の根が多く走る。44は出土遺物で瀬戸美濃陶器の皿である。全面施釉している。17世紀前半以前のものである。図示した他に土師器や須恵器片が少量出土している。第3面より下の面に属する。

SDa03 (第8・10図)

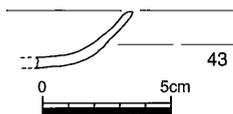
11H区南部で検出した。SDa01に合流する形にな



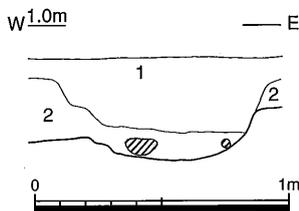
41



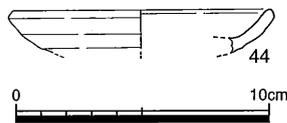
第30図 S K a02出土遺物実測図 (S=1/3)



第31図 S K a06出土遺物実測図 (S=1/3)



第32図 S D a02断面図 (S=1/30)、出土遺物実測図 (S=1/3)



1 5Y4/1灰色粘土(炭、礫混)
2 7.5Y4/1灰色粘土(炭少混)-SXa01

っているが、埋土が淡灰色粘質土であるため、より古いと考える。深さは15cm程度で浅い。溝からの遺物の出土はなかった。

S D a04 (第8・10図、図版17)

調査終了後雨水により浸食崩壊した東壁南部の奥から現れた。調査区内に含まれるが、境界にブロック塀が建ちその真下に当たるため、表面観察に止めた。このため図面はなく、石列西面の方向のみを第10図に書き込んでいる。

溝としたのは長さ2m分の石列で、N09° Eの方向にはほぼ同じ大きさの石が直線に7個並んでいる。上には積まれていないが、平坦に揃えている。遺跡内の他の調査区の成果から、両側を石で組む排水溝と考える。但し、検出した石列は西に面を向いているようで、溝であるなら更に西に対になる石列が存在するはずであり、これは検出していない。本当は東にもっときれいな面を揃えているか嵩上げた建物用の土地の回りを固めた石列の可能性も残る。石の底は標高約0.8mで第5図12層内にある。12層は自然堆積土であるので、石列は上面より掘り込まれた掘り形内に組まれたとみる。石の上面は1.06~1.1mで第2面の標高に近い。しかし、ここでは方位を優先し、第3面からの掘り込みと考えたい。つまり溝であるなら、石の上半分が地面より上に出ていたことになる。

第5節 整地層出土の遺物 (第33・34図、図版18~21)

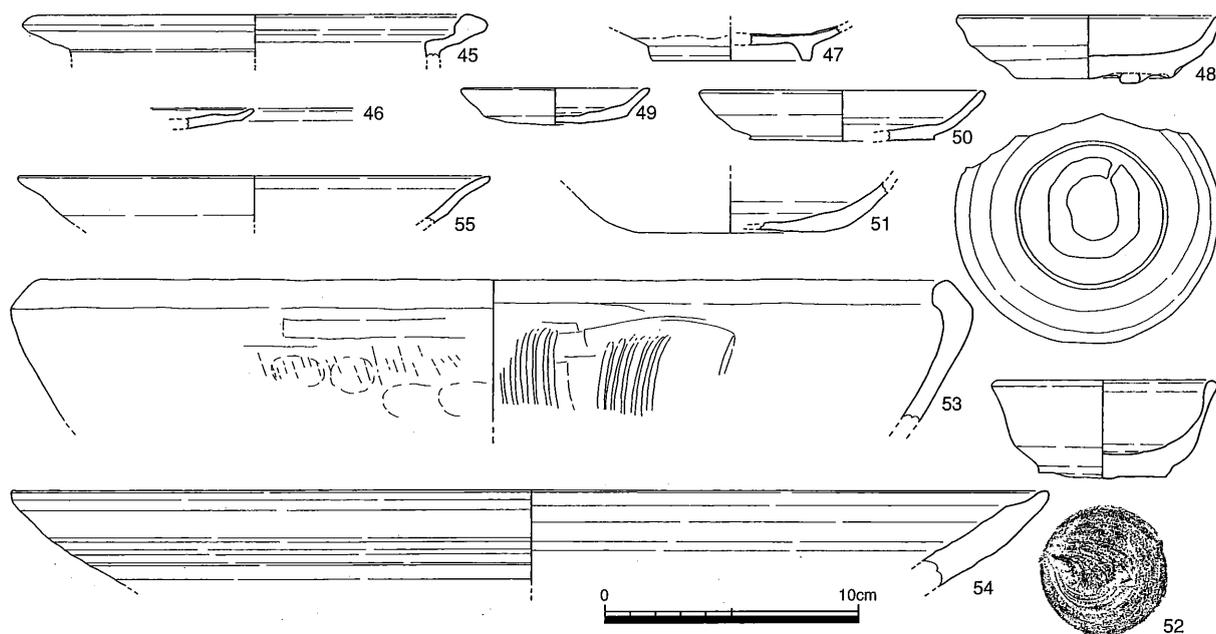
45~89は整地層出土の遺物である。12F区出土分は第4図に対応する層位名で取り上げた。一方11H区出土分は遺構面の標高が水平であるという仮定の下に

10cmを最小単位とする標高で取り上げ、これを各遺構面間の整地層に属するものとした。従って遺構面に凹凸があれば上下の整地層に本来属していたものを含めてしまっている可能性もある。このような理由で12F区と11H区出土遺物は分けて並べている。なおレイアウト後、層位の所属整地層の判定に混乱があったことが判明し、以下の記述に対して図面にずれが生じてしまっている。

45~54は第1~第2面間の整地層出土遺物である。45は4・5層出土で、陶器土鍋の口縁である。19世紀代のものである。46は6・7層出土の陶器で、

傾き・どちらが内外面かも不明である。47~54は11H区の標高1.2~1.3mの整地層から出土した。47は肥前系と思われる磁器皿で見込み部は蛇の目釉剥ぎを行っている。高台・高台内面は露胎である。48は瀬戸美濃陶器の皿で見込みには濃緑色の釉が厚く溜まっている。割れ口は焼けている。外底には輪トチンの跡がつく。49は土師器小皿である。全体に摩滅気味で、外底はヘラでなでて仕上げている。50は灯明皿で、内面に煤が付着している。外底は静止糸切りである。51は土師器坏で、外底はヘラでなでて仕上げている。52は深い土師器坏で、外底は糸切りである。胎土には在地産の土師質土釜等に共通するとした金雲母を含む。53は土師質播鉢で、6条1単位の卸し目をつける。胎土には金雲母を含む。54は陶器で大鉢とした。備前焼に色は似るが、胎土に小さな隙間が多く表面の1mmのみ特に焼き締まっている。

55~57・65~75・77~79・82~89は第2~第3面間の整地層出土遺物である。55は8層出土の陶器皿で、胎土や釉の剥げ方が48と似る。56・57・65は火災によるものとする10層出土である。56は軒平瓦で、三つ巴の回りに10個の珠文を配する。同範の瓦がB地区の第1整地層上面と下面の間の整地層から出土している。この整地層は18世紀前半頃と捉えられている。57は備前焼の播鉢で、口縁直下の部分である。卸し目の単位はわからない。17世紀第4四半期~18世紀前葉頃の製品と考える。65は鍍金の鉄製品で飾り金具であろうか。半円の弧を描く径6mmの断面を持つ棒を左端で折り曲げている。本来直線をなしていたものが土圧等のため歪んでいる。66~71・74・82・84・86~88は11H区の標高0.9~1.1mの整地層から出土した。66は中国磁器碗である。67は中国磁器皿で、軟質の胎土を持つ漳州産とされるものである。68の碗も漳州産と思われ肌色の軟質の胎土である。69は中国磁器



第33図 整地層出土遺物実測図(1) (S=1/3)

皿である。70は磁器の口縁で皿と思われる。71は肥前系磁器皿で17世紀前半頃のものである。74は肥前陶器皿で、内面に2カ所胎土目が残る。17世紀前半のものであろう。82は土師質播鉢で卸し目が少し残る。在地産とした胎土を持つ。84は軒棧瓦である。「ダンシ・カネヤ」という刻印を押す。高松市内南方の檀紙町で生産されたものであろう。近代に属する混入品である。86～88は土師質土錘である。86・87は穿孔型、88は有溝型である。75・83・85・89は11H区の標高0.9～1.0mの整地層から出土した。75は肥前系陶器皿で高台に切り込みがある。また内外面に砂目積みの痕跡が残る。17世紀前半のものであろう。83は土師質火鉢胴部に押された刻印の文様である。85は陶器でタイル状をしている。幅6cmで長さ不明、6mm間隔で平行に溝を切り込んでいる。その上に釉を厚くかけて、溝が一部つぶれている。裏側中央には接合剥離面が残る。89は銅製品で薄い板を巻いて中空にしている。右端は折れていない。72・73・77～79は精査等で出土した。72は中国青磁で皿と思われる。焼成が悪いため緑釉にまだらの白い筋が多く走っている。73は肥前系陶器の刷毛目皿である。17世紀後半～18世紀のものである。77は陶器の碗である。内外面とも体部のみ緑釉がかかる。78は陶器の碗である。胎土が一部赤変し、それが薄い白釉を通して文様のように見えている。79は筒状の陶器である。徳利の可能性もある。褐釉が内外面ともかかる。

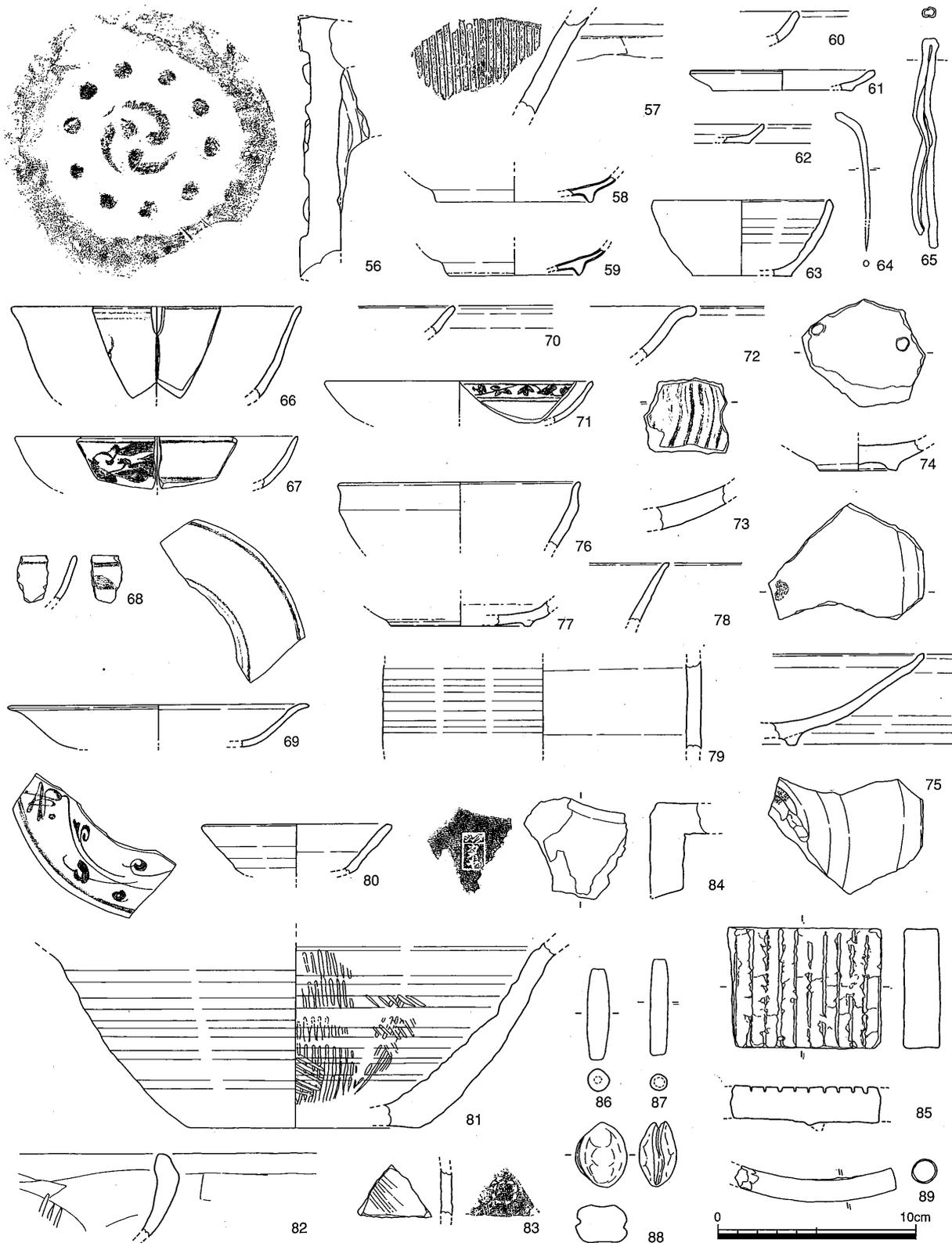
58～64は第3面下位の整地層である12F区の11層から出土した遺物である。58・59は16世紀の中国白磁皿

である。59は高台端部のみ釉がかかってない。60は瀬戸美濃陶器皿である。61・62は土師器小皿である。61は口縁はナデにより沈線状のくぼみが巡る。63は深い土師器坏で、外底はヘラでなでて仕上げている。64は鍍金の鉄製品で原型を保っている。10・11層名で取り上げており、65と同じく火災にあった可能性もある。

第6節 包含層出土の遺物(第35図、図版20・21)

76・80・81・90～109は基盤層上面に自然堆積した灰色粘質土の包含層内から出土した。12F区・11H区とも共通の堆積状況を示すため、合わせて記述する。

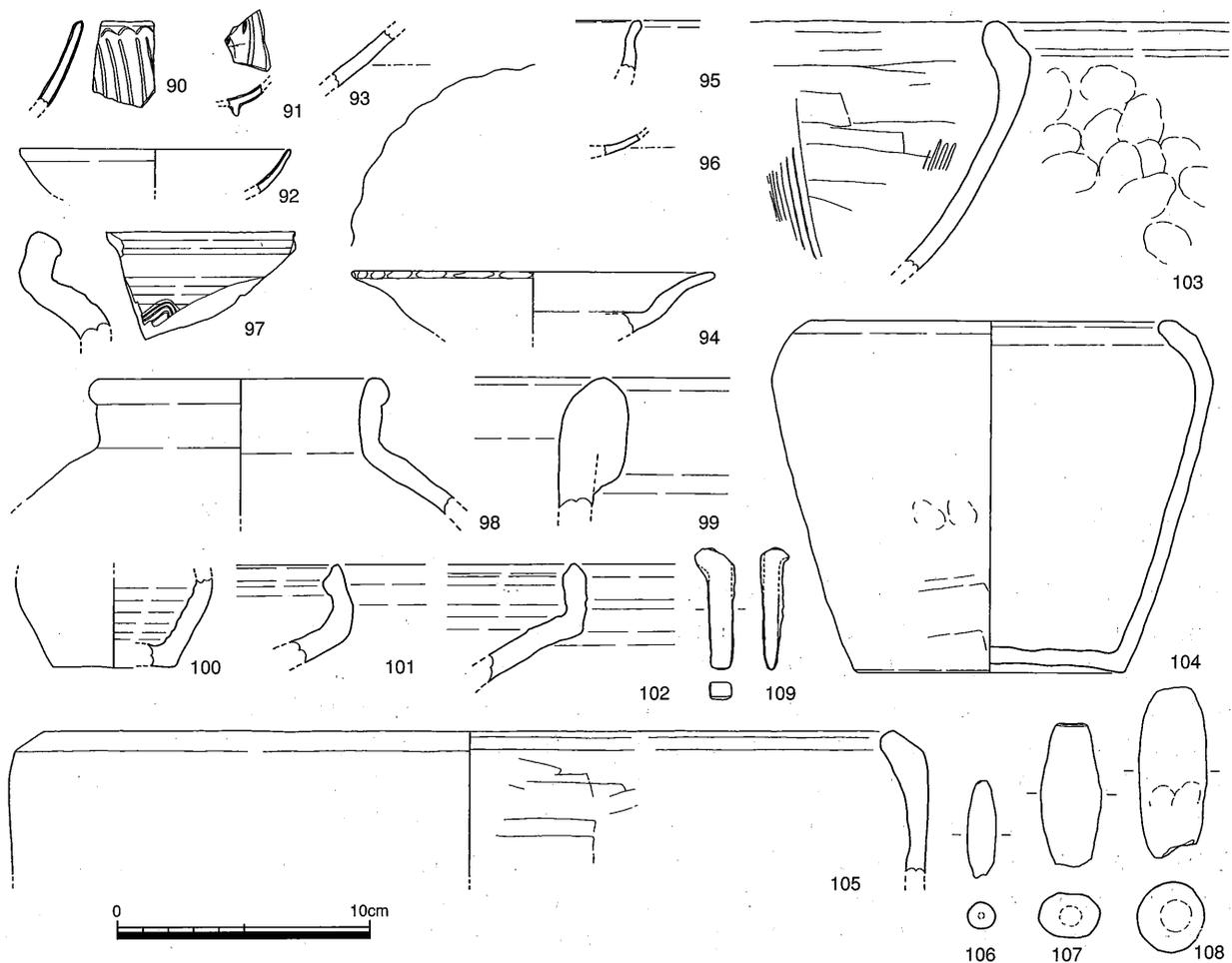
76は陶器天目碗である。口縁下の屈曲は稜を持つほど明瞭である。80は備前焼皿である。81は備前焼播鉢である。卸し目は8本1単位でつけられる。16世紀後半～17世紀前葉のものである。90は中国青磁碗で蓮弁はヘラ先により細線で描かれる。縦細線と剣頭是对応せず蓮弁としての意識が忘れられつつある。15世紀後半～16世紀前半のものである。91は中国産の染め付け碗である。16世紀初頭前後のものである。92は16世紀の中国白磁皿であらう。93・94は肥前系陶器皿である。94は上面から見ると口縁が波状を描く。17世紀前半以前のものであろう。95は天目碗である。褐釉が全面にかかる。96は陶器で内面全体と外面上半に白釉がかかる。97～102は備前焼である。97・98は壺で97は肩に波状文が描かれる。99は大甕の口縁である。100は小さな壺



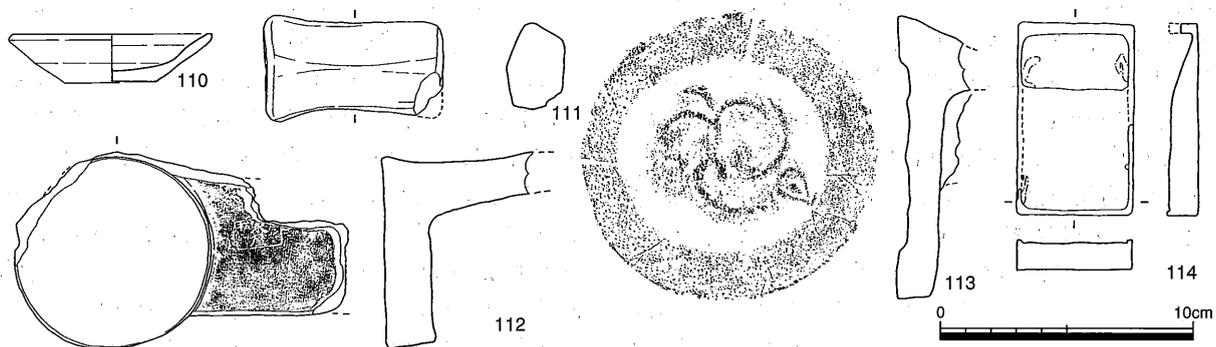
第34図 整地層出土遺物実測図(2) (S=1/3)

である。101は大平鉢である。102は播鉢である。口縁は直下に段を持たず直立する。16世紀前半頃のものであろう。103は土師質播鉢で卸し目は5本以上が1単位である。胎土には金雲母を含む。104は土師質の壺であ

る。胎土には金雲母を含まない。105は径不明の大型の土釜である。106～108は穿孔型の土錘で、107・108は中型の大きさである。109は釘と思われる。頂部は横に曲がる。



第35図 包含層出土遺物実測図 (S=1/3)



第36図 攪乱層出土遺物実測図 (S=1/3)

第7節 攪乱出土の遺物 (第36図、図版21)

110～114は攪乱など層位に関係ない状態で出土した。110は土師器小皿で完形で出土した。外底はヘラでなでて仕上げているが砂粒を多く含むなど全体に雑な作りの印象を与える。111は器種不明の土師質土製品で中央が少しすぼまる。断面は5面に面取りしてなでられている。両端には原体から剥離した痕跡もない。

紐を結ぶ土錘であろうか。胎土には黒色砂粒を多く含む。112は軒棧瓦である。「高松水屋」の刻印が押される。大正頃に市内中心部の新瓦町に存在した瓦屋である。113は平成12年度高松城跡(西の丸町)概報で巴文の変形した草状文の意匠とされるもので、17世紀前半のものである。114は石製の硯で海部両端に朱と思われる赤い顔料が付着している。

第3章 まとめ

以上3面の遺構面の存在を想定した。

あらためて遺構面と遺構との関係をまとめると、最下面である第3面（標高0.9m前後）は、沖積作用が終了し付近が陸地化した後に包含層の自然堆積が進みその凹凸に一部土を入れて均した結果、形成された。この遺構面ではN09° Eの方位を基軸として地割りが設定され、掘立柱建物跡や柵列・石組み溝が作られた。それらは攪乱部分を除けば遺跡のほぼ全域に広がる。

第3面の遺構群は火災により焼失し、燃えかすは薄い炭の層となる。炭層が乱れていないことから、第3面はこの時点で役割を終えた。焼け跡では、散乱した壁土などの焼土を巻き込んで再び整地が行われた。この結果、地面は約20cm高くなった。これが第2面である。第2面はN04° Eへと基軸がずれる。5度のずれは現実にはほとんど違和感を感じさせないものであろうが、町並みの中のある部分だけをずらすことは不可能であり、この火災がかなりの広範囲に広がっていたことを物語る。火災は新たなる地割りの構想の契機となり、単に旧に復することにはならなかった。焼け跡の上には整地を行っていく中で長い石積み（SZa01）が築かれた。石積みの上にどのような構造物が設けられたのか明らかにすることはできなかったが、奥行きが大きからそれなりの塀を構えることも十分可能である。この石積みにより今調査区内は東西に二分される。石積みの東は外、西は内となった。調査結果では、東と西のこの時期の遺構密度は極端に違い、また遺構の種類も異なり、外と内に対応する。石積みから東の中堀までは15m前後の距離がある。第3面では東端の石積み溝（SDa04）が西に向いており、その東にも遺構群が続いていくことが予想され、結果として中堀の真横かあるいはその近くまで屋敷群が広がっていたことになる。第2面では石積みの東に35mの空間が形成され、そこから中堀まで更に10m前後あるが、絵図によるとこの一体は上級家臣が住まう区画であり、果たしてこれを奥行きとする狭い屋敷地を設けたのか疑問は残る。あるいは中堀までおおきな空き地となったことも考えられないこともない。この石積みは第2面が使われ続けた間存続し、石積みの南端に門があった可能性も指摘した。その前（東）には大きな落ち込みが存在し、これはやがて埋め立てられ、その後石積みと平行し柵が設けられ、それは更に南北100m以上となる溝（SDa01）にとってかわられた。溝は城下の調査地点でよくみつかるとは素掘

りのものであるが、位置や長さからみて計画的に作られたものであることは間違いない。

最後の第1面としたものは、石積みの上部構造物を壊し石積みや溝を埋め立てて更に土地の嵩上げを行って形成された。近代以降の整地土や攪乱によりその標高は1.4m以上であることまでしかわからない。埋め立てた溝の真上には簡易な柵が組まれ、第2面からの地割りが基本的には継続している。しかしこれ以外の遺構を検出してなく、第1面の具体的な様相は明らかでない。

次に各遺構面の時期を考えてみる。整地層出土の遺物でみると、まず第1-2面間では19世紀代と思われる遺物が出土している。次の第2-3面間も時期の判明するものは少ないが、火災による炭層から出土した備前焼播鉢は17世紀第4四半期～18世紀前葉頃の製品とみられ、軒丸瓦は同範の瓦がB地区の第1整地層上面と下面の間の18世紀前半ととらえられている整地層から出土している。このあたりから、火災の年代の上限を18世紀前半と考えたい。他の遺物もこれと矛盾しない。第3面下位は12F区では整地層である第4Ⅱ11層と自然堆積層とした同12層に分かれ、11H区は12層だけで構成される。11層では時期を限定できるような遺物は出土していない。最下層の12層は時期の上限を示す遺物として備前焼播鉢と肥前系陶器がある。高松城が築かれたのは1588年とされ、A地区の一带はそれより大きくは下らない時期に上級家臣が住むようになったはずである。第3面をこの時の遺構面とすると12層には基本的には1588年以後のものは含まれない。肥前陶器は1580年頃に生産が始まるとされ、12層に含まれる可能性は極めて低い。しかし12層下の基盤層上面を1588年に置いたとしても、この面は12F区で見られるように凹凸があり、標高差も12F区北端と11H区南端では20cmも存在する。しかも12層は整地層とは考えにくい土質である。築城期の遺構面は火災に遭うまで存続し続けている。18世紀前半までに範囲を広げ、この遺構面に落ちた遺物が何らかのはずみで土中にめり込んだかこの遺構面上にあったため12層出土遺物として取り上げたかの可能性を考えておきたい。

以上極めて大雑把ではあるが、第1面は19世紀以降、第2面は18世紀前半以降、第3面は1588年が遺構面の上限である。

最後にこれらの遺構面が平成7・8年度に把握したどの遺構面に対応すると考えるかを述べておく。

平成7・8年度遺構面は、その調査対象地を高松城

跡（西の丸町）B地区として現在整理作業を行っている。その中で整理担当者は遺構面を改めて検討している。詳しくは当該年度の概報（平成12年度サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告『浜ノ町遺跡・高松城跡（西の丸町）・西打遺跡』香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター、2001.3）を参照されたいが、当初の第1遺構検出面・上を第1面とし、第1遺構検出面・下を第2面、第1整地面・上を第3面、第1整地面・下を第4面、第2整地面を第5面、第3整地面を第6面としている。最初に述べたように、本報告の第1面とこの第1面は異なる。

今報告で最も特徴的な第3面から第2面への火事による整地と地割りの変化を鍵にすると、B地区の第5面から第4面への変化が現象的にはこれに近いと思われる。これは1718年の城下の大火により屋敷割りを整理したというものである。A地区では第2面の上限を18世紀前半としており、矛盾はしない。これで行くと、A地区第3面＝第2整地面＝B地区第5面、A地区第2面＝第1整地面・下＝B地区第4面になる。ただしA地区では3面にしか遺構面を分けることができなかつたため、A地区第2面＝第1整地面・上になる可能性もある。最初に考えた遺構の変遷はかなり大胆なものであるといわざるをえないのであるが、隣り合っている場所によって整地回数に差があるというのでない限り（つまり同一時期でも標高差が存在することを認めることになり、遺構面の整合がより難しくなる）、第4図8層と9層の境を第1整地面・下とせざるをえなくなる。基本層序の項で土質が似るため両者を1単位としたのであるが、仮に第1整地面・下としても、第2面に属するとした遺構がそれぞれ第1整地面・上と下のどちらに属するのか明らかにできない。

調査区	遺構名	掘り込み面	報告書 遺構名	
12F区	F区SA01	第1面	SAa01	
12F区	F区SP01	第3面以上	SPa001	
12F区	F区SP02	第3面以上	SPa002	
12F区	F区SP03	第3面以上	SPa003	
12F区	F区SP04	第3面以上	SPa004	
12F区	F区SP005	第3面	SPa005	SAa02
12F区	F区SP006	第3面	SPa006	SAa02
12F区	F区SP007	第3面	SPa007	SAa02
12F区	F区SP008	第3面	SPa008	SAa02
12F区	F区SP009	第3面	SPa009	SAa02
12F区	F区SP010	第3面	SPa010	SAa02
12F区	F区SP011	第3面	SPa011	SAa02
12F区	F区SP012	第3面	SPa012	SAa02
12F区	F区SP013	第3面	SPa013	SAa02
12F区	F区SP014	第3面	SPa014	SAa02
12F区	F区SP015	第3面	SPa015	SAa02
12F区	F区SP018	第3面以上	SPa016	
12F区	F区SP019	第3面以上	SPa017	
12F区	F区SP020	第3面	SPa018	SAa02
12F区	F区SP021	第3面	SPa019	SAa02
12F区	F区SP022	第3面以上	SPa020	
12F区	F区SP023	第3面以上	SPa021	
12F区	F区SP024	第3面以上	SPa022	
12F区	F区SP025	第3面以上	SPa023	
12F区	F区SP026	第3面以上	SPa024	
12F区	F区SP029	第2か3面	SPa025	
12F区	F区SP030	第3面以上	SPa026	
12F区	F区SP031	第3面以上	SPa027	
12F区	F区SP032	第3面以上	SPa028	
12F区	F区SP033	第3面以上	SPa029	
12F区	F区SP034	第3面	SPa030	SBa02
12F区	F区SP035	第3面以上	SPa031	
12F区	F区SP037	第3面	SPa032	SBa02
12F区	F区SP038	第3面	SPa033	SBa02
12F区	F区SP039	第3面	SPa034	SBa02
12F区	F区SP040	第3面	SPa035	SBa02
12F区	F区SP041	第3面以上	SPa036	
12F区	F区SP042	第3面	SPa037	SBa02
12F区	F区SP043	第3面以上	SPa038	
12F区	F区SP044	第3面下位以上	SPa039	
12F区	F区SP045	第3面下位以上	SPa040	
12F区	F区SP046	第3面下位以上	SPa041	
12F区	F区SP047	第3面下位以上	SPa042	
12F区	F区SP048	第3面下位以上	SPa043	
12F区	F区SP049	第1面以上	SPa044	
12F区	F区SP050	第1面以上	SPa045	
12F区	F区SP051	第1面以上	SPa046	
12F区	F区SP052	第1面以上	SPa047	
12F区	F区SP053	第1面以上	SPa048	
12F区	F区SP054	第1面以上	SPa049	

調査区	遺構名	掘り込み面	報告書 遺構名	
12F区	F区SP055	第1面以上	SPa050	
12F区	F区SP056	第3面	SPa051	
12F区	F区SP057	第3面以上	SPa052	
12F区	F区SP058	第3面	SPa053	SAa02
12F区	F区SP059	第3面以上	SPa054	
11H区	H区SP001	第3面	SPa055	SBa05
11H区	H区SP002	第3面以上	SPa056	
11H区	H区SP005	第3面以上	SPa057	
11H区	H区SP006	第3面以上	SPa058	
11H区	H区SP007	第3面	SPa059	SBa04
11H区	H区SP008	第3面	SPa060	SBa05
11H区	H区SP009	第3面以上	SPa061	
11H区	H区SP010	第3面	SPa062	SBa05
11H区	H区SP011	第3面以上	SPa063	
11H区	H区SP012	第3面以上	SPa064	
11H区	H区SP013	第3面以上	SPa065	
11H区	H区SP014	第3面	SPa066	SBa05
11H区	H区SP015	第3面	SPa067	SBa04
11H区	H区SP016	第3面	SPa068	SBa04
11H区	H区SP017	第3面以上	SPa069	
11H区	H区SP019	第3面	SPa071	SBa05
11H区	H区SP020	第3面以上	SPa072	
11H区	H区SP021	第3面以上	SPa073	
11H区	H区SP022	第3面以上	SPa074	
11H区	H区SP023	第3面以上	SPa075	
11H区	H区SP024	第3面	SPa076	SBa04
11H区	H区SP025	第3面以上	SPa077	
11H区	H区SP026	第3面以上	SPa078	
11H区	H区SP027	第3面以上	SPa079	
11H区	H区SP028	第3面以上	SPa080	
11H区	H区SP029	第3面以上	SPa081	
11H区	H区SP038	第2面	SPa082	SBa01
11H区	H区SP040	第2面以上	SPa084	
11H区	H区SP044	第2面以上	SPa085	
11H区	H区SP045	第2面以上	SPa086	
11H区	H区SP046	第2面以上	SPa087	
11H区	H区SP047	第2面以上	SPa088	
11H区	H区SP048	第2面以上	SPa089	
11H区	H区SP049	第2面	SPa090	SBa01
11H区	H区SP053	第2面以上	SPa091	
11H区	H区SP054	第3面以上	SPa092	
11H区	H区SP055	第2面以上	SPa093	
11H区	H区SP056	第3面以上	SPa094	
11H区	H区SP059	第2面以上	SPa095	
11H区	H区SP060	第2面以上	SPa096	
11H区	H区SP061	第2面以上	SPa097	
11H区	H区SP063	第2面以上	SPa098	
11H区	H区SP065	第2面以上	SPa099	
11H区	H区SP071	第2面以上	SPa100	
11H区	H区SP072	第2面以上	SPa101	

第1表 遺構番号対照表(1)

調査区	遺構名	掘り込み面	報告書 遺構名	
11H区	H区 SP073	第2面以上	SPa102	
11H区	H区 SP074	第2面以上	SPa103	
11H区	H区 SP075	第2面以上	SPa104	
11H区	H区 SP076	第2面以上	SPa105	
11H区	H区 SP077	第2面以上	SPa106	
11H区	H区 SP078	第2面以上	SPa107	
11H区	H区 SP079	第2面以上	SPa108	
11H区	H区 SP080	第2面以上	SPa109	
11H区	H区 SP081	第2面以上	SPa110	
11H区	H区 SP083	第2面以上	SPa111	
11H区	H区 SP084	第3面	SPa112	SBa03
11H区	H区 SP085	第3面以上	SPa113	
11H区	H区 SP089	第2面以上	SPa117	
11H区	H区 SP090	第2面以上	SPa118	
11H区	H区 SP091	第3面以上	SPa119	
11H区	H区 SP092	第3面以上	SPa120	
11H区	H区 SP093	第3面以上	SPa121	
11H区	H区 SP094	第3面以上	SPa122	
11H区	H区 SP095	第3面	SPa123	SAa03
11H区	H区 SP096	第3面以上	SPa124	
11H区	H区 SP097	第3面	SPa125	SAa03
11H区	H区 SP099	第3面以上	SPa126	
11H区	H区 SP100	第3面	SPa127	SAa03
11H区	H区 SP101	第3面以上	SPa128	
11H区	H区 SP102	第3面以上	SPa129	
11H区	H区 SP103	第2面以上	SPa130	
11H区	H区 SP104	第3面	SPa131	SBa05
11H区	H区 SP105	第3面	SPa132	
11H区	H区 SP106	第3面	SPa133	SBa05
11H区	H区 SP108	第3面	SPa135	SBa04
11H区	H区 SP110	第3面以上	SPa137	
11H区	H区 SP111	第3面以上	SPa138	
11H区	H区 SP112	第3面以上	SPa139	
11H区	H区 SP113	第3面	SPa140	SBa05
11H区	H区 SP114	第3面	SPa141	SBa05
11H区	H区 SP115	第3面以上	SPa142	
11H区	H区 SP116	第3面以上	SPa143	
11H区	H区 SP117	第3面	SPa144	SBa05
11H区	H区 SP118	第3面	SPa145	SBa05
11H区	H区 SP119	第3面以上	SPa146	
11H区	H区 SP120	第3面以上	SPa147	
11H区	H区 SP121	第3面	SPa148	SBa05
11H区	H区 SP125	第3面以上	SPa152	
11H区	H区 SP126	第3面以上	SPa153	
11H区	H区 SP127	第3面	SPa154	SBa04
11H区	H区 SP128	第3面	SPa155	
11H区	H区 SP129	第3面以上	SPa156	
11H区	H区 SP130	第3面以上	SPa157	
11H区	H区 SP131	第3面以上	SPa158	
11H区	H区 SP132	第3面以上	SPa159	

調査区	遺構名	掘り込み面	報告書 遺構名	
11H区	H区 SP133	第3面以上	SPa160	
11H区	H区 SP134	第3面以上	SPa161	
11H区	H区 SP135	第3面以上	SPa162	
11H区	H区 SP136	第3面以上	SPa163	
11H区	H区 SP138	第3面以上	SPa164	
11H区	H区 SP139	第3面以上	SPa165	
11H区	H区 SP140	第3面以上	SPa166	
11H区	H区 SP141	第3面以上	SPa167	
11H区	H区 SP142	第3面以上	SPa168	
11H区	H区 SP143	第3面以上	SPa169	
11H区	H区 SP144	第3面	SPa170	SAa03
11H区	H区 SP145	第3面	SPa171	SBa03
11H区	H区 SP149	第3面	SPa175	SAa03
11H区	H区 SP150	第3面	SPa176	SAa03
11H区	H区 SP155	第3面以上	SPa181	
11H区	H区 SP156	第3面以上	SPa182	
11H区	H区 SP157	第3面以上	SPa183	
11H区	H区 SP159	第3面以上	SPa185	
11H区	H区 SP160	第3面以上	SPa186	
11H区	H区 SP164	第3面以上	SPa190	
11H区	H区 SP165	第3面	SPa191	SBa03
11H区	H区 SP166	第3面	SPa192	SBa03
11H区	H区 SP170	第2面	SPa196	SBa01
11H区	H区 SP171	第2面以上	SPa197	
11H区	H区 SP173	第2面以上	SPa199	
11H区	H区 SP174	第2面以上	SPa200	
11H区	H区 SP175	第2面以上	SPa201	
11H区	H区 SP176	第2面以上	SPa202	
11H区	H区 SP177	第3面	SPa203	SBa03
12F区	F区 SK05	第2面	SPa204	
11H区	H区 SP003	第3面	SPa205	SBa05
11H区	H区 SP098	第3面	SPa206	SAa03
11H区	H区 SP041	第3面	SPa207	
12F区	F区 SK01	第3面	SKa01	
12F区	F区 SK02	第3面	SKa02	
11H区	H区 SP058	第2面	SKa03	
11H区	H区 SP082	第2面	SKa04	
11H区	H区 SK01	第3面	SKa05	
11H区	H区 SK04	第3面	SKa06	
11H区	H区 SK05	第2面	SKa07	
11H区	H区 SK06	第2面	SKa08	
11H区	H区 SD01	第2面	SDa01	
12F区	F区 SD01	第2面	SDa01	
12F区	F区 SD02	第3面下位	SDa02	
11H区	H区 SD02	第3面	SDa03	
11H区	H区 SD10	第3面	SDa04	
12F区	F区 SZ01	第2面	SZa01	
12F区	F区 SX01	第3面下位	SXa01	
12F区	F区 SX02	第3面下位	SXa02	
12F区	F区 SX03	第3面下位	SXa03	

第2表 遺構番号対照表(2)

遺構番号	遺物内容
SPa001	弥生1.土師質1
SPa002	土師1
SPa003	弥生2.土師質播鉢1
SPa004	土師1.須恵坏1
SAa02-SPa006	土師2
SAa02-SPa007	土師皿1
SPa016か017	土師質1
SAa02-SPa019	土師5
SPa021	土師質1
SPa022	土師質1
SPa023	土師3.土師質1.須恵2
SPa029	土師1
SPa039	瓦器1.土師質2
SPa040	備前?11
SPa041	土師坏1.土師4.土師質2
SPa042	土師3
SPa048	土師1
SPa051	土師2
SPa052	土師1
SAa02-SPa053	弥生1.土錘1
SPa056	土師3.土師質3
SPa065	土師8
SBa05-SPa066	須恵1.土師質2
SPa067	土師5.瓦器1.焼土2
SPa069	陶磁器1.瓦器1.土師2.土師質3.須恵1
SPa072	土師3.土師質1
SPa074	平瓦1
SBa01-SPa082	平瓦3
SPa084	鉄製品1.土師質2.土師2.陶器1
SPa085	土師1
SPa086	土師皿1
SPa087	土師皿2
SPa088	須恵椀1.土師1
SPa091	土師3.土師質2
SPa092	土師1
SPa093	備前1.土師4
SPa095	土師2.土師質1
SPa096	須恵2.土師9.土師質4.青磁1
SPa100	瓦器1.土師2
SPa101	土師1
SPa103	平瓦1.備前1.土師質2.土師6
SPa104	土師2.土師質1
SPa105	土師皿1他6.土師質1
SPa107	須恵1.土師2
SPa111	備前1.須恵1.土師5
SBa03-SPa112	須恵2
SPa113	古銭1.土師2.土師質4
SPa117	須恵1.土師皿1
SPa122	土師質1.土師6
SAa03-SPa206	須恵1
SPa128	土師3.土師質2
SPa137	土師2
SBa05-SPa140	土師3.土師質3.瓦器1
SBa05-SPa141	土師質2
SPa142	土師質2.土師2.須恵1
SPa163	須恵1

遺構番号	遺物内容
SPa169	土師1
SPa183	土師3.土師質2.平瓦2
SPa185	土師6.土師質2
SPa186	瓦器1.土師1.土師質3
SBa03-SPa191	土師9.土師質3.瓦器1
SPa201	土師1.土師質1
SPa202	土師質1
SPa204	杭1
SAa01	土師質土釜1他1.須恵3.丸瓦1.平瓦5.土師15.備前1
SKa01	平瓦2.須恵細3.土鍋脚1.備前細1.土師質5.土師15.土師椀1皿2大皿?1
SKa02	備前1.須恵2.平瓦1.瓦器4.土師質16.土師53.褐釉陶器7他1.瀬美?.白磁1
SKa04	土師質4.土師3.須恵2
SKa05	土師12.土師質5.須恵1
SKa06	土師1.土師質1.
SKa07	平瓦1.土師質6.土師3.瓦器1
SKa08	平瓦3.土師質5.土師細2
SDa01	弥生3.須恵鉢2他6.瓦器5.備前大甕2他5.土師質土釜6.播鉢1他76.土師皿5他135.平瓦40.丸瓦5.軒丸2.瀬美?2.土製品1.磁器2.竈1.土錘1.鉄製品4
SDa02	須恵器細1.土師器細1
SXa01	平瓦4.備前5.亀山1.須恵椀1壺1.播鉢1.瓦器6.土師質土釜1他8.土師49.瓦質土鍋1.陶器1
SXa02	瓦器7.備前播鉢3他5.大土錘1.土師質土釜2他23.須恵4.平瓦2.土師椀2皿2他61.丸瓦1.鉄釘?1鉄塊1鉄滓1
SXa03	鉄滓1.須恵3.亀山2.備前1.瓦器3.土師質土釜2他20.土師皿5坏1他68.白磁1.青磁1.土錘1
2層	陶器1
3層	巻き貝1.平瓦2.丸瓦1.竈1.肥前磁器V期1.中国?磁器1
4・5層	平瓦7.丸瓦1.備前壺1.土師質5.土師6.磁器1.瀬美折り縁皿1
4層	土師質1.土師1
5層	土師質1.土師1
6・7層	平瓦3.丸瓦4.備前?1.土師質14.肥前?磁器1
8層	須恵1.土師質3
8・9層	備前2.亀山2.土師質7.土師10.平瓦2
9層	鉄釘?1.平瓦3.瓦器6.備前2.土師20.土師質20.丸瓦1
8・10層	須恵1.瓦器1.土師椀1他5.土師質5.白磁Ⅱ類1
10・11層	土師4.土師質5
10層	平瓦1.青磁1.土師質2.土師12.土錘1
11層	須恵椀2他5.瓦器10.亀山2.土師質土釜3他72.土師皿2他55.土錘1.備前1.平瓦1
12層	亀山4.中国染め付け2.備前播鉢1他7.瓦器12.須恵9.平瓦12.土師質土鍋1釜2他78.土師皿1他102.丸瓦2.大土錘1.土錘1.白磁1

第3表 遺構別出土遺物一覧

遺物番号	挿図	図版	種類・器種	遺構名	残存率	口径	胎土	色調	外面調整	内面調整	備考
1	12	22	木製品・杭	SAa01		39.2					径4~6cmの杭がやせる
2	13		白磁・碗	SBa01- SPA082	小破片		0~0.5mmの透明砂粒を少量	(釉)白磁釉・灰白10Y7/1。 (胎)灰白5Y7/1	回転行、後施釉	回転行、後施釉	参考半径7.4cm
3	16		土師器・小皿	SKa04	7/8		0~1mmの透明砂粒を多量。0~1mmの白色砂粒。黒色砂粒を少量	橙5YR7/6	回転行、回転糸切り?	板行、回転行	
4	16		陶器・徳利	SKa04	8/8		0~1mmの透明砂粒を少量	外釉極暗赤褐5YR2/3胎、 灰N8/内釉暗褐7.5YR3/4	回転行	回転行	内面にも釉
5	17		土師質・播鉢	SKa07	8/8		1~4mmの白色砂粒・透明砂粒・褐色砂粒を多量。1mmの金雲母を少量。1~3mmのシャーマーモットを少量	(釉)内暗褐色2.5YR3/4。外極暗赤褐色5YR2/3。(胎)灰N8/	指頭痕後板行	行、後即目(5条1単位)	底と破れ口とその内面に煤
6	17		備前焼・壺	SKa07	1/8		1~3mmの白色砂粒・暗紫砂粒を多量。1~4mmの桃色砂粒を少量	灰N6/。灰7.5Y6/1。にぶい赤褐5YR5/3	自然釉。波状文。沈線4条。回転行	回転行	自然釉が厚くかぶる
7	19		土師器・坏	SKa08	2/8	100	精良	(内)7.5YR7/6。(外)浅黄橙7.5YR8/6	回転行、板行	行	胎土精良。仕上げ丁寧
8	19		土師質・土釜	SKa08	小破片	30.9	1mmの金雲母を多量。1~2mmの白色砂粒を中量	浅黄橙10YR8/4	指押さえ。行。コテ	板行	径不確定
9	19		土師質・播鉢	SKa08	小破片	17.1	2mmの石英・白色砂粒・1mmの金雲母	橙7.5YR7/6	コテ。指押さえ。コテ	板行、ワタ	土鍋の可能性も
10	19		土師質・土釜	SKa08	4/8	25.0	1~4mmの白色砂粒。1~3mmの透明砂粒を多量	白灰色10YR7/1。にぶい黄橙10YR7/2	指頭痕後行。板行	板行	外面・内面上部煤付着
11	20		中国産青磁・碗	SDa01	小破片		1~2mmの透明砂粒を多量	(釉)青磁釉・灰7.5YR8/1。 (胎)灰白N8/	施釉。片切り彫り。回転行	回転行、後施釉。釉	外面上方釉。内面見込み釉付
12	20	18	中国産染付・碗	SDa01	1/8	9.6	精良	(胎)灰白2.5YR8/2。(釉)浅黄5Y7/3呉須暗青色	回転行、後施釉	回転行、後施釉	
13	20	18	中国産染付・碗	SDa01	1/8	12.6	精良	(胎)淡黄2.5Y8/3。(釉)灰色5Y7/2呉須暗青色	回転行、後施釉	回転行、後施釉	漳州産
14	20	18	中国産染付・碗	SDa01	2/8		精良	(胎)灰白2.5Y8/2。(釉)淡黄2.5Y8/3	回転行、後施釉	回転行、後施釉	
15	20		中国産染付・碗?	SDa01	小破片		精良	(胎)浅黄橙10YR8/3。(釉)灰白5Y8/1	回転行	回転行	漳州産
16	20	19	中国産染付・碗?	SDa01	小破片		精良	(釉)呉須暗青色。透明釉。 (胎)灰白7.5Y8/1	回転行、後施釉	回転行、後施釉	
17	20	18	中国産染付・碗	SDa01	5/8		精良	(胎)灰白5Y8/2。(釉)灰白2.5Y8/1呉須暗青色	回転行、後施釉	回転行、後施釉後	漳州産
18	20		青磁・碗	SDa01	小破片		精良	(釉)青磁釉付。灰2.5GY6/1。(胎)灰白N7/	回転行、後施釉	回転行、後施釉	傾き不明
19	20	19	肥前系染付・碗	SDa01	小破片		~0.5mmの透明砂粒・黒色砂粒を多量	(釉)呉須暗青色。透明釉 (胎)灰白5Y8/1	回転行、後施釉	回転行、後施釉	

第4表 出土遺物観察表(1)

第5表 出土遺物観察表(2)

遺物番号	挿図	図版	種類・器種	遺構名	残存率	口径	胎土	色調	外面調整	内面調整	備考
20	20	19	肥前系?染付・皿?	SDa01	1/8	~0.5mmの黒色砂粒を多量		(釉)呉須藍色。透明釉。 (胎)灰白N8/	回転行`後施釉	回転行`後施釉	碁笥底
21	20	20	瀬戸美濃陶器・天目碗	SDa01	1/8	~1mmの透明砂粒を多量		(釉)鉄釉・暗赤褐5YR3/4。 (胎)黄淡2.5YR8/3	回転行`後施釉	回転行`後施釉	
22	20	20	陶器・碗	SDa01	小破片	~1mmの白色砂粒を多量		(釉)鈍い黄褐10YR5/4。 (胎)灰白2.5YR8/1	回転行`後施釉	回転行`後施釉	内外全面釉
23	20	20	陶器・皿	SDa01	小破片	~1.5mmの透明砂粒を多量		(釉)灰白?明淡黄橙色。 (胎)灰白7.5YR8/2	回転行`削り。回転行`後施釉	回転行`後施釉	内外貫入のある釉
24	20	20	陶器・器種不明	SDa01	小破片	浅黄橙10YR8/3		呉須暗青色。釉:透明釉	回転行`削り	回転行`後施釉	傾き不確定
25	20	20	染焼?・碗?	SDa01	3/8	~1mmの白色砂粒を多量		(釉)赤黒2.5YR17/1。透明釉。 (胎)橙2.5YR6/6	回転行`後施釉	回転行`後施釉(黒色釉)	
26	20	20	肥前系陶器?・向付	SDa01	小破片	1~2mmの白色砂粒を少量		(釉)灰白5Y7/1。(胎)にぶい。橙5YR6/4	行`。糸切り	行`後施釉	
27	20	20	肥前系?陶器・向付	SDa01	小破片	~1mmの白色砂粒を多量		(釉)7.5Y5/4褐10YR4/4。 (胎)にぶい。黄橙10YR7/3	施釉		隣の部品との接合面
28	20	20	備前焼?陶器・灯明具	SDa01	1/8			(釉)褐7.5YR4/3。(胎)灰白N7/	回転行`後施釉	回転行`後施釉	径不確定
29	20	20	土師器・小皿	SDa01	2/8	~0.5mmの白色砂粒を多量		橙2.5YR7/6	回転行`	回転行`	
30	20	20	土師器・小皿	SDa01	小破片	1~2mmの白色砂粒。1mmの茶色砂粒を多量		浅黄橙10YR8/4。にぶい。黄橙10YR8/4	回転行`。糸切り	回転行`	
31	20	20	土師器・灯明皿	SDa01	2/8	~2mmの透明砂粒を多量		浅黄橙10YR8/4。浅黄橙7.5YR8/4	回転行`	回転行`	口縁内面一部に煤
32	20	20	陶器・蓋付碗?	SDa01	1/8	3mmの茶色砂粒を多量		(内)橙5YR7/8。(外)橙7.5YR6/8	コガ`。指頭痕。施釉	板行`	内外透明施釉
33	20	20	土師質・火鉢	SDa01	小破片	~2mmの白色砂粒・桃色砂粒・1mmの金雲母を多量		橙7.5YR7/6	指頭痕。行`。指頭痕後行`	板行`	
34	20	20	土師質・土壺?	SDa01	小破片	~2mmの白色砂粒。~1mmの金雲母を多量		橙7.5YR7/6	コガ`。板行`	指頭痕後板行`	径不確定
35	20	22	鉄製品・小刀	SDa01	切先欠						関部分鉄が厚く形態不明
36	25		土師質土器・器種不明	SBa05-SPa145	小破片	~2mmの透明砂粒を多量。1mmの黒色砂粒を少量		浅黄橙10YR8/4	回転行`	回転行`	
37	26		備前焼・甕	SAa02-SPa014	小破片	1~5mmの白色砂粒を多量。~1mmの透明砂粒を少量		明赤灰2.5YR7/1。にぶい。赤褐5YR5/3。橙2.5YR6/6	コガ`	コガ`	
38	27		陶器・壺	SAa02-SPa003	小破片	~1mmの白色砂粒・黒色砂粒を多量		赤10R5/4。暗褐灰10YR4/1。灰赤10R6/2	行`	板行`	

遺物番号	挿図	図版	種類・器種	遺構名	残存率	口径	胎土	色調	外面調整	内面調整	備考
39	27		肥前系磁器・碗	SPa052	小破片		精良	(胎)灰白N8。呉須藍色	回転行。後施釉	回転行。後施釉	天地傾き不確定
40	29		土師質・土釜	SKa01	小破片	1~3mmの白色砂粒。1~2mmの透明砂粒。金雲母を多量		浅黄橙7.5YR8/3。淡橙5YR8/4	行	板行。行	
41	29		丸瓦	SKa01	3/8	径1~2mmの白色砂粒を多量		暗灰N3。灰N4。灰N8/	板行。後行	北。裨	
42	30	19	中国産染付・皿	SKa02	1/8	精良		(釉)呉須。暗青色。透明釉。(胎)灰白N8/	回転行。後施釉	回転行。後施釉	
43	31		土師器・坏	SKa06	小破片	1mmの白色砂粒		灰白10YR8/2	削り後行	回転行	
44	32		瀬戸美濃陶器・小皿	SDa02	1/8	~1mmの透明砂粒を多量。~1mmの白色砂粒を少量		(釉)淡黄5Y8/3。淡黄5Y7/3。(胎)灰白5Y8/1	回転行。後施釉	回転行。後施釉	内外全面釉
45	33		陶器・土鍋	第1-2面 間整地層	小破片	精良		(釉)青磁釉。7。灰2.5GY6/1。(胎)灰N6/	回転行。後施釉	回転行。後施釉	
46	33		陶器・皿?	第1-2面 間整地層	小破片	精良		(釉)灰白5GY8/1。(胎)灰白2.5Y8/2	回転行。後施釉	回転行。後施釉	
47	33		肥前系磁器・皿	第1-2面 間整地層	1/8	精良		青磁釉。明緑灰7.5GY8/1。(胎)灰白10YR8/2	回転行。後施釉。回転削り	施釉後。蛇目釉。行	蛇目釉ハギ
48	33	20	瀬戸美濃陶器・皿	第1-2面 間整地層	6/8	~1mmの白色砂粒を多量		(釉)灰白10YR7/2。(胎)灰白10YR8/1	回転行。後施釉。回転削り	回転行。後施釉	外底窯道具痕。割れ口に焼け
49	33		土師器・小皿	第1-2面 間整地層	2/8	精良		浅黄橙10YR8/3。(内)浅黄橙10YR8/4	削り板目痕。回転行	回転行	全体摩滅気味。削りか不明
50	33		土師器・灯明皿	第1-2面 間整地層	2/8	~1mmの白色砂粒		浅黄橙7.5YR8/6	回転行。糸切り	回転行	灯明皿。内面全体に煉
51	33		土師器・坏	第1-2面 間整地層	2/8	精良		(内)浅黄橙10YR8/4。(外)浅黄橙10YR8/3	回転行。板目痕	回転行	糸切り後。行。仕
52	33		土師器・坏	第1-2面 間整地層	2/8	1~2mmの白色砂粒を多量		浅黄橙7.5YR8/4	回転行。糸切り	回転行	
53	33		土師質・播鉢	第1-2面 間整地層	小破片	1~2mmの白色砂粒。1mmの金雲母を多量		浅黄橙10YR8/4	削り。指頭痕後行	板行。後卸目	径不確定。土釜と胎土同じ
54	33		陶器・大鉢	第1-2面 間整地層	小破片	40.7	0.5~2mmの白色砂粒を多量	(釉)外。暗赤褐5YR3/4。(釉)内。暗褐5YR3/1	回転行。後施釉	回転行。後施釉	
55	33		陶器・皿	第2-3面 間整地層	1/8	精良		(釉)透明釉(胎)灰白2.5Y8/1	回転行。後施釉	回転行。後施釉	
56	34		軒平瓦	第2-3面 間整地層	瓦当 完存		精良	灰N4/	板行	指行。板行	
57	34		備前焼・播鉢	第2-3面 間整地層	小破片	~1mmの白色砂粒を多量		灰赤2.5YR6/2。灰赤2.5YR5/2	板行	卸目	卸目単位不明

第6表 出土遺物観察表(3)

第7表 出土遺物観察表(4)

遺物番号	挿図	図版	種類・器種	遺構名	残存率	口径	胎土	色調	外面調整	内面調整	備考
58	34		中国白磁・皿	第3面下位	1/8	精良	(胎)灰白N8/(釉)灰白5Y1/1		回転行`後施釉	回転行`後施釉	畳付に砂状の物付着
59	34		中国白磁・皿	第3面下位	2/8	精良	(胎)灰白N8/(釉)灰白7.5Y7/1		回転行`後施釉	回転行`後施釉	
60	34		瀬戸美濃陶器・皿	第3面下位	小破片	精良	(胎)灰白2.5Y8/2。(釉)浅黄2.5Y7/4		回転行`後施釉	回転行`後施釉	
61	34		土師器・小皿	第3面下位	1/8	7.0	精良	浅黄橙10YR8/4	回転行`	回転行`	底部切り離し技法不明
62	34		土師器・小皿	第3面下位	小破片	精良	精良	浅黄橙7.5YR8/6	回転行`	回転行`	
63	34		土師器・坏	第3面下位	1/8	8.8	精良	浅黄橙7.5YR8/6	回転行`	回転行`	
64	34	22	鍍金鉄製品・器種不明	第3面下位	完存	6.9					
65	34	22	鍍金鉄製品・器種不明	第2-3面間整地層	完存						
66	34	19	中国産染付・碗	第2-3面間整地層	1/8	14.4	精良	(釉)呉須暗青色。透明釉(青味がかかる。(胎)灰白5Y8/1	回転行`後施釉	回転行`後施釉	
67	34	18	中国産染付・皿	第2-3面間整地層	1/8	14.2	精良	(胎)灰白10YR8/2。(釉)灰白2.5Y8/2。呉須。薄い。藍色	回転行`後施釉	回転行`後施釉	漳州産
68	34		中国産染付・碗	第2-3面間整地層	小破片	精良	精良	黄橙7.5YR8/8。明褐灰5YR7/2。呉須。薄い。藍色	回転行`後施釉	回転行`後施釉	外面文様種不明。内外全面釉
69	34	19	中国産染付・皿	第2-3面間整地層	2/8	14.6	精良	(釉)呉須暗青色。透明釉。(胎)白N8/	回転行`後施釉	回転行`後施釉	
70	34		磁器・皿?	第2-3面間整地層	小破片		0.5mmの透明砂粒を少量	(釉)灰白7.5Y8/1。(胎)灰白10YR8/2	回転行`後施釉	回転行`後施釉	胎土に磁器の透明感がなく濁る
71	34		中国産染付・皿	第2-3面間整地層	2/8	13.4	~0.5mmの黑色砂粒を多量	(釉)呉須暗青色。透明釉。(胎)灰白5Y8/1	施釉	回転行`後施釉	外面口縁に釉が厚くたれる
72	34		青磁・皿?	第2-3面間整地層	小破片	精良	精良	(胎)灰白N8/(釉)灰白7.5Y6/1	回転行`後施釉	回転行`後施釉	
73	34		肥前系陶器・刷毛目皿	第2-3面間整地層	小破片		~1mmの白色砂粒を多量	(釉)赤灰2.5YR6/4。赤灰2.5YR5/1。灰白5Y8/1。(釉)外施暗灰2.5YR3/1。(胎)に赤。赤褐2.5YR4/3	回転行`	回転行`後施釉	傾き。天地不明
74	34		肥前系陶器・皿	第2-3面間整地層	6/8		~1mmの白色砂粒を多量	(釉)灰白2.5Y8/2。(灰)灰白5Y6/2。(胎)橙7.5YR7/6	回転行`削り後施釉	施釉。胎土目2箇所	胎土目
75	34	20	肥前系陶器・皿	第2-3面間整地層	小破片		~1mmの黑色砂粒を少量	(釉)灰白5GY8/1。(胎)灰白2.5Y8/2	回転行`削り後施釉。貼付高台。砂目痕	回転行`後施釉。砂目痕	径不明。高台切れ目。砂目積み
76	34	20	陶器・天目碗	第3面下位	小破片	12	精良	(釉)鉄釉。暗赤褐5YR3/3。(胎)灰白2.5Y8/1	回転行`後施釉	回転行`後施釉	

遺物番号	挿図	図版	種類・器種	遺構名	残存率	口径	胎土	色調	外面調整	内面調整	備考
77	34		陶器・碗	第2-3面 間整地層	1/8		～1mmの透明砂粒を多量	(釉)灰白5Y7/2。(胎)灰白10YR8/2	回転行`後施釉	回転行`後施釉	内外面全体釉
78	34		陶器・碗?	第2-3面 間整地層	小破片		～1mmの透明砂粒を多量	(釉)灰白7.5Y。(胎)橙2.5YR7/6	回転行`後施釉	回転行`後施釉	胎土赤変が釉を透かして文様状
79	34		陶器・德利?	第2-3面 間整地層	小破片		～1mmの透明砂粒を多量	(釉)赤黒10R2/1。(灰)黄褐10YR4/2。(胎)灰白2.5Y7/1	回転行`後施釉	回転行`後施釉	天地不明
80	34		備前焼・皿	第3面下 位	1/8	9.1	～1mmの透明砂粒を多量	外にぶい赤褐2.5YR5/4。内にぶい橙2.5YR6/4	回転行`	回転行`	
81	34		備前焼・播鉢	第3面下 位	1/8		～1mmの透明砂粒を多量	外にぶい赤褐5YR5/3。内に赤10YR5/6	回転行`	回転行`後施釉	卸目8本一単位
82	34		土師質・播鉢	第2-3面 間整地層	小破片		～1mmの金雲母を多量。1～2mmの白色砂粒を中量	外に浅黄橙7.5YR8/6。内。橙7.5YR7/6	板行`。ヨ行`	ヨ行`。板行`後卸目	傾き不確定
83	34		土師質土器・火鉢	第2-3面 間整地層	小破片		～2mmの白色砂粒。1mmの金雲母	浅黄橙10YR8/4	カタフ`押印	板行`	点線円文?を押印
84	34		軒棧瓦	第2-3面 間整地層	小破片		1～2mmの白色砂粒を多量	にぶい黄橙10YR7/3。灰白2.5Y7/1			刻印有り「タ」 ヤ
85	34	21	陶器・器種不明	第2-3面 間整地層	小破片		精良	(胎)灰白2.5Y8/2。(釉)灰白5Y7/2	板行`後施釉	板行`	厚い板状。深い刻みを等間隔
86	34		土師質・土鉢	第2-3面 間整地層	8/8	1.1	～0.5mmの砂粒を多量	浅黄橙7.5YR8/3。灰白10YR8/2	行`	行`	
87	34		土師質・土鉢	第2-3面 間整地層	8/8	5.0	～1mmの砂粒を少量	にぶい、褐7.5YR5/4	行`	行`	棒に巻き付け整形
88	34		土師質・土鉢	第2-3面 間整地層	8/8	1.7	0.1～0.2mmの白色砂粒を少量。～0.1mmの黑色砂粒を少量	にぶい、黄橙10YR7/4。にぶい、橙7.5YR7/4	指頭痕後行`。行`	指頭痕後行`。行`	片側ずつ工具先で押さえ溝入れ
89	34	22	銅製品・器種不明	第2-3面 間整地層			銅				
90	35		中国青磁・碗	第3面下 位	小破片		密	(胎)灰白N7/(釉)灰白N7-7.5Y5/2	施釉	施釉	
91	35		中国?染付・碗	第3面下 位	小破片		精良	(胎)灰白N8/。(釉)灰白N8/。呉須	回転行`後施釉	回転行`後施釉	傾き不確定
92	35		中国磁器・皿	第3面下 位	1/8	10.6	精良	(胎)灰白N8/(釉)内、明青灰5B7/1。外、灰白10Y8/1	回転行`後施釉	回転行`後施釉	
93	35		肥前系陶器?・皿	第3面下 位	小破片		精良	(胎)灰白5Y7/1。(釉)灰白N7-5Y6/2	回転行`後施釉	回転行`後施釉	傾き不確定
94	35	20	肥前系陶器・皿	第3面下 位	2/8	14.0	～2mmの白色砂粒を少量	(釉)青磁釉N7`灰10YR4/2。(胎)黄灰2.5Y6/1	回転行`後施釉	回転行`後施釉	
95	35		陶器・天目碗	第3面下 位	小破片		精良	(胎)灰白2.5Y8/1。(釉)褐7.5YR4/4	回転行`後施釉	回転行`後施釉	

第8表 出土遺物観察表(5)

第9表 出土遺物観察表(6)

遺物番号	挿図	図版	種類・器種	遺構名	残存率	口径	胎土	色調	外面調整	内面調整	備考
96	35		陶器・器種不明	第3面下位	小破片		精良	(胎)灰白10YR8/1。(釉)灰白2.5Y8/1	回転行°	回転行°後施釉	傾き不確定
97	35		備前焼・壺	第3面下位	小破片		~1.5mmの白色砂粒を多量。1mmの暗紫砂粒を少量	にぶい赤褐2.5YR5/3。褐灰5YR6/1	回転行°後施釉	回転行°後施釉	波状文単位不明。径不確定
98	35		備前焼・壺	第3面下位	2/8	100	3~5mmの砂粒を多量	内:明赤褐2.5YR5/6。外:明赤褐5YR5/4	回転行°	回転行°	
99	35		備前焼・甕	第3面下位	小破片	428	1~3mmの白色砂粒を多量。1~3mmの暗紫砂粒を少量	にぶい赤褐2.5YR5/3。赤灰2.5YR4/1。暗褐灰7.5YR7/1	回転行°。自然釉	回転行°。自然釉	
100	35		備前焼・壺	第3面下位	2/8		精良	外:暗赤褐2.5Y5/4。内:暗灰黄2.5Y4/2	行°	回転行°	
101	35		備前焼・大平鉢	第3面下位	小破片		径2mmの白色砂粒を少量	内外:灰赤2.5YR4/2	回転行°	回転行°	
102	35		備前焼・播鉢	第3面下位	小破片		径2mmの白色砂粒を少量	内:灰赤2.5YR4/2。外:にぶい赤褐2.5YR4/3	回転行°	回転行°	
103	35		土師質・播鉢	第3面下位	小破片		径2mmの白色砂粒。石英。1mmの金雲母	橙7.5YR7/6	指押さえ後行°	板行°後行°	5本以上1単位の卸目
104	35		土師質・壺	第3面下位	ほぼ完存	135	~1mmの透明砂粒を多量。~1mmの白色砂粒を少量	浅黄橙10YR8/4。灰白2.5YR8/1	行°指頭痕板行°	行°	
105	35		土師質・土釜	第3面下位	小破片	335	径2mmの石英白色砂粒	浅黄橙10YR8/4	横行°	板行°	
106	35		土師質・土鉢	第3面下位	完存	44	径1mmの白色砂粒	にぶい赤褐2.5YR5/4	行°	行°	
107	35		土師質・土鉢	第3面下位	完存	57	径2mmの白色砂粒	灰白10YR8/2。灰黄褐10YR5/2	行°	行°	
108	35		土師質・土鉢	第3面下位	完存	26	径2mmの白色砂粒	にぶい褐7.5YR5/4	行°	行°	
109	35		鉄製品・釘?	第3面下位	完存?						下に先細り。上端は横に曲がる
110	36		土師器・小皿	攪乱	完存	78	1~2mmの透明砂粒。1mmの白色砂粒	浅黄橙7.5YR8/4。にぶい橙7.5YR7/4	回転行°	回転行°	作りが全体にやや粗雑な印象
111	36	21	土製品・器種不明	攪乱	ほぼ完存	72	径2mmの白色。黒色砂粒を多量	にぶい橙7.5YR6/4			断面5面の面取り
112	36		軒棧瓦	攪乱	小破片		1mmの白色砂粒	赤ト7°黒5Y3/1	板行°	板行°	刻印有り
113	36	21	軒平瓦	攪乱		113	径1~2mmの白色砂粒	灰N4/	板行°	板行°、指行°	
114	36	22	石製品・硯	攪乱	ほぼ完存			灰10Y4/1			朱らしきもの付着



12F区調査終了（北より）



12F区調査終了（北より）



12F区遺構完掘（東より、SDa01より東部分）



12F区 S A a01 及び標高0.7mでの遺構検出状況（東より）



11H区第2面調査終了（西より、中央部分）



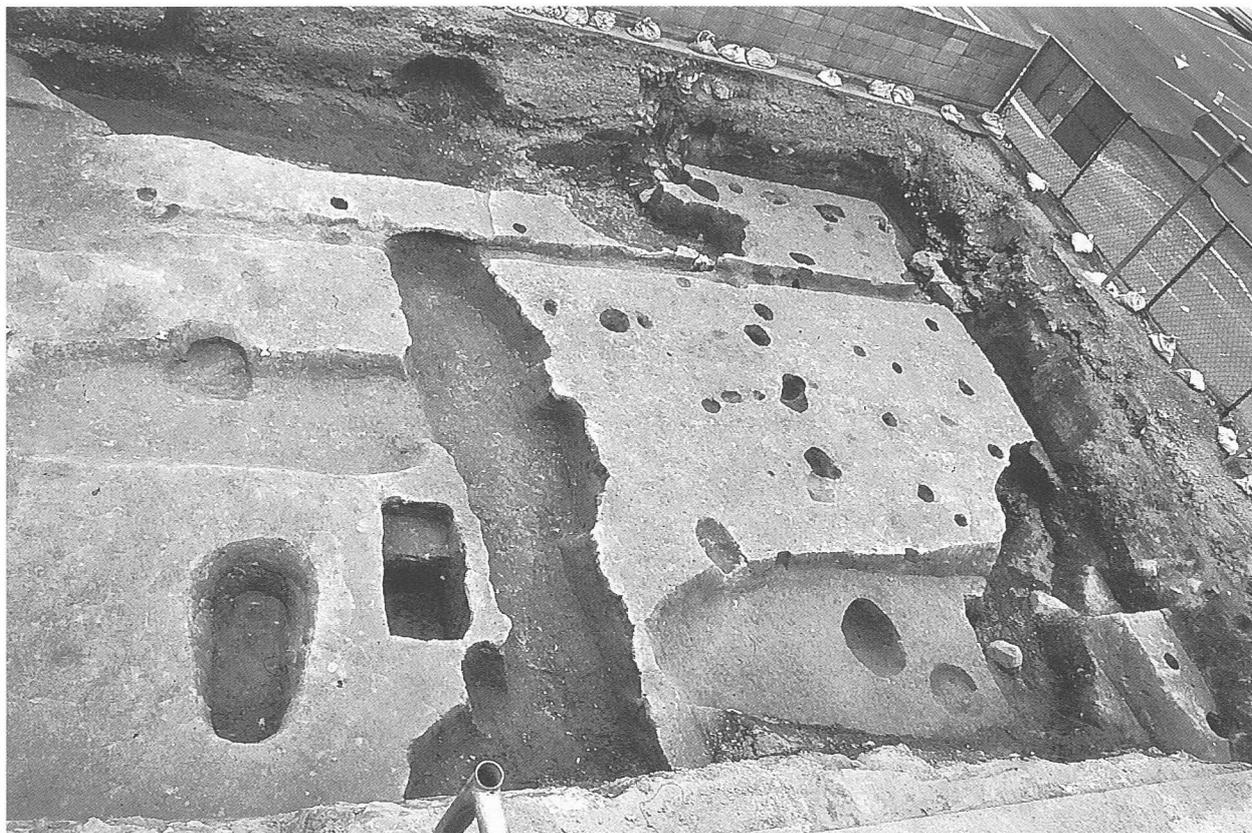
11H区第2面調査終了（西より、中央部分）



11H区第2～3面遺構完掘（西より）



11H区第3面遺構完掘（東から）



11H区第3面下位完掘状況（西より）



11H区東壁土層（南端部分）



12F区S A a01土層断面（南東より、後方杭残存検出）



11H区S P a190・106礎石等状況（西より）



12F区 S P a204土層断面（南より）



12F区 S P a204根石検出（北より）



11H区 S P a103土層断面 (南より)



11H区 S K a03土層断面 (西より)



12F区 S D a01 土層断面① (北より)



12F区 S D a01 土層断面② (北より)



12F区 S D a01 土層断面③ (北より)



11H区 S Z a01 調査風景 (南より)



11H区 S Z a01 と S K a08 との共存関係 (南より)



11H区 S Z a01 と S K a08 との共存関係 (南より)



11H区 S Z a01 前面石崩落状況（南より）



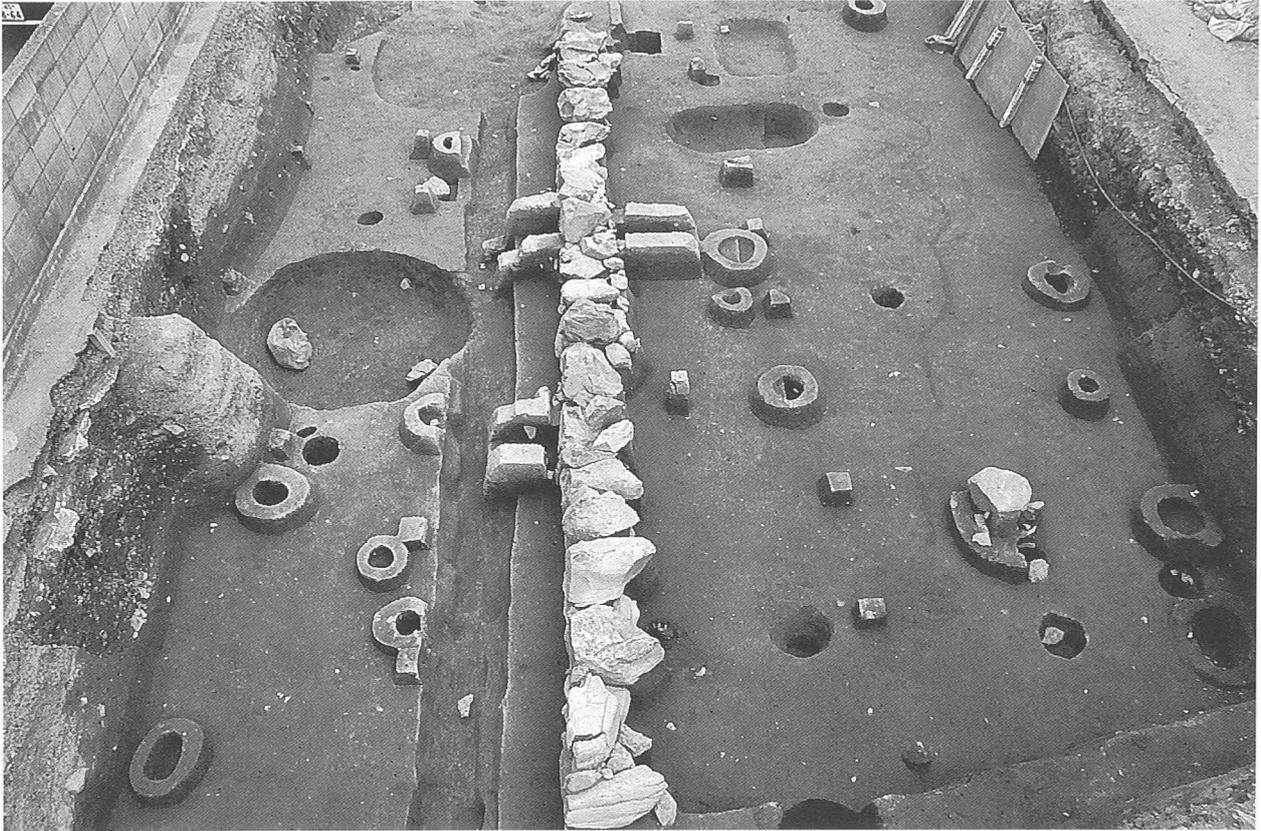
11H区 S Z a01 石積み状況（東より）



11H区 S Z a01北端部 (南西より)



11H区 S Z a01裏込め石状況 (北より)



11H区 S Z a01 (北より)



11H区 S Z a01 第 2 面整地後状況 (北より)



12F区 S Z a01 石抜き取り後埋土 (南より)



11H区 S P a183 柱痕検出 (西より)



11H区 S P a068 詰め石検出 (南西より)



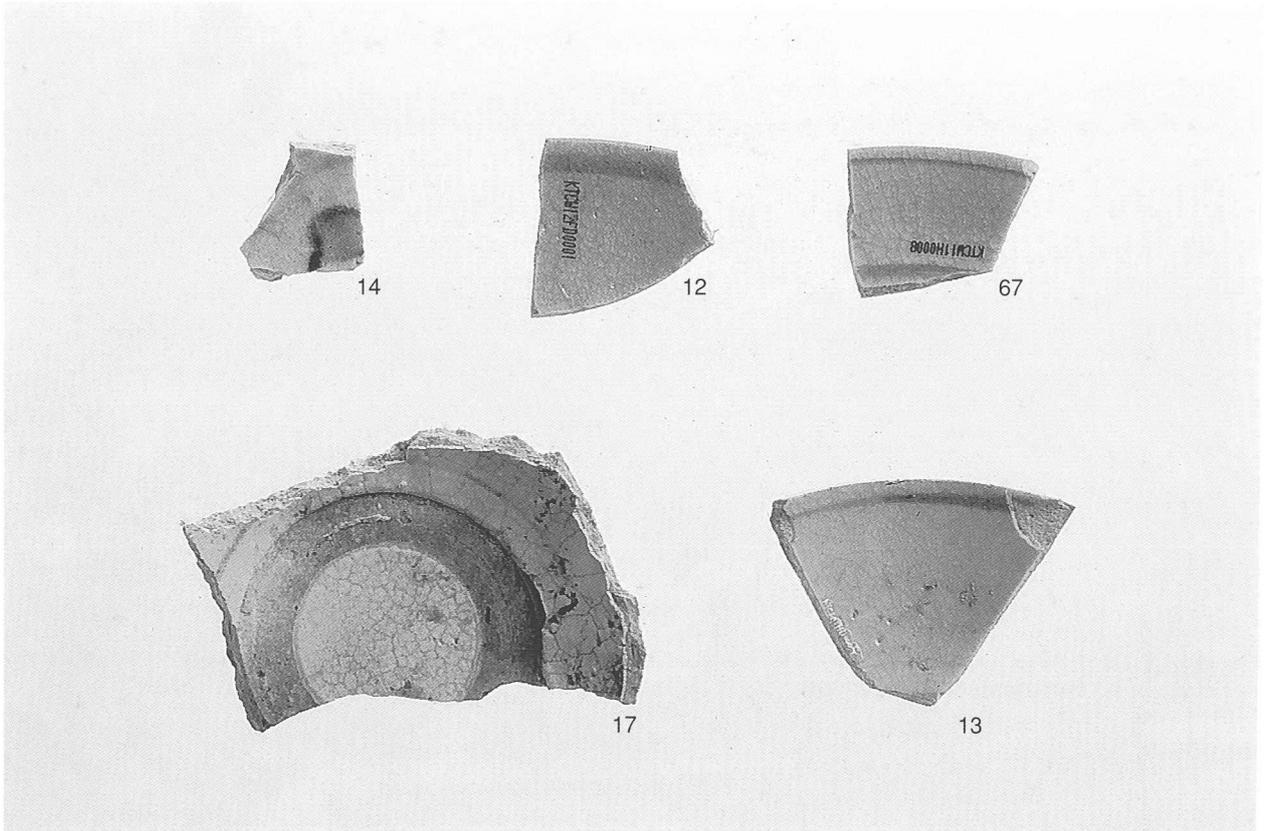
11H区 S P a068 詰め石・根石状況 (西より)



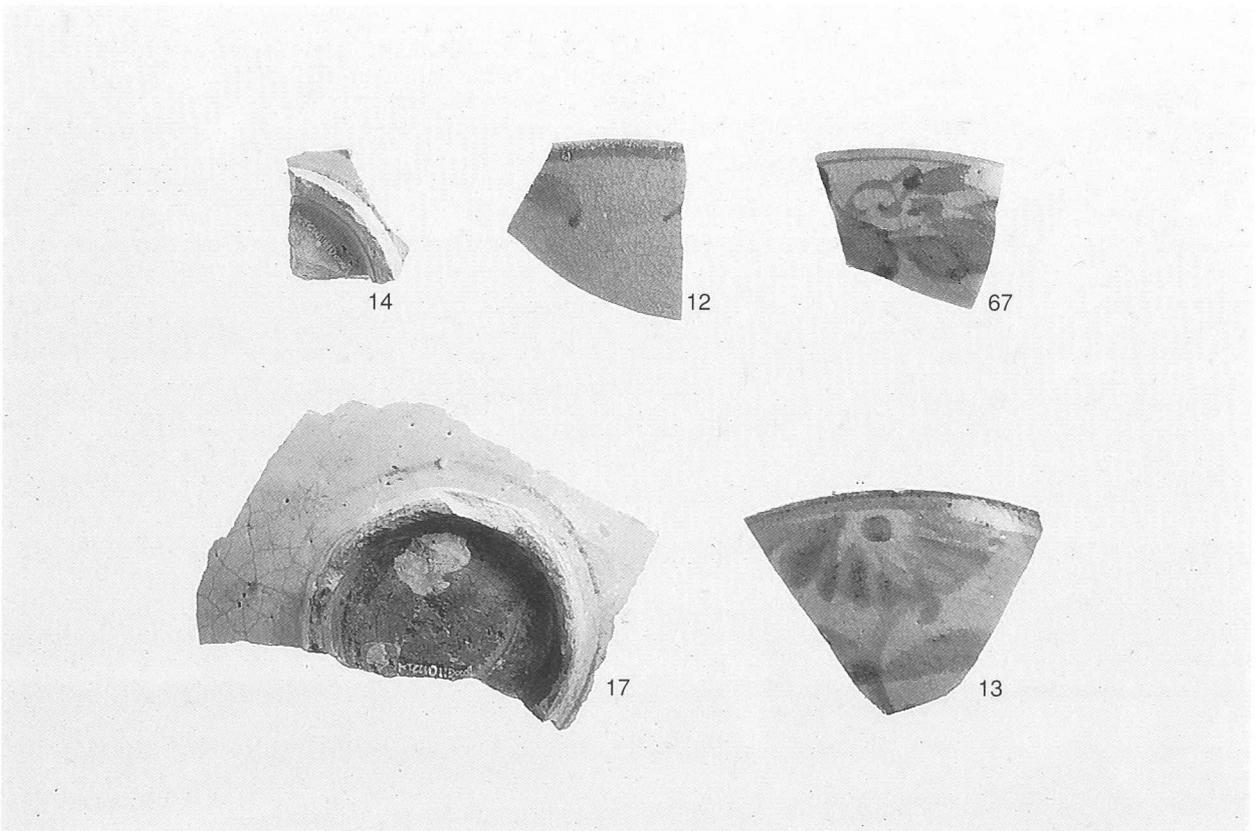
11H区 S D a04 立面 (西より)



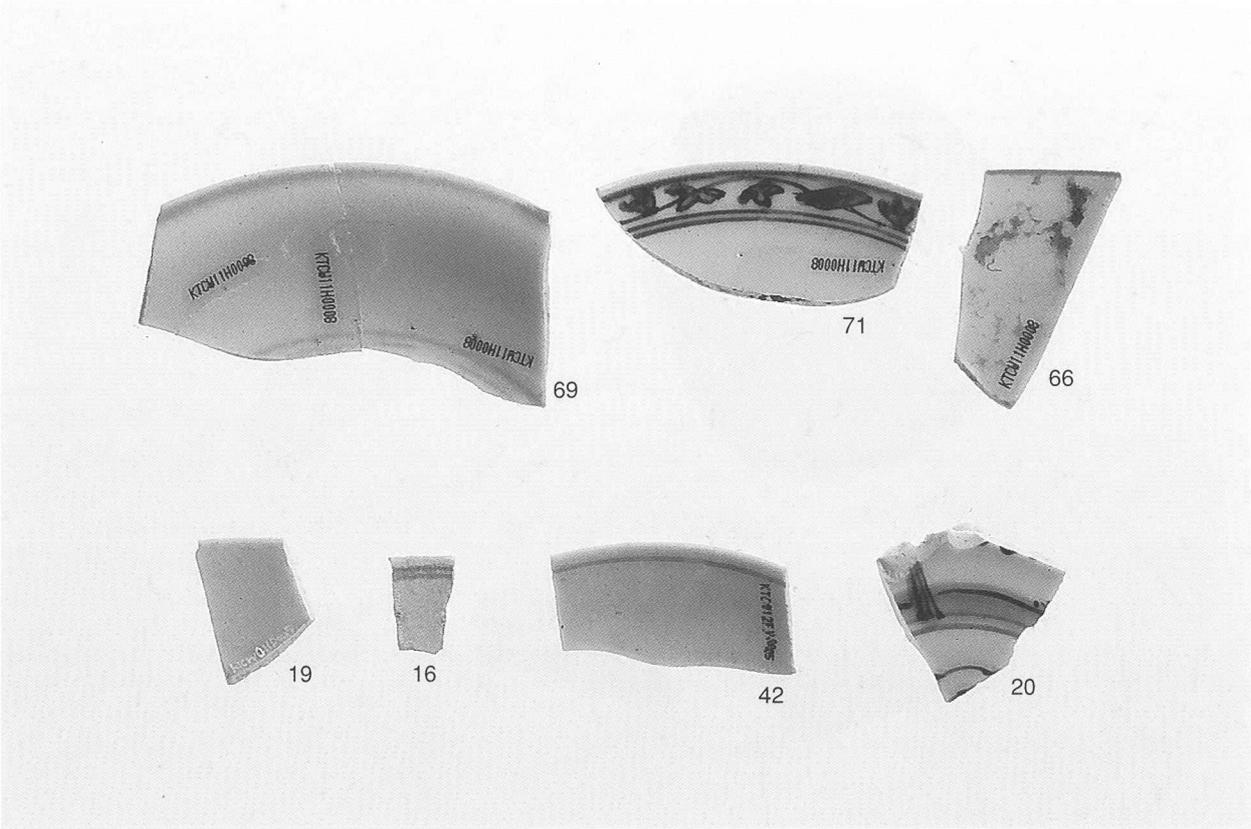
11H区 S D a04 立面 (西より)



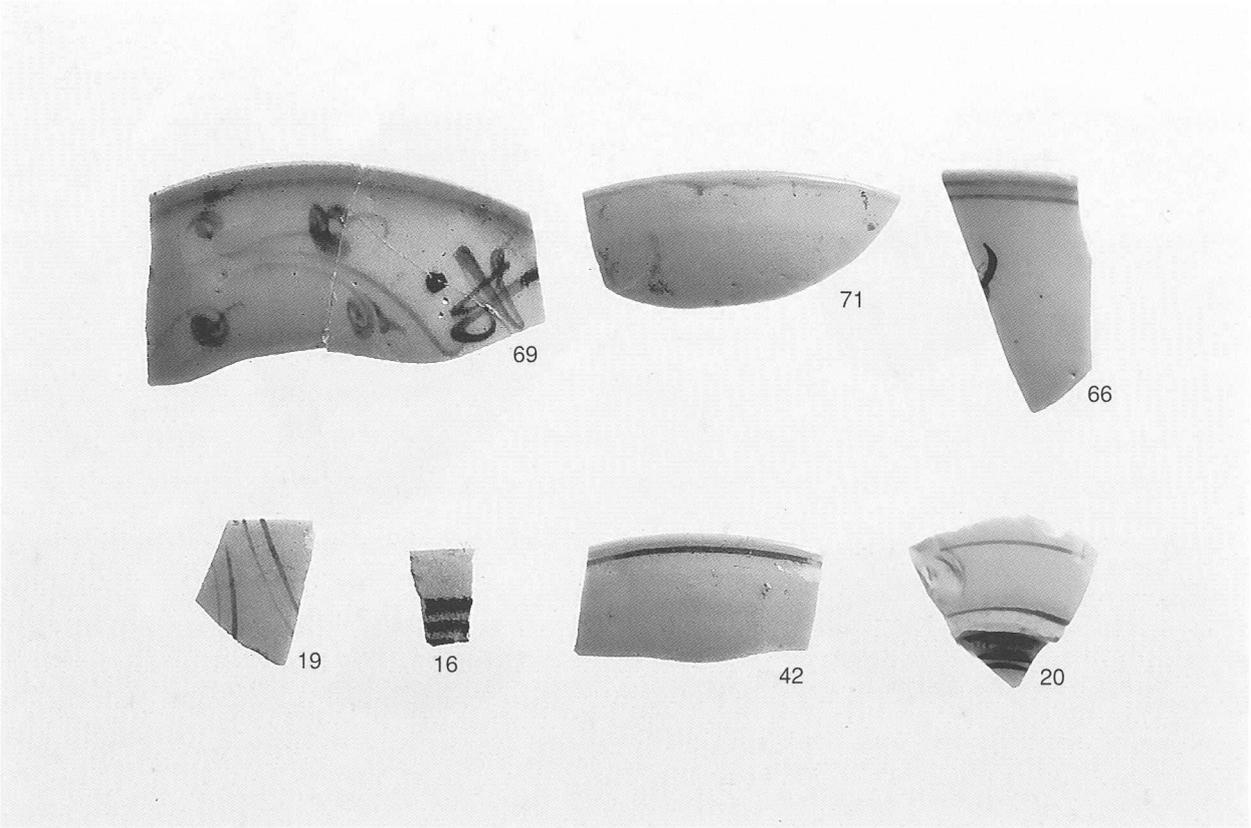
出土遺物 (1)



出土遺物 (2)



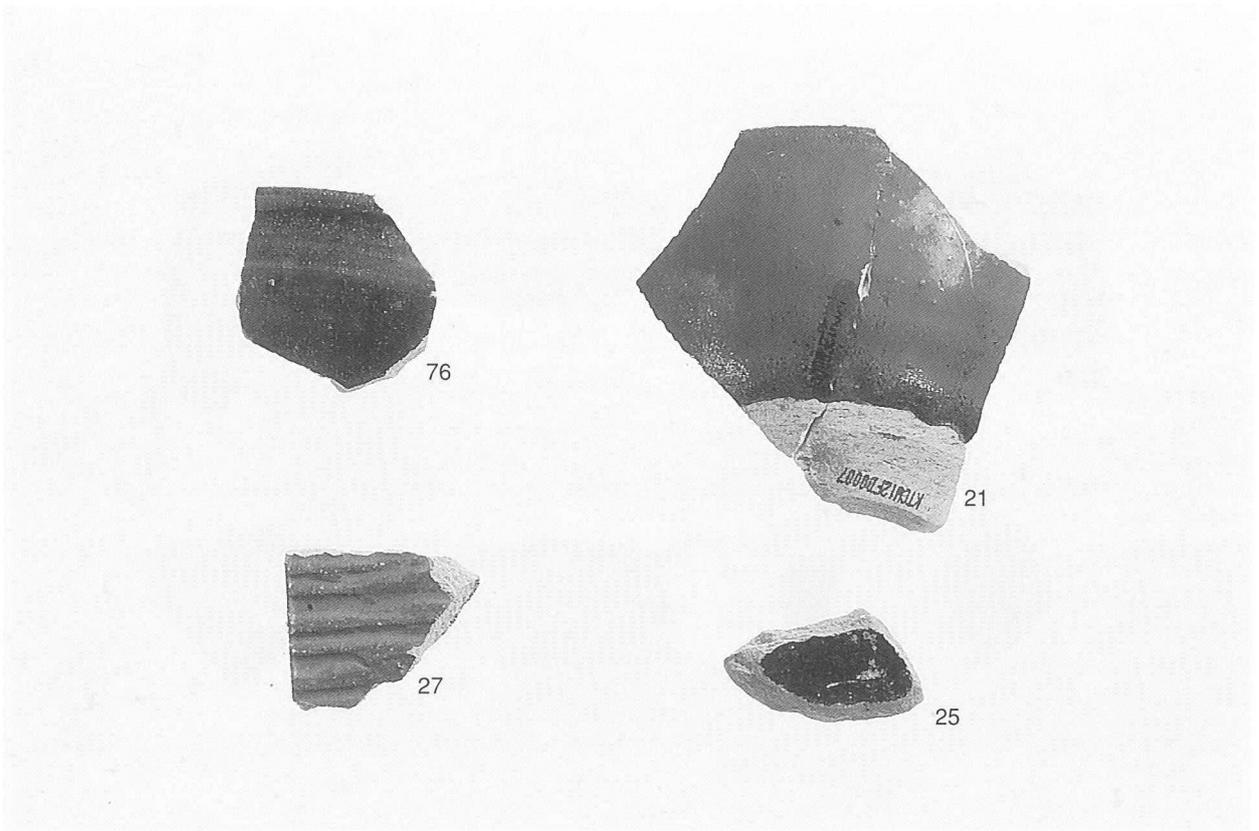
出土遺物 (3)



出土遺物 (4)



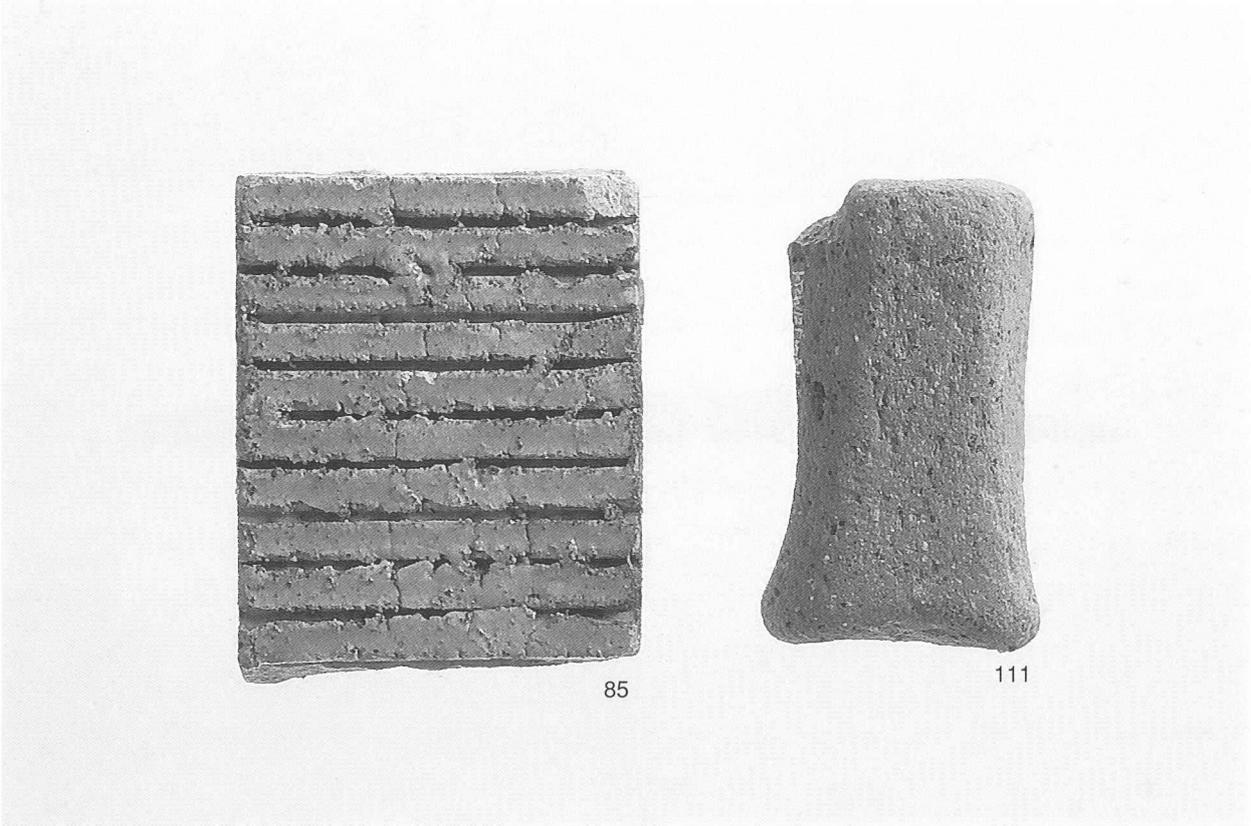
出土遺物 (5)



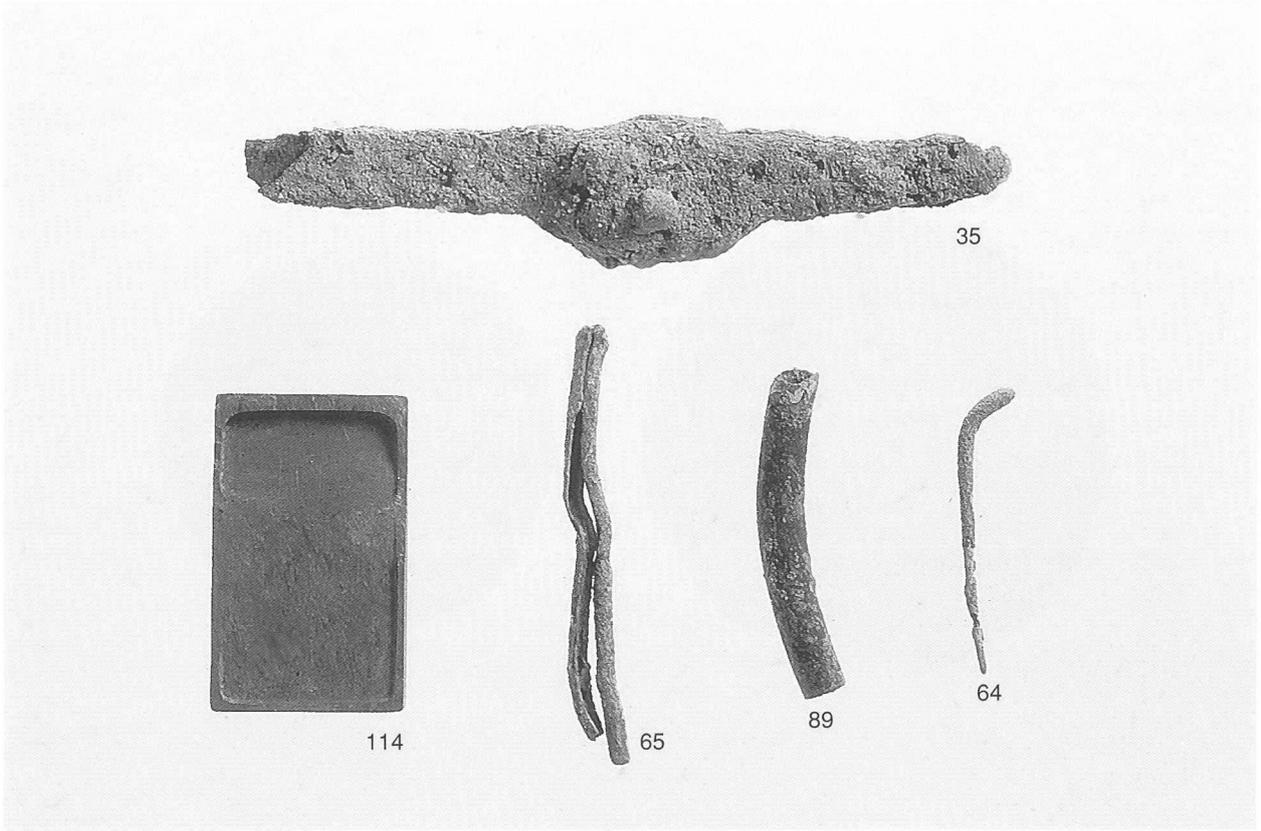
出土遺物 (6)



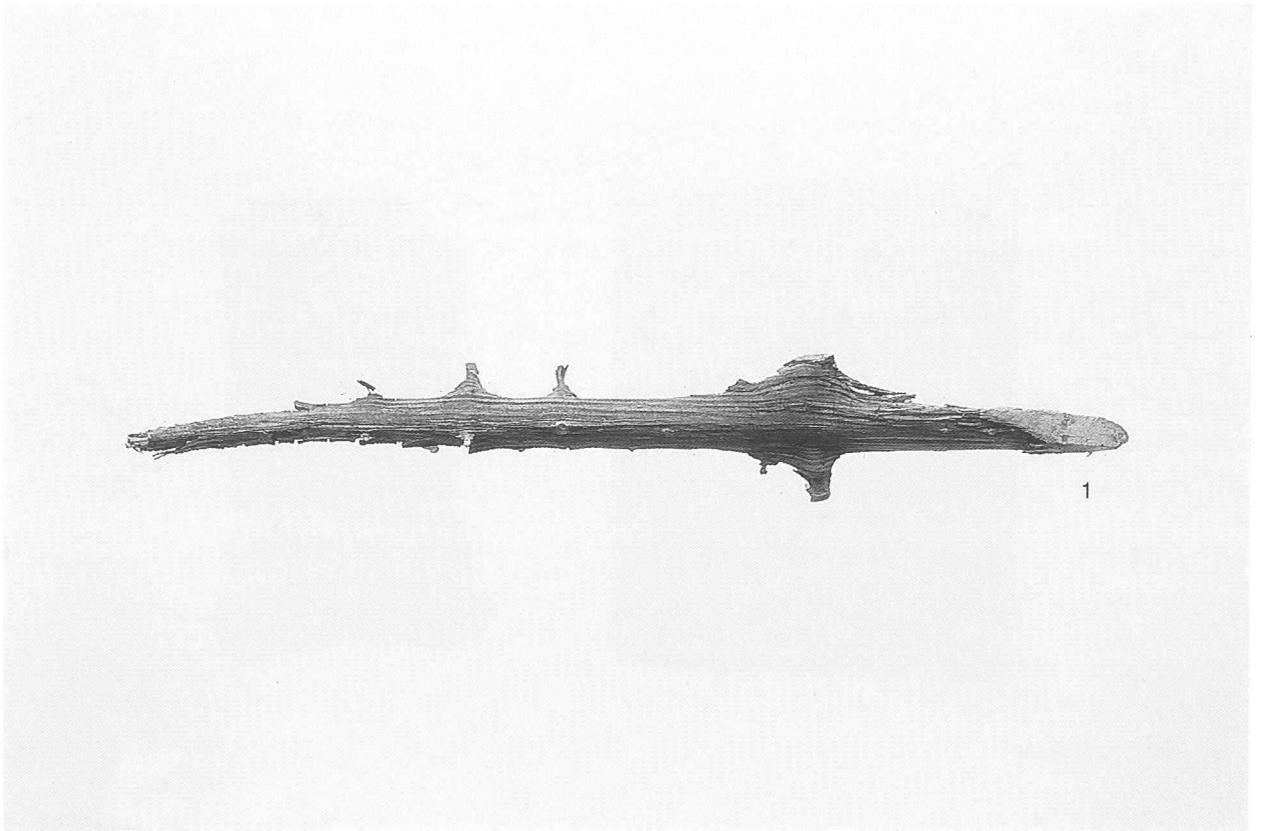
出土遺物 (7)



出土遺物 (8)



出土遺物 (9)



出土遺物 (10)

報告書抄録

ふりがな	たかまつじょうあと（にしのまるちょうちく）いち							
書名	高松城跡（西の丸町地区）I							
副書名								
巻次								
シリーズ名	サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告							
シリーズ番号	第3冊							
編集者名	古野徳久							
編集機関	財団法人香川県埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒762-0024 香川県坂出市府中町南谷5001-4			TEL:0877-48-2191				
発行機関	香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター							
発行年月日	西暦2001年8月31日							
総頁数	目次等	本文	観察表	図版	挿図枚数	写真枚数		
76頁	14頁	34頁	6頁	22頁	36枚	44枚		
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町	遺跡					
たかまつじょうあと 高松城跡 （西の丸町地区）	かがわけんたかまつし 香川県高松市 にしのまるちょう 西の丸町 11番3号外	37201	—	34度 20分 46秒	134度 3分 00秒	19990401 ～ 19990623 20001127 ～ 20001222	390m ² 280m ²	サンポート高松総合整備事業に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
高松城跡 （西の丸町地区）	屋敷跡	江戸時代	掘立柱建物群、石積み遺構、 柵列、溝、石組み溝		陶器、磁器、瓦		遺構面を3つに区分	

サンポート高松総合整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告
第3冊

高松城跡（西の丸町地区）Ⅰ

平成13年8月31日発行

編集 財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
香川県坂出市府中町字南谷5001番の4
電話（0877）48-2191（代表）

発行 香川県教育委員会
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

印刷 太陽印刷株式会社

